

本線沿道は終端驛通達を除き未開放地多く加ふるに砂漠地帯なるを以て開通後開墾事業遅々なるも通達は背後地より受くる貨物夥しく本線の將來は之によりても相當の發達を期し得べし

鄭 洮 線 本線は大正八年九月七日締結せられたる四洮鐵道借款契約に依り鄭通線に引續き建設する豫定なりしも線路經過地に關し支那側と調整は未接衝の上漸く原契約を確定して更に交通部と交渉するところありしが當時北京の政局は動搖して久しく熄まず大正十一年四月遂に奉直間に戰端を開き北京は騷擾を極めたるを以て交渉の一切を中止し同年八月に至り政局稍々安定せるを以て交渉を再開し鄭通線建設資金調達と同一形式に依り四洮鐵道短期借款契約を締結し工事に著手せり

本鐵道は大正十一年九月起工し同十二年七月七十哩の地點なる大平川迄假營業を開始し同年十月末軌道敷設を了し同年十一月一日より鄭家屯洮南間百三十九哩三の假營業を開始せり工事著手後僅々一箇年にして約百四十哩の開通を見るに至れるは途中平坦の地多くして比較的難工事少かりしと雖結氷期をも尙工事を續行して遼河に延長千八百九十八呎の橋梁を架し材料の配給を便にし又軌道敷設機を使用して一日最長二哩半の敷設を強行せる事も亦其一因たりしなり其後各驛の施設を了り大正十三年七月一日より本營業を開始せり

只本工事に當り全體を通じて困難を感じたるは地勢の關係より地下水の缺如せることにして之が爲め工事に要する給水施設に尠からざる困難に遭遇したり

本線の沿道は地勢に起伏あるも所謂蒙古の大原野にして可耕地積廣大なるを以て開通後移住者陸續として來り發達頗る速かなれば將來本鐵道に依り輸送せらるべき貨物は頗る多かるべく又滿蒙境界の交通路として東蒙の文化と天與の富源を開拓するに有意義のものとなるべし
今大正七年度以降昭和元年度に至る本鐵道全線の客貨輸送數量及營業收支を表示すれば左の如し

四洮鐵道輸送客貨及營業收支

年 度	旅 客	貨 物	總 收 入	總 支 出	差 引 益
大 正 七 年 度	1,314,049人	1,011,400担	1元	1元	1元

同 八 年 度	1,611,217	1,517,217	3,086,688	1,044,441	1,044,441
同 九 年 度	1,901,533	1,451,138	7,084,238	5,921,128	1,155,210
同 十 年 度	1,757,899	3,800,310	7,841,136	7,841,136	0
同 十 一 年 度	2,559,883	4,477,227	1,641,353	1,170,611	490,742
同 十 二 年 度	3,910,866	5,859,904	2,338,576	1,590,008	1,098,168
同 十 三 年 度	5,043,367	6,579,950	3,495,246	1,771,337	1,723,909
同 十 四 年 度	6,337,710	4,101,181	5,177,326	2,562,880	2,614,446
昭 和 元 年 度	7,812,666	1,191,181	7,590,754	4,110,000	3,480,754

三 洮 昂 鐵 道

本鐵道は軌間四呎八吋半にして四洮鐵道の終點洮南より東支線の一驛昂々溪に接する模古氣(此の地を洮昂線にて昂々溪と稱す)に至る延長百四十二哩八を有し奉天官憲と會社との間に建造請負契約成立し大正十四年八月二十八日交通部の承認を得て起工したるものなり

本鐵道は大正十四年三月十八日測量に著手し同年五月二十八日より工を起し翌十五年七月四日終端まで軌道敷設工事を了り同月十五日より假營業を開始せり

本線は廣漠たる原野を横斷し地形概ね平坦にして洮兒河(九二米五)嫩江(七六七米餘)の二橋梁の外特に記すべき工事なきも僅々一箇年餘にて百四十餘哩の線路開通を見るに至れるが這是結氷期を通じて軌道敷設機を充分に利用したる結果なり

假營業開始早々營業成績の見るべきものありしに十五年八月中旬より北滿嫩江流域一帯に互り降雨夥しく九月上旬に至り嫩江河増水甚しく線路に浸水して築堤の決潰、橋梁の破損等頻々として起り附近一帯は一大湖沼と化し應急復舊の作業は其效なく九月二十八日より五廟子(二〇四哩七六)以北の運轉を中止するの已むなきに至り其後減水の模様更になく百方善後の方法を講ずる中一箇月を経て十月二十日頃より漸く減水し始めたるを以て直ちに復舊工事に著手し同年十二月十四日に至り之を開通せしむるに至れり

本鐵道沿線は泰來氣附近を除き一帯自然に放棄せられたる原始的地域なるが可耕地積の廣大なると東西の交通便利となりたるを以て速に

移住を喚起して移り来る者陸續として集まり開墾は著々と行はれつゝあれば近き將來に於て本鐵道により附近一帯の多量の農産物は市場に搬出せらるべく四洸線と相俟つて東蒙開發の先驅たることは明かなり

今大正十五年一月より昭和二年三月末迄に至る本鐵道の貨客輸送數量及營業收入を表示すれば左の如し

年 度	旅 客	貨 物	總 收 入
大正十五年(自一月至十二月)	一五八、五三七 ^A	三八、二七三 ^B	四〇五、三〇六 ^C
昭和二年(自一月至三月)	五一、五八五	一六、二〇三	一八三、九七八

四 京奉鐵道

本鐵道は四呎八吋半の廣軌にして其の昭和二年三月末現在に於ける營業哩は北京奉天間の幹線五百二十三哩一四支線として溝帮子營口(河北驛)間五十六哩六、錦州義州間三十一哩五、義州口北營子間二十八哩七五、口北營子北票炭礦間九哩七、打虎山彰武間六十九哩八四、合計七百十九哩五三なり

本鐵道は支那最古の鐵道にして千八百七十七年(光緒三年)唐山開平礦務局總辦唐景星開平炭礦を採掘するも運搬の道無きを以て時の直隸總督李鴻章に申請し勅許を得て唐山胥各莊間七哩の所謂唐胥鐵道を敷設する事となり英人ブーネイ及びキングダー兩名の技師を聘して實行に懸れり然るに當時保守派の反對するところとなり敷設許可は遂に取消さるゝに至れり然れども千八百七十八年再び申請して驢馬に牽引せしむる輕便鐵道を敷設することとし千八百七十九年軌道の竣工を見たるものなり

千八百八十一年に至りて前記驢馬を廢して初めて機關車を使用することとなり千八百八十五年開平鐵路公司成立して前記唐胥鐵道を買収し以て蘆臺迄延長せしめ翌千八百八十六年竣工と同時に之を唐蘆鐵道と稱せり更に千八百八十七年に至りて前記開平鐵路公司是中國鐵路公司と改名し天津迄の延長工事に著手せるが千八百八十八年に竣工を告げ唐津鐵道と稱し同年別に唐山より東に延長して古冶に至るに及び之を冶津鐵道と改稱せり而して此の期間は總て民營に懸る時代なりとす

千八百九十一年に至り資金の關係より官資に依り古冶山海關間の敷設に著手し千八百九十二年に古冶灤州間を、千八百九十三年に灤州山海關間を敷設して所謂關内の敷設は之を以て一段落を告げ引續き關外の敷設に著手せり而して千八百九十四年山海關綏中間の工事を了れりが偶々日清戰爭の勃發により以後の工事は暫く中止する事となり千八百九十五年日清の媾和成立後李鴻章は之を北京に延長を圖り翌千八百九十六年北は天津より馬家舖西は蘆溝橋に至る鐵道を敷設し之を津蘆鐵道と稱す而して又前記天津古冶間の民營鐵道を買収して國有となし津榆鐵路總局を置けり即ち此の間を官營時代となす

次に千八百九十八年十月中英公司より英貨貳百拾萬鎊を借款したる以後は即ち借款官營鐵道となり斯くて千八百九十九年綏中より溝帮子を經て營口河北驛に至る鐵道を完成し千八百九十年には溝帮子打虎山間の工事を終へ一方關内の鐵道を馬家舖より正陽門に達せしめ又東便門より通州に至る支線をも敷設し千九百三年には打虎山新民屯間の工事を竣成せしめたり

又日露戰役中我國が敷設せる奉天新民屯間の輕便鐵道を千九百五年百六十萬元を以て讓受け千九百七年之を廣軌に改むるに當り資金參拾貳萬圓を我國より借款し同年愈京奉鐵道と改稱して千九百十一年奉天城迄延長し茲に北京奉天間の全通を見ることとなり同時に會社線奉天驛とも接續遂に京奉鐵道全線の完成を見たるが此間實に三十有餘年の歳月を経たるものなり

次に本鐵道の支線たる錦朝鐵道は千九百二十一年四月工事に著手し錦州義州間延長三十一哩五は同年十二月義州口北營子間二十八哩七五及び口北營子北票炭礦間九哩七は千九百二十四年末に各々竣工開通せるが口北營子朝陽間二十三哩は途中工事を休止して其の儘現在に至れり而して打通線(自打虎山至通遼)と稱する打虎山支線は千九百二十七年一月二十七日打虎山より彰武迄六十九哩八四を開通したるものなり右の如く本鐵道は支那に於ける鐵道中最も早くより著手經營せられたるものゝ一にして其の營業成績も他に比し常に第一位を占めつゝあり今千九百二十年(大正九年)より千九百二十六年(大正十五年)に至る營業收支を表示すれば左の如し

京奉鐵道輸送客貨及營業收支

年 度	旅 客	貨 物	收 入	支 出	差 引 益
大 正 九 年 度	五〇七、六〇三 ^A	七〇、三二五 ^B	一三二、四六五 ^C	八五、八七五 ^D	一四六、七九〇 ^E

大正	十一年度	十一年度	十一年度	十一年度	十一年度	十一年度
四七、一六五九	八、〇九六二五	二五、四八四七四	一三〇、一四、六五〇	一一、四七〇、九三		
五、一七、八七九	六、二〇八、四六三	二〇、六九〇、四四九	一一、九三三、四九九	七、七五六、九五〇		
四〇、三九、九四七	八〇、二、六五六	一八、二八八、二四	一一、三三六、六七七	六、九五一、四四七		
五、六〇三、五四	六、八五九、五九〇	一七、五〇九、五三三	一一、九二二、九〇一	五、五九六、六三三		
六、三二七、二七	七、七二〇、二四一	二四、〇四七、六六六	一三、二二八、二〇四	一〇、八二九、四七三		
四、九九、四九七	五、八二〇、三三六	一三、四八七、一六九	一三、五九八、九八〇	九、八八八、一八九		

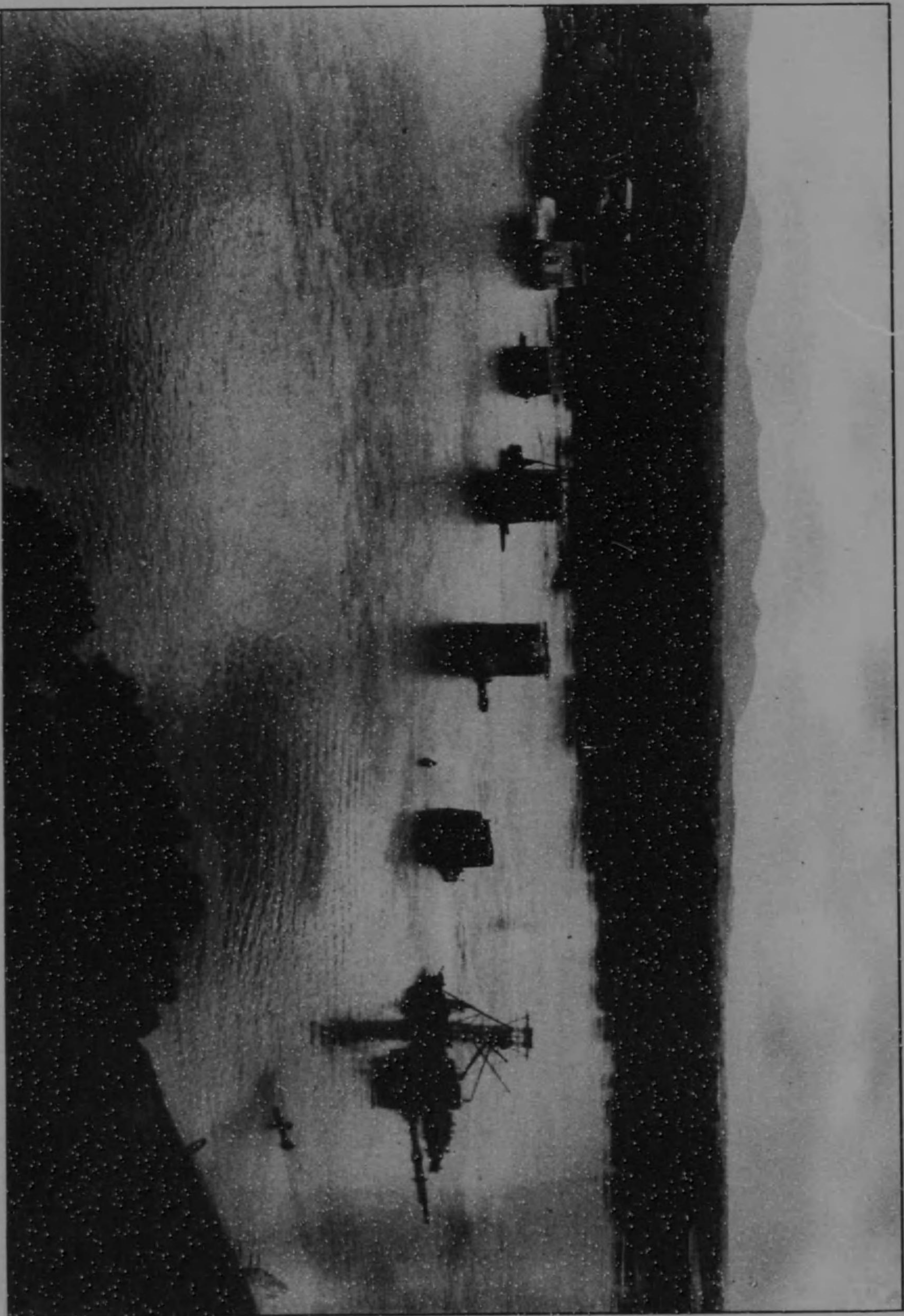
五 吉敦鐵道

本鐵道は吉長線の終驛吉林を起點とし敦化に至る延長約百三十一哩四呎八吋半の廣軌線にして大正十四年十月二十四日北京交通部と會社との間に工事請負契約を締結したるものにして本請負契約は元來正式借款契約の前提として大正七年六月十八日民國政府と日本興業銀行、臺灣銀行及朝鮮銀行の三行との間に締結せられたる豫備契約中に記載せる吉林より延吉南境を経て圖們江に至り會寧に聯絡する鐵道の一部に關するものにして右豫備契約に基き正式借款契約締結に至る迄の暫訂に係るものなりとす

本鐵道は大正十五年三月測量を開始し六月一日起工して目下松花江橋梁工事老爺嶺隧道工事と線路土工其他附帯の工事を施工しつつありて昭和三年十二月迄に全線の開通を見るべき豫定なり

本沿線は會社本線、四洮、洮昂線等の如き平坦の地と異り地勢峻險高低の山脈起伏せるもの多く従つて長大なる松花江に延長四百四十三米八（一、四五六呎）の架橋と滿蒙に於ける最長の稱ある老爺嶺隧道延長千七百米（五、五七七呎四）の開鑿を要し尙多くの橋梁隧道工事と築堤切取に豫想以上のものありて之が完成には曾て見ざるの困難あるが故に之に對する努力又大なるものあり

本鐵道開通の際には吉林省東部の豊富なる林産物は多量搬出を見るに至るべく又蛟河附近に著しく水田の開発せられて之に伴ひ沿道の發達は數年を出でずして顯著たるべく又本鐵道は天圖輕便鐵道と相俟ち將來吉會線の實現を促進すべきものなりとす



吉敦鐵道橋梁工事

六 奉海鐵道

本鐵道は支那資本を以て自國の技術者により敷設せる滿蒙に於ける唯一の鐵道なるが奉天海龍城間延長百四十七哩七軌間四呎八吋半の廣軌線にして奉天省當局が交通部の許可を受け組織せる官民合辦奉海鐵路公司の經營に成るものなり

本鐵路公司は資本金奉天小洋貳千萬元、官民折半の出資にして大正十四年五月設立せられて民間の出資額は沿道の各縣に割當て出資せしめたるものなり

本鐵道の起工は大正十四年七月にして其の後資金の不足、奉天票の暴落等に依り尠からず困難を嘗めたるも當局の努力により著々工事を進め昭和二年二月二十三日迄に草市に至る百七十一哩四の敷設を了し全線の開通は昭和二年九月初旬の豫定なりと

七 金福鐵道

本鐵道は會社線金州驛より貔子窩を経て城子疃に至る延長六十三哩四(一〇二杆一)軌間四呎八吋半の關東州内唯一の私設鐵道にして根津嘉一郎外六十二名の發起を以て大正十三年三月十七日關東長官に敷設を請願して十四年七月七日其の許可を得たり同年十一月十日創立總會を開き日支兩國人を株主とする資本金四百萬圓の株式會社金福鐵路公司を設立したり而して同公司は大正十五年四月二十九日鐵道事業許可並工事施行申請をなし同年五月二十五日關東廳の認可を受けたり

本鐵道は大正十四年十一月測量に着手し翌十五年五月二十六日起工せるが軌道敷設は先づ金州を距る六哩三分(一〇杆二六〇)の地十三里臺より開始し昭和二年三月末日に於ては亮甲店に至る十七哩四(二一三杆四〇二)を竣工せしめたるが全線の開通は昭和二年十月初旬の豫定なり

本鐵道沿線は關東州内金州、普蘭店及貔子窩民政支署管内東海岸地方を通過し半島の背柱山脈は西海岸の會社本線に接近して南行するものにして又本鐵道の通過する東部一帯の地は山岳の起伏せる所多く從て土工費を要し尙半島を海岸線に沿ひて走れるが故に橋梁の多きは共に本鐵道の起業費を多からしめたる所なり

本鐵道の沿線は古來交通不便の地にして人口比較的疎なり一戸當りの耕作面積は廣きも多く雜穀蔬菜の類にして地方的需要を滿たしたるに過ぎざりしが我國の租借地となりてより産業を獎勵し比年惱ませる匪賊も全く掃蕩して今日本鐵道の兩通するに至りしことは農業に一新面目を興へて落花生、棉花、果樹の栽培、水田の開発、養蠶業の發達となり又水産、製鹽業に關しては年々世人の注意を喚起するに至り關東州内の産業開發と共に本鐵道は樞要なる一交通機關となれり

八 開拓汽車鐵道

本鐵道は開原撫鹿(西豐)間三十九哩七軌間一米の輕便鐵道にして資本金奉天小洋壹百萬圓を以て開拓長途鐵軌汽車有限公司に依り敷設されたるものにて大正十四年四月起工同十五年五月全線の開通を見たり

本線は大正二年の所謂滿蒙五鐵道、同七年の滿蒙四鐵道に含まれ我國の投資權確定せるものなるも種々なる理由より實現せざりしうち支那側に於て本鐵道を軌道に自動車を走らすの名義を以て計畫實行せるものにして大正十四年十一月初めて石家臺開原間の假營業を開始したり十五年五月の全線開通に伴ふ竣工部分の假營業に依る總收入額は奉天小洋參拾四萬六千五百六拾參元六角なりと云ふ

尙前記擧げたる諸鐵道の外に本溪湖煤鐵公司の敷設せる安奉線南段驛より廟兒溝驛に通ずる延長五哩の運礦用輕便鐵道あるも目的と規模固より小なるものなるに依り此所に省略す

第二章 海運業

會社は明治四十一年八月大連を起點とし上海航路を、同四十五年四月渤海沿岸諸港との近海航路を、又大正二年十月南支那沿岸航路を開始せしが近海航路は之を大連汽船株式會社の前身たる北清輪船公司に經營せしめ其後大正六年度に於て更に臨時航路を開始したりこれ歐洲戰亂に因る南支那海運界の變調より生じたる過剩船腹の利用策として試みたるものにして同年度初頭其の經營に著手し備船三隻を以て内地諸港浦鹽、臺灣の各港に就航せしめ相當の成績を擧げたるも大正七年三月本航路は南支那航路と共に大連汽船株式會社に讓渡し上海航路のみ營業を繼續せり然るに大正十一年七月一日に至り本航路亦大連汽船株式會社に讓渡し海運業は全く會社直接經營より除きたり

願れば明治四十一年八月會社は歐亞運輸交通聯絡の使命に基づき西比利亞鐵道と會社鐵道線と接續延長したるも更に東洋の貿易中心市場たる上海に向つて大連上海間の定期航路を開始して以來約十四年間多大の犠牲を拂ひ之が經營を維持し以て其の目的を達成したり更に又南支那航路及臨時航路は夫々其當初の目的を遂げ又一面に於ては滿洲の生産物を廣く海外に供給したることとなり國際貿易の發達助長に貢獻したるものと云ふべし而して大連汽船株式會社は會社の讓渡したる航路を中心として更に新航路開拓の爲大連港を中心として各方面に活躍し其の經營は頗る順調に進みつゝあり

左に會社の經營時代に於ける各航路に就き大正六年度の 況を記述せん

第一節 上海航路

本航路は會社經營の主要航路たりしものにして明治四十一年八月日本郵船株式會社所有船神戸丸を翌年五月西京丸を備船して之に就航したるを初めとし大正二年八月帝國海事協會との協議成り二十箇年の契約にて義勇艦隊所屬船神丸を備船して西京丸を解備し大正三年十二月より青島寄港を開始したることは既に十年史に於て記述せり大正六年に至り鹿島丸(二、三五噸)日勝丸(一、四二噸)の二船を神戸丸缺航代船として備船し大正八年には大連汽船會社より博進丸を神丸缺航の代船として就航せしめたり

會社の海運業直營時代は即ち海運界の最も變調を呈したる時期にして運賃の騰落船腹の調節には會社は常に臨機の措置を執り旅客、貨物の運賃改正を行ひしこと十數回に及び航海數も其の實況に従ひ隨時變更せり即ち開業以來各船一週一回の大連出帆を大正九年八月十四日より九日毎の出帆に改め同年九月青島にコレラ發生したる時は検便検査施行の關係より十日二回に改め此以後大正十年五月二日神戸丸の備船滿期迄依然十日二回の航海を續行したるが同船の解除と同時に九日一回とし神丸一隻を以て就航せしめたり

尙會社鐵道線と香港との間に聯絡貨物の取扱ありしを大正七年四月一日廢止することとなし又青島出張所を大正九年七月十五日より廢止して其の業務を大連汽船株式會社に委託經營せしむることとなし大正十一年七月一日日本航路の全部を大連汽船株式會社に讓渡して茲に會社直營の海運業を廢止したり

次に此間に於ける運輸成績を見るに本航路開始以來の成績は左表の如くなるが固より時に消長ありしと雖も大體貨客共に堅實なる發達をなしたり即ち明治四十三年度に於てベストの流行に依り明治四十四年度に於ては支那革命擾亂の影響を受け大正三年度に於ては海運界の不況と時局の爲一等旅客減少ありたり之に反し大正四、五の兩年度は共に海運界の好況時代にして好成績を收め殊に大正五年度に在りては未曾有の増收を得て本航路開始以來八箇年打續ける缺損は一轉して利益を見るに至れり蓋し本航路の經營は會社の主要業務たる鐵道運輸の發展上重大なる關係を有し當初損益を眼中に置かず之に著手したるものにして大正五年度の成績は全く時勢の然らしめたる特例なりと云ふべし翌六年度に於て貨物十五萬七千七百八十六噸旅客二萬四千六百二十三人を取扱ひ大正五年度に比し共に尙増加を示したるも貨物は七年度以降引續き減少し旅客は七年度に一躍三萬二千五百九十二人に増加を見たる外八年度には二萬二千二百二十七人に減じ其の後増加を見るに至らず更に收支の状態を見れば大正六、七の兩年度は海運界の好況と運賃の改正により多額の収益を擧げたるも大正八年以後は戰亂終熄後の一般財界不況の影響を受け各年共損失を免れざりき

上海航路營業收支

年 度	乗客人員	貨物噸數	收 入	支 出	差 引 損 益	平均往復一航海ニ對スル損益
大 正 六 年 度	二四六三三	一五七七八	一八〇二〇九三	一一二五、四四八	五八六、九四八	六、二四四・四

年 度	乗客人員	貨物噸數	收 入	支 出	差 引 損 益	平均往復一航海ニ對スル損益
同 七 年 度	三三、九九二	一四八、一八四	二二五、五七三	二〇七、五三九	一八、〇三三	二、八二七・九
同 八 年 度	三三、三二七	九四、五〇三	一七〇、七九〇	一九九、四九一	二八、七〇五	二、七二四・五
同 九 年 度	三三、三二二	六六、七二二	一〇六、九七五	一七二、六〇〇	六五、六二五	八、六四八・三
同 十 年 度	一四、一八八	四四、四二二	五五、六三三	七四、〇六四	一八、四三二	四、八〇四・七
同 十 一 年 度	二四、八九	八六、一八	一二二、九六〇	一四六、一七五	二三、二一五	四、九五〇・七

備考 大正十一年度ハ七月一日大連汽船會社ニ讓渡セルヲ以テ前年度ト比較不能ナリ

第二節 南支那沿岸航路

會社が船車接續及大連港中繼貨物吸集の目的と撫順炭の香港廣東南支方面輸出の計畫を以て南支那沿岸航路を開始したるは大正二年十月のことにして先づ營口大連香港東間に貨物専用定期航路を開始し後又芝罘、威海衛、青島に不定期航路を起し大正三年四月香港航路に對し回數を増加し又大正四年十月開始したる青島、上海間の貨物航路あり是等は何れも成績良好にして豫期以上の結果を收めたるが大正七年二月前記各航路就航備船泰平丸（三、四二四噸）鹿島丸（一、四七三噸）神王丸（二、一九九噸）三隻と共に之を大連汽船株式會社に讓渡せり

大正六年度に於ける本航路の營業收支を示せば左の如し

年 度	貨物噸數	收 入	支 出	差 引 利 益	平均往復一航海ニ對スル損益
大 正 六 年 度	一〇、六八九	一、七九三・七	九七、二七〇	二五、一一七	一、一四六・〇

第三節 臨時航路

本航路は南北支那海運界が歐洲戰亂に因り受けたる急激なる變調より所屬船々腹に餘剰を生じたるを以て之を臨時的に有利の方面に利用

せんとして大正六年度初頭より日本内地、浦鹽、臺灣の各港に向け航せしめたるものなるが營業成績は意外に良好にして即ち輸送貨物四萬五千四百六十七噸其の収益は貳拾貳萬四千貳百拾九圓を擧げたり而して本航路は往航に豆粕及石炭を積込み復航に北海材と臺灣より砂糖の輸入を主としたるものなり

左に配船狀況を示さん

- 鹿島丸 大連、橫濱、小樽、止別、猿狹、函館、浦鹽、伏木、名古屋、唐津、直江津、門司各港不定期
- 神王丸 大連、浦鹽、牛莊、基隆、橫濱各港不定期
- 泰平丸 大連、基隆、打狗各港不定期

以上の三隻により此の間往復十航海半の就航を見て大正七年二月大連汽船株式會社に本航路の經營を讓渡せり大正六年度に於ける本航路の營業收支を示せば左の如し

年 度	貨物噸數	收 入	支 出	差 引 利 益	平均往復一航海ニ對スル損益
大 正 六 年 度	四九四六七噸	六三、一五三圓	四一、〇九三圓	二二、〇六〇圓	二、一〇三圓

右の如く會社の海運業は大正十一年七月を以て全部大連汽船株式會社に其の經營を讓渡せるも會社は創立と共に早くより海運業に著眼して別に大連汽船會社を起さしめ之を援助指導して將來擧げて海陸輸送の聯絡と滿洲主要物産の販路開拓を之に委せんとし先づ會社の直接經營より始め其の目的の大半を達したる時に於て大連汽船會社の基礎亦漸く鞏固となりてを以て所期の如く一切を移讓して益々斯業の發展を期することとせり

第四節 營業收支

今大正六年度より同十一年度に至る各航路全部の營業收支を表示すれば左の如し

年 度	收 入	支 出	差 引 損 益
大 正 六 年 度	三六一、六三三圓	二五五、三三九圓	一〇六、二九四圓
同 七 年 度	二二九、五七四圓	二〇七、五〇三圓	二八、〇七〇圓
同 八 年 度	一七〇、七〇三圓	一九八、四九一圓	二五、五八二圓
同 九 年 度	一〇六、九七五圓	一七、二〇〇圓	六五、七七五圓
同 十 年 度	五五、六三三圓	七四、〇六四圓	一八、四三二圓
同 十 一 年 度	一四、九〇〇圓	一四六、七七九圓	三二、二七九圓

備 考

- 南支那航路及臨時航路へ大正七年二月何レモ大連汽船會社へ讓渡ス
- 近海航路へ大正七年三月大連汽船會社へ讓渡ス
- 上海航路へ大正十一年七月大連汽船會社へ讓渡ス

第三章 港灣及埠頭

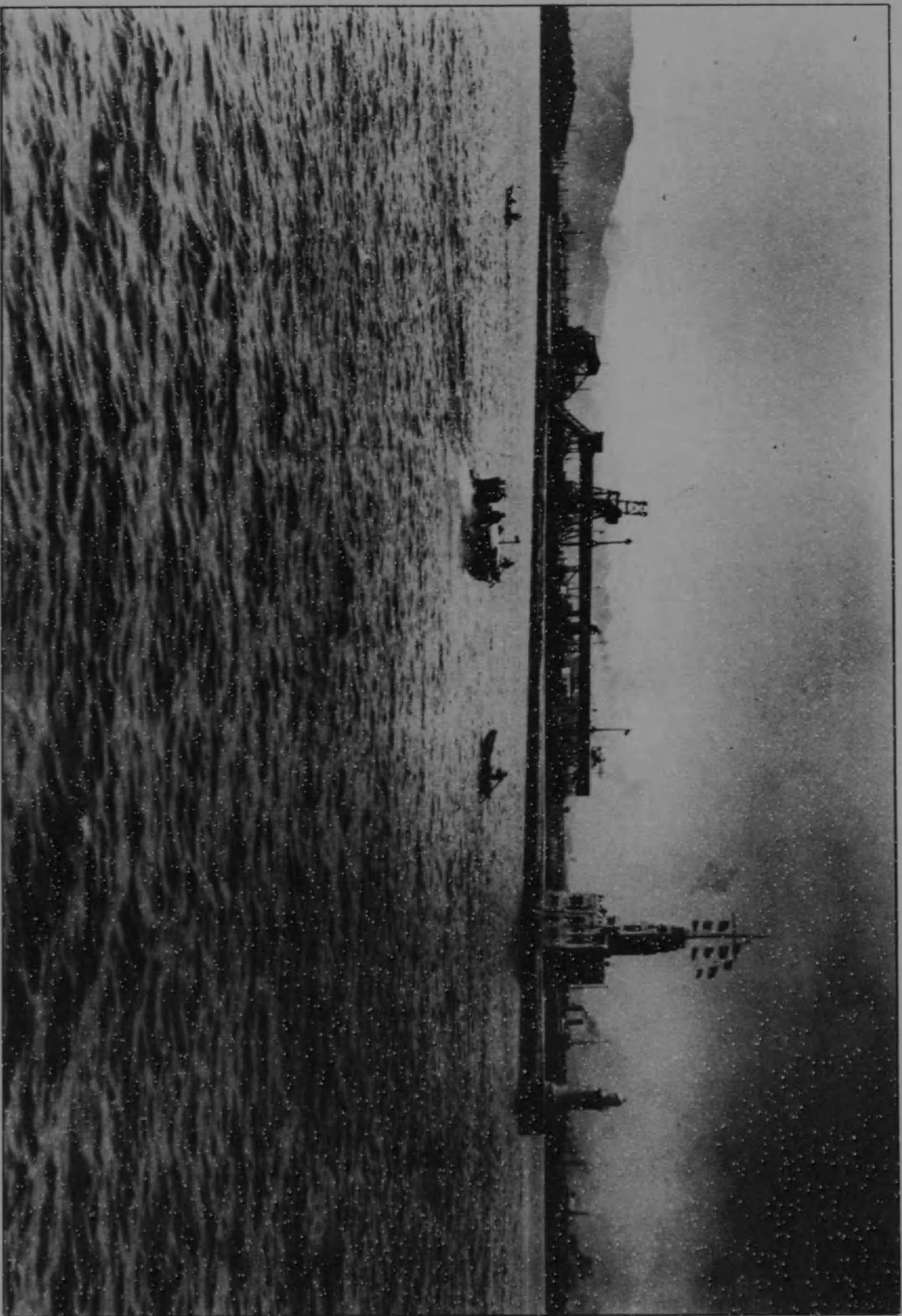
第一節 築 港

會社引繼當時の大連港は僅に第二埠頭及甲埠頭の落成せるのみにして、第一埠頭南部の岸壁竣工せるも北部は半成の儘にして防波堤の東半部（一町餘）に稍見るべきものありしも西半部は全く著手したるを見ず又東防波堤にありても僅に捨石工事をなせるのみにして工程其の半に達せざるの状態なりしに於て會社は大體露國の計畫を踏襲したるも將來の規模に出來得るだけ餘裕あらしむる目的を以て既成部分の改善修築と未成工事に對する考案は適當に之を圖りて多く最新の技術を採用して著々其の工程を進め今や豫定計畫の大半を了へ現に一萬二千二百五尺の西北防波堤と千二百二十一尺の東防波堤とを以て抱擁する内港に於て二千噸級一隻、三千噸級五隻、四千噸級三隻、五千噸級八隻、六千噸級六隻、八千噸級六隻、一萬噸級二隻、合計三十一隻（十七萬三千噸）を一時に繋留せしめ得べき岸壁にして此の延長一萬四千三百九十六尺にして此の水上面積は約九十萬坪を算し年額約七百萬噸の貨物を吞吐するの能力を具備するに至れり

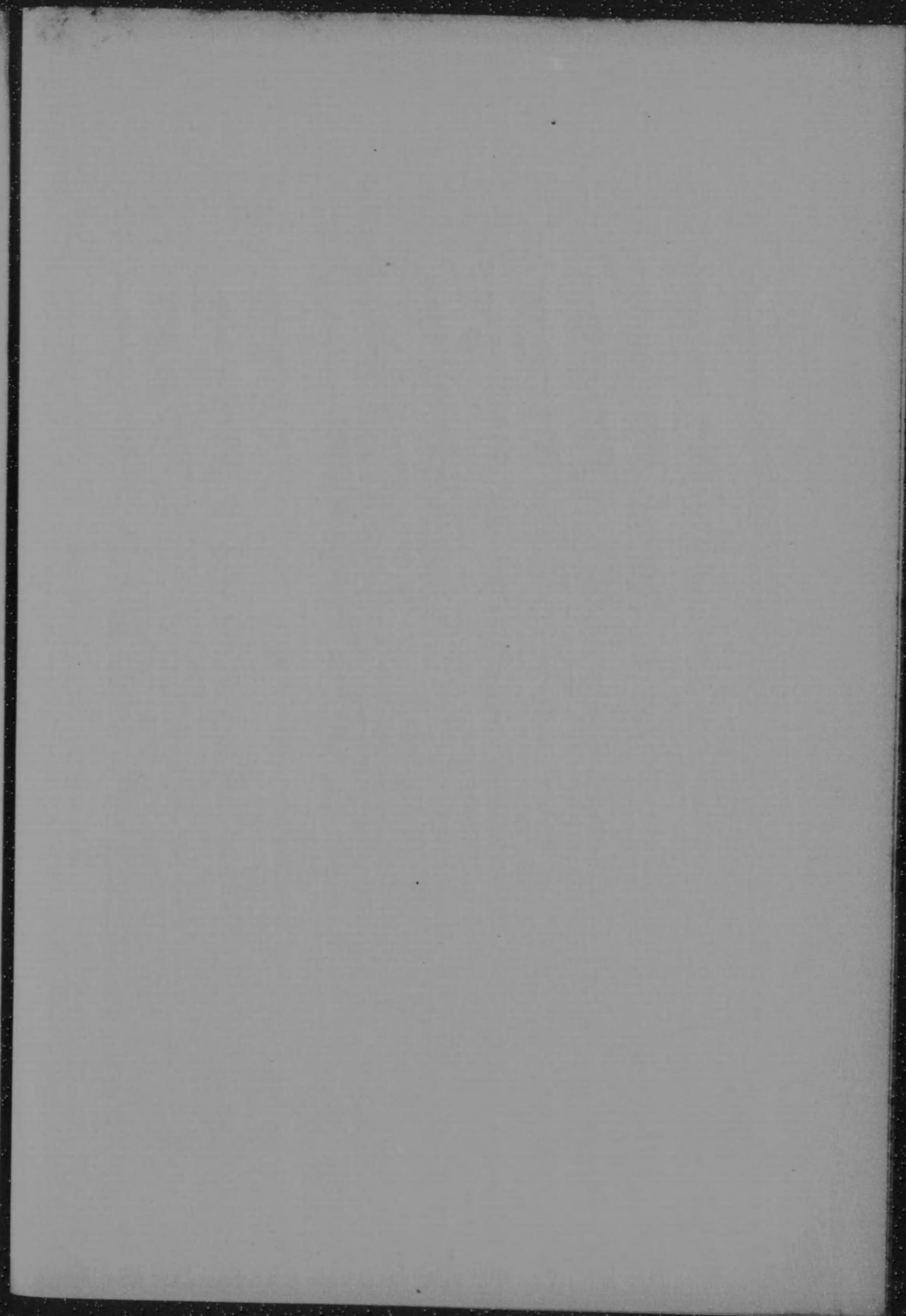
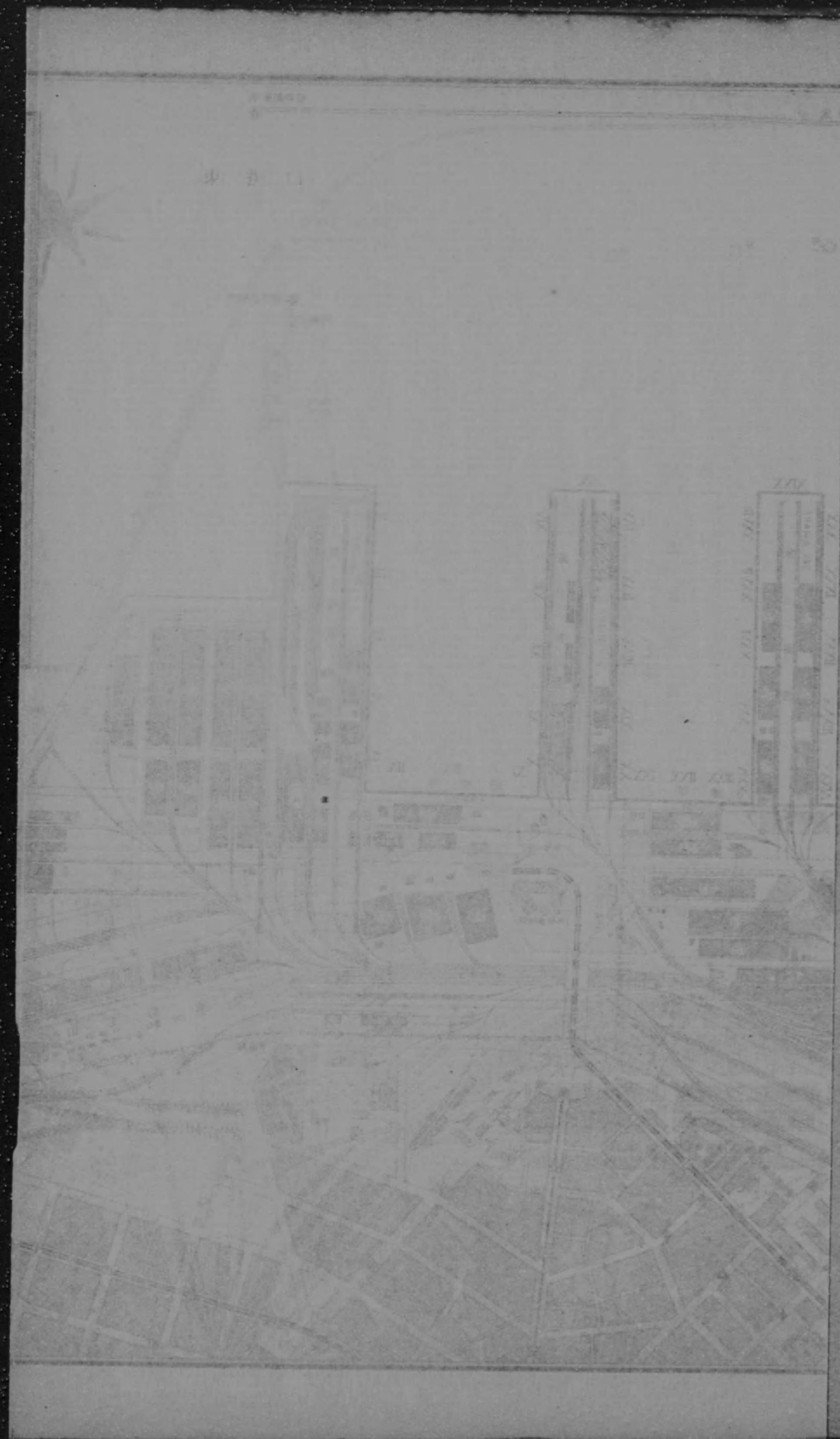
繋船區域は引繼當時より大正三年迄第二埠頭西側より東方に向ひ順次アルハベツト順の名稱を用ひたりしも大正四年度より第一埠頭北端より西方に向ひて羅馬字の稱呼に改めたり

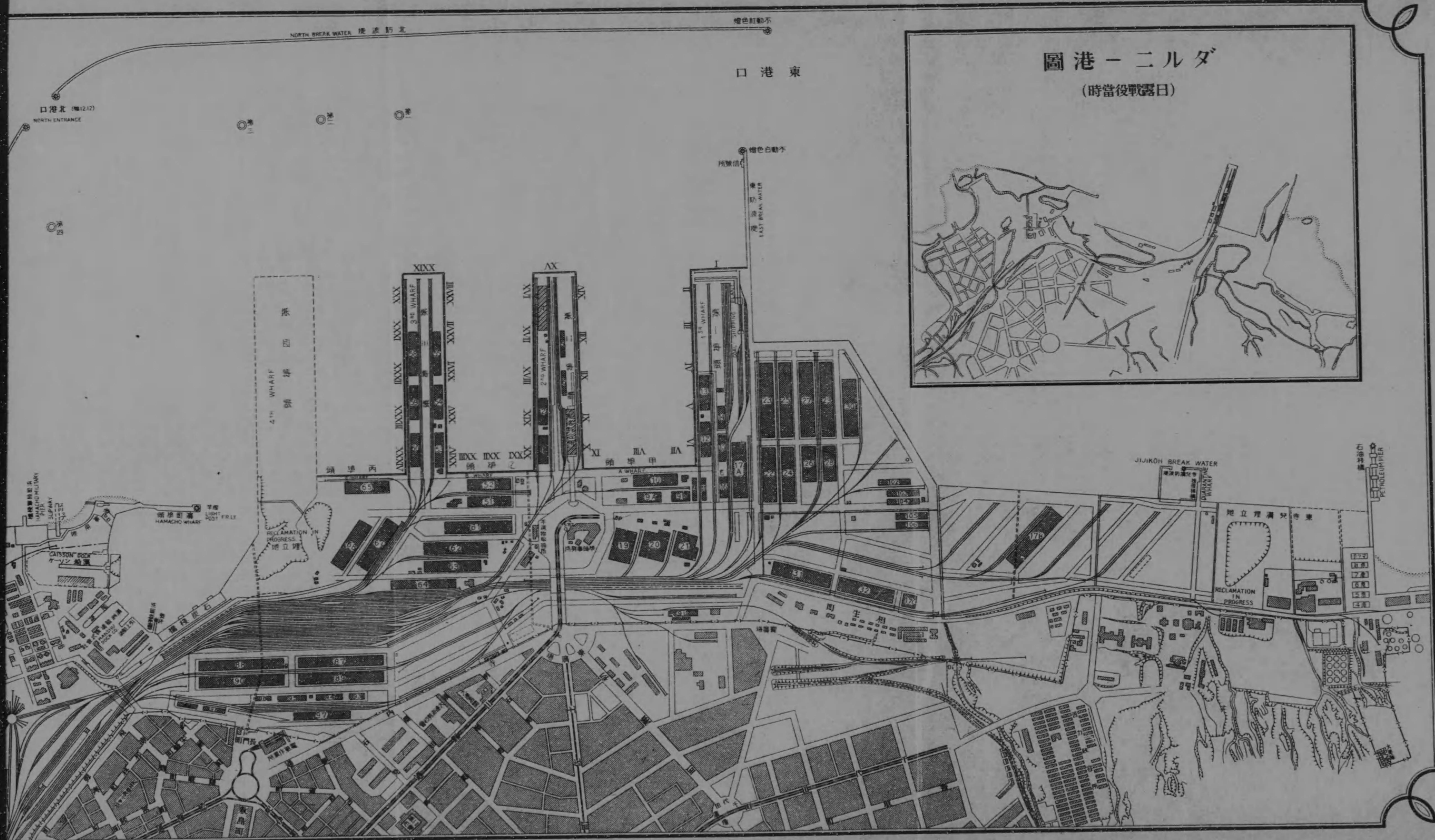
之に加ふるに昭和六年に至り目下築造中の第四埠頭の竣工を見るに至らば此の岸壁延長四千六百尺にして五千噸級一隻、六千噸級三隻、八千噸級三隻、一萬噸級二隻、合計九隻（六萬七千噸）を繋留し得るが故に前記既成岸壁と合して總延長一萬八千八百九十六尺となり尙寺兒溝棧橋並大山埠頭と大連港對岸に現に築造中にかゝる甘井子石炭専用埠頭の完成したる曉は是等のものを合して裕に年額一千萬噸以上の貨物を吞吐するの能力を具有するに至るべし前記の大山埠頭は沿岸航行戎克船を碇泊せしむる爲に築造せるものにして三十石乃至千石の戎克船（一噸は十石に當る）約三百隻を繋留せしめ得るものにして同埠頭の兩側に隣接して延長二千三百尺の荷揚場あり

以上の施設に對し會社が昭和二年三月末日迄に投じたる金額は築港費貳千九百七拾九萬五千貳百七拾貳圓五拾五錢、埠頭設備費、倉庫費及事務所費其他にて壹千八百九拾七萬四千百參拾圓貳拾壹錢、船舶四百貳拾壹萬八千四百四拾圓七拾錢、計五千貳百九拾八萬七千八百四



大連港外より石炭出込機カータンバーを望む





東 港 口

圖 港 - 二 爾 達
(時 當 役 戰 露 日)



北 港 口 (緯 12 度 12 分)

不 動 白 色 燈 塔

第 四 號 碼 頭

燈 塔 燈 塔

北 港 口 燈 塔

東 兒 滿 立 地

地 立 地 在 進 行 中

石 油 碼 頭

地 立 地 在 進 行 中

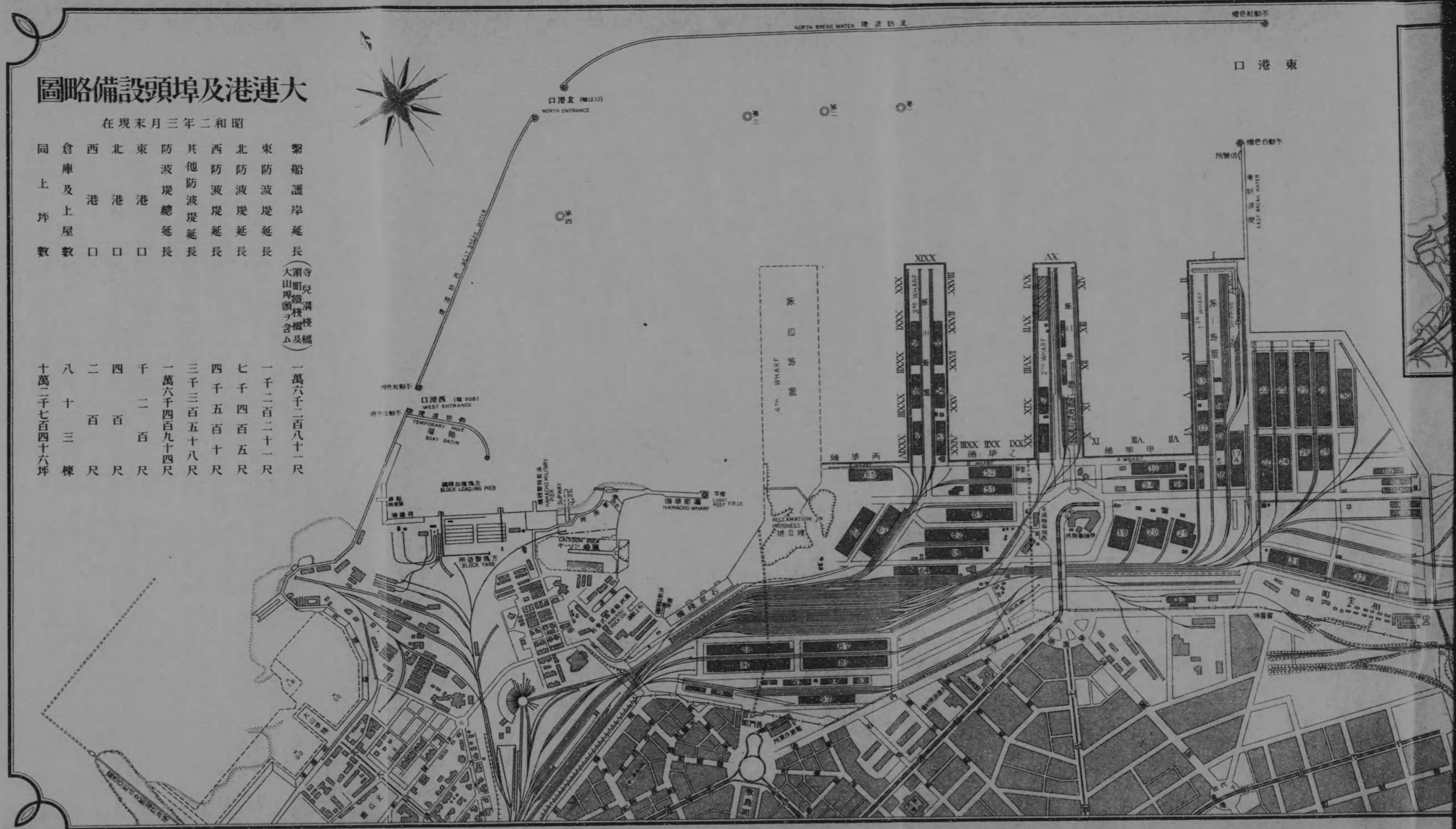
大連港及埠頭設備略圖

昭和二年三月末現在

同	倉	西	北	東	防	其	西	北	東	繫
上	庫	港	港	港	波	他	防	防	防	船
坪	及	口	口	口	堤	防	波	波	波	護
數	上	口	口	口	總	波	堤	堤	堤	岸
	屋	口	口	口	延	堤	延	延	延	延
	數	口	口	口	長	延	長	長	長	長

寺兒滿棧橋
大頭嶺子含△

十萬二千七百四十六坪	八十三棟	二百尺	四百尺	千二百尺	一萬四千四百九十四尺	三千三百五十八尺	四千五百十尺	七千四百五尺	一千二百二十一尺	一萬六千二百八十一尺
------------	------	-----	-----	------	------------	----------	--------	--------	----------	------------





拾參圓四拾六錢に及び其の他旅順、上海等に施設せる費用を合すれば總計五千四百拾壹萬五千貳百四拾參圓拾貳錢の巨額に達せり
 今各繫留區域の名稱、長及水深並大正六年度以降昭和元年度に至る各年度の岸壁延長を擧ぐれば左の如し

第二編 會社の事業	第二埠頭							甲埠頭			第一埠頭					繫船區域	長 サ	水 深(大千潮面下)			
	第一區	第二區	第三區	第四區	第五區	第六區	第七區	第八區	第九區	第一區	第二區	第三區	第四區	第五區	第六區				第七區	第八區	第九區
	四〇〇	四〇〇	四二四	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	三四四	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	五六八	三〇 _R	
	三〇	三〇	三〇	四〇	三三—四〇	三〇—三三	三〇—三三	三〇	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三〇 _R	

昭和 元 十 十 十 十 十 十 同 同 同 大 正 六 七 八 九 同 同 同 昭 和 元 十 十 十 十 十 十 同 同 同 大 正 六 七 八 九 同 同 同	年 度 別	岸壁延長
		一四、二九六
		一四、二四五
		一四、二四五
		一三、三九五
		一三、三九五
		一一、五八八
		一一、六三〇
		一三、三五四
		一〇、五五四
		九、七五四
		一四、二九六
		四、六〇〇

計
第四埠頭築造中
總計延長

外に
長門町埠頭
瀧町埠頭
寺兒溝棧橋
大山埠頭

一、二七九	一、二七九
四二〇	一九
五五八	三〇
四一三	一
一八、八九六	三六—三八
一四、二九六	一ヨリ二六ニ至ル
四、六〇〇	一ヨリ二七及二八、三四ニ至ル
一三、三五四	一ヨリ三四ニ至ル
一一、六三〇	一ヨリ(〇、一、二、三、四)三四ニ至ル
一一、五八八	一ヨリ(〇、一、二、三、四)三四ニ至ル
一三、三九五	一ヨリ三四ニ至ル
一三、三九五	一ヨリ三四ニ至ル
一四、二四五	一ヨリ三六ニ至ル
一四、二四五	一ヨリ三六ニ至ル
一四、二九六	一ヨリ三七ニ至ル

第一八區	第一九區	第二〇區	第二一區	第二二區	第二三區	第二四區	第二五區	第二六區	第二七區	第二八區	第二九區	第三〇區	第三一區	第三二區	第三三區	第三四區	第三五區	第三六區	第三七區
四〇〇	四〇〇	四〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	三〇〇	三〇〇
三三	二五—三〇	二五	二八	二八	二八	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇

一 地理的状況

大連港は東徑百二十一度三十九分十秒、北緯三十八度五十五分五十一秒關東州大連灣の西半部に位し灣の西口角たる黃白嘴の外端より和尙島の東端東嘴子に至る一線以西に灣入せる水域百平方軒を占む、港内を分ちて放泊區(四三・二七平方軒)柳樹屯區(二四・七三平方軒)大連區(三二・二八平方軒)の三とす本港の首腦部たる内港は港の南岸に據り大連區の中にありて北東に面し對岸柳樹屯を距ること一軒南東七・四軒にして港灣の西口角黃白嘴に達すべく後に大連市を負ひ前方三面は防波堤に抱擁せられ此の面積約三千四十平方軒の海面を劃す

イ 潮位及潮流

當港の潮位は風力、潮流等の關係により著しき影響を蒙り時に意想外の高低を示すことあるも今明治四十年より最近に至る是等の統計を見るに干満の差は平均二・一米にして平均最高潮位四・〇一米、平均最低潮位〇・三二米なり尙觀測を開始して以後の實際に於ては大正四年七月二十九日の四・八二米を最高とし最低は八年十二月二十九日の基準面以下〇・七〇米にして其差實に五・五二米なり然れども斯くの如きは全く前例なき稀有の事に屬し毎月の最大干満の差は平均四・二九米とし又毎月の平均最高潮水位は四・〇一米なり而して潮流は總じて大連灣外海の潮流に朝鮮沿岸の寒流支脈とも見るべき寒潮ありて風向及潮汐の遷落等が時に其の方向を變せしむることありと雖も概ね東より西して偶々灣外の沿岸にては漲潮時に東に、落潮時には西に向ひて流れ其の速度は漲潮時は一時間約二・八軒乃至三・七軒、落潮時には一時間約四・五軒の速度を常とす、而して大連灣内の潮流は漲潮時には三山島の西側より海岸に沿ひて灣内に入り落潮時にも亦沿岸を流れ同島兩側より灣外に出で其の速度は一時間一軒乃至三軒なり更に内港附近の潮流は漲潮時には東より西に向ひ北防波堤に沿ひて流る其速度は一時間〇・五軒乃至〇・七軒にして落潮時にありては殆ど防波堤に並行して次第に速度を増し北防波堤を通過する時には通常一時間〇・六軒乃至〇・七軒の速度となれり、次に内港の潮流は漲潮時にありては一般の速度は〇・四軒を超ゆることなく落潮時に於ては〇・三軒乃至〇・五軒にして港口を出づるに従ひ漸次其の速度を増加す

ロ 氣温及結氷

當港は滿洲中に於て最も氣候温和なる位置にあれども尙一年を通じて平均温度攝氏十度内外にして今之を日本内地に比すれば正に秋田の平均氣温と相均しく又山形、長野、石巻、松本、宮古の諸地方と殆ど高低なし、然れども各季に於ける氣温の狀態は全く是等諸地方と趣を異にす固より冬の寒暑に著しき差ありて即ち夏季は大分、多度津、京都、東京と相似たる温度なれども冬季に至れば著しく下降し根室、函館、札幌と伯仲の間に在り今累年の氣温により各月の概要を掲ぐれば左の如し

大連港氣温表 (自明治三十九年 至大正十四年) (攝氏)

區別	月											
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
平均	五・二	三・五	一・八	九・二	一五・三	二〇・三	二二・五	二四・六	一九・八	一三・八	四・七	二・〇
最高	八・五	一三・〇	一七・七	二八・三	三〇・九	三三・〇	三三・七	三五・七	三三・〇	二七・四	一三・〇	三・五
最低	(一) 九・四	(一) 一・九	(一) 一・三	(一) 二・四	(一) 五・〇	(一) 八・三	(一) 一〇・九	(一) 一五・〇	(一) 一八・一	(一) 一〇・八	(一) 二・六	(一) 一・九
平均最高最低較差	七・九	七・六	七・八	九・一	九・二	六・四	六・六	六・三	八・三	八・七	七・七	八・〇

而して當港結氷期は概ね一月初旬より三月初旬に至る約六十日間とす然れども此の期間と雖浮遊せる大小氷塊が風潮に隨ひて港内に漂流去來するを常として堅氷に鎖さるゝが如きことは全く稀有の事なり而して當港の結氷を過去の觀測に徴するに氣温著しく低下して海水温度攝氏零下・五乃至一・〇度に下降すれば海面凍結し零下〇・五度に至れば融解するを常とし其の今日迄の記録に於て結氷が最厚の度を示したるは埠頭附近に明治三十九年及び大正六年の三十種内外にして小崗子海岸附近の如き昭和元年にありては六十種餘の結氷を見たることあり然れども大正七年の如きは一般を通じて最も厚きも僅に三種たりしに過ぎざりき而して今各年度に於ける結氷の最厚を平均するに約十一

港内の結氷は上述の原因によりて發生し酷寒烈風に遇ひ滑積凍結し今尙小蒸汽船の航行、船舶の埠頭著難に支障を來すことありと雖全防
被堤の完成を見たる時には是等の流水を防止し著しく内港結氷の厚度を減少するに至るべし今大正六年以降當港結氷の概況左表の如し

結氷期間表

年次	結氷期間	結氷厚ク廣カリシ期間	埠頭全部氷ニ鎖サレタル日數	其ノ一部ガ氷ニ鎖サレタル日數
大正七年	自六年十二月十七日 至七年二月十七日	自七年十一月二十三日 至七年十二月十八日	三 日	十二 日
同八年	自七年十二月二十一日 至八年二月二十八日	自一月十五日 至二月六日	二 日	二十二 日
同九年	自八年十二月二十七日 至九年三月二十七日	自二月六日 至三月四日	六 日	二十二 日
同十年	自八年十二月十九日 至九年三月十八日	自一月十九日 至二月九日	一 日	一 日
同十一年	自八年十二月十六日 至九年三月十四日	自一月十八日 至二月十八日	八 日	十二 日

年次	結氷期間	結氷厚ク廣カリシ期間	埠頭全部氷ニ鎖サレタル日數	其ノ一部ガ氷ニ鎖サレタル日數
同十二年	自十一月 至一月	自一月十日 至一月十六日	四 日	十一 日
同十三年	自十一月二十七日 至一月二十五日	自一月二十三日 至二月九日	三 日	十一 日
同十四年	自十一月二十七日 至一月二十五日	自一月二十三日 至二月九日	一 日	十二 日
昭和元年	自大正十五年十二月二十五日 至昭和二年二月二十四日	自昭和元年十二月二十六日 至二年二月二十八日	四 日	十一 日

ハ 風浪及濃霧

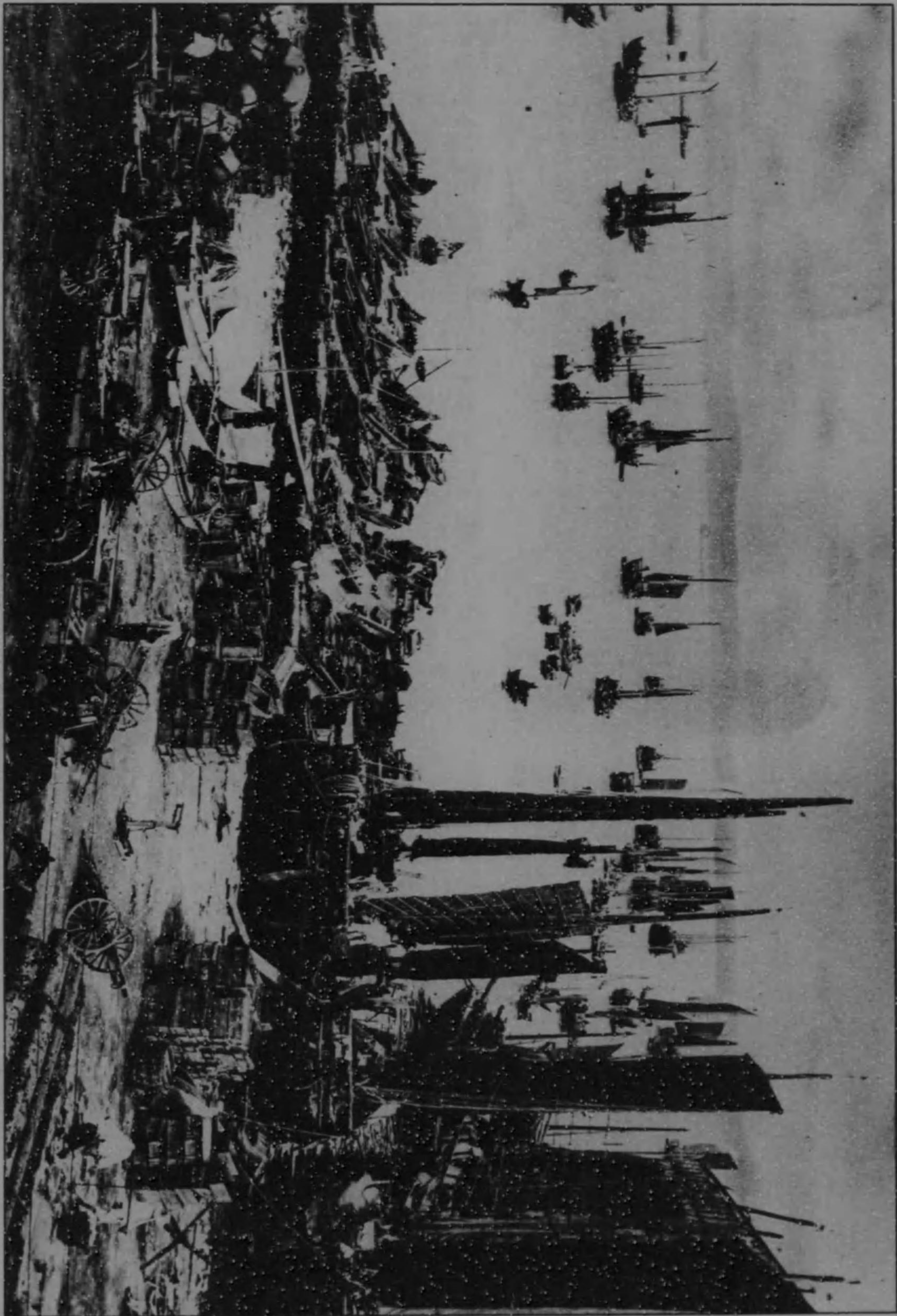
當港に於ける風力は概して北方より來るもの最も強烈にして其回数も亦最も多く南西方面の風之に亞ぎ北西風も亦侮るべからざるものあり之を季節に分てば春夏に南乃至南東の風多く之に反し秋冬の期に入れば北より西風を交へると雖も其の風力に至りては獨り北風強暴を志にす即ち毎年の暴風（即ち一秒時に付十米以上の速度を有する風）日數は明治四十年以降の平均を以て二百十日なり尙明治三十八年より現在に至るまでの最大風速度を観るに大正八年十二月二十八日の 秒時に付二十七米九を其の最なるものとす而して當港の開港は西は僅に三軒乃至五軒に過ぎざれども北は一軒乃至一三軒に及び北東より東に向つては一五軒乃至一七軒とす東及南東は灣口兩側に當り之より對岸

迄は百八十軒を超え東南東即ち灣口正面に於ては開敞實に數百軒とす此方面より灣内に來る波浪は灣口に在る三山島によりて多少緩和せらるることありと雖尙餘勢は灣内に侵入して船舶に危害を及したる例少しとせず往々波浪は一・五米乃至二米の高さと二十米の波長に及ぶことあれども今や内港は三面の防波堤を以て完全に高浪怒濤を防ぎ如何なる暴風の時と雖港内僅に白波小浪點々するを見るに過ぎず此の波高〇・六米に達することなし

霧は當港一帯を蔽ひて春夏の移るに従ひ其の發現頻繁となり毎年七月に至りて其の極度に達し八月に入りて次第に減じ九、十、十一月は殆ど其襲來なく只濃霧の最も甚しきは常に一月なりとす而して濃霧の回数最も多かりし年は大正八年にして四十八回を算し、最も少かりしは明治三十八年及大正元年の十八回なりき明治四十年以降の平均は一年約二十七回なり而して明治四十五年三月東防波堤頭端に大正十四年十二月圓島南三山島、黄白嘴並岩に警霧信號機を昭和二年二月圓島及埠頭屋上にラジオコンパスを設備して濃霧に對し充分なる警戒をなせり

二 設 備

會社引繼當時に於ける築港工用船舶機器は僅に二箇の軌道起重機残存せるのみにして他に何等施設の見べきものなかりしが明治四十年五月以來工場設備に關する計畫を立て先づ明治四十一年五月より混凝土製煉に著手し工事の進捗と諸設備の進行を圖り更に同年六月よりは露治時代未成のまゝなりし寺内通りに面する工場敷地の埋築工事に著手し同四十四年九月に之を竣工したり然るに此の工場用地は第三埠頭築造工事と鐵道線路の擴張の爲之に代ふるに濱町海面に埋築の計畫を立て大正三年五月これに著手し同五年十二月其の竣工を告げ築港施設に要する諸工場を之に移轉したり而して其以後の設備としては目下施工中の第四埠頭築造用のケイソン製造に要するケイソン船渠にして之は濱町の未完成船渠を利用して大正十四年五月十五日より築造に著手し翌十五年九月之を竣工せり之に要する總經費は五拾五萬壹千六百九圓にして尙港内の設備に新設を要したるもの數多あり既に實現せるは現在の小蒸汽五、浚渫船五、汽走泥受船四、碎岩船二、起重機船七、給水船、舢舨等七十隻等を其の主要なるものとす



大正十四年四月築港工事現場

二 工 事

會社は舊國のダルニー大築港を繼承して逐年埠頭港灣の大修築、大増築を行ふに當り諸般の經營に必要な調査を爲したることは固よりにして先づ灣内東寺兒溝沖合より西方香爐礁海濱に至る延長四千間幅員千五百間の深淺測量を行ひ又明治四十年防波堤内大棧橋（現在第二埠頭）先より小崗子沿岸に至る間の海底痕孔調査と港内海底載荷力試験及び潮流の觀測をも悉く實査して逐次各種の工事を實行し今や當初計畫著手せる諸工事は殆ど其の竣工を見たるも時勢の進退は益々埠頭の擴張を促すに至りしを以て會社は更に現存の第三埠頭の西方に第四埠頭（丙埠頭及長門町埠頭を含む）築造工事に著手せり此の外石炭積出専用として大連灣甘井子に石炭積出棧橋を大正十五年より著手し又危險物専用棧橋として寺兒溝棧橋築造に著手せんとし其の準備中なり明治四十年初めて大連港の修築に著手して以來昭和二年三月末迄の築港費は政府よりの引續額五百九拾九萬壹千九百七拾九圓を合し總額金貳千九百七拾九萬五千貳百七拾貳圓五拾五錢に達し之に加ふるに工費用船舶費約金百萬圓を要した。

今大正六年度以降昭和元年度末に至る築港工事中主要なるもの、概要を記せば左の如し

イ 西北防波堤築造工事

本工事は東防波堤の突端より千二百尺を隔て西北西に向ふ露治時代に築造せる延長二千八百五十尺の舊半成防波堤を既定計畫に従ひ増設し總延長一萬二千二百十五尺、幅二十尺、高さ干潮面上十九尺の防波堤を築造するものにして明治四十一年七月工事に著手し大正五年度迄に其の全工程の九分六厘を竣工したるが六年度に至りて北防波堤の東端より三千八百六十二尺の地點を基準として上層六百三十三尺、北港口東側の下層二百四十七尺、中層五百八十四尺、下層二千六十尺に場所詰コンクリートを施し且其の基點千尺附近に於て上層千二百二十五尺間に場所詰コンクリートの補足をなし之を完了せり

西防波堤にありては未成部分たる北港口西側に下層七十二尺、上層三百四十三尺に場所詰コンクリートを置き且北港口の西側に光達距離

六海里の燈臺の設備を終り尙西北兩堤の全延長に互り捨石補足として割栗石及切石六千二百八十八立坪を投入して工事の促進を圖り大正七年三月三十一日其全工程を了へたり此の工費總額は金參百八拾壹萬參千參百四圓を要せり

○ 船溜場假防波堤築造工事

長門町北方海面の船溜(約一萬八千坪)は一旦第三埠頭の西方埋築地護岸より西北の方向に突出する延長六千尺の假防波堤の築造(其の抱擁海面約一萬九千坪)を以て移轉したるが其後著手せる第四埠頭の築造に伴ひ又移轉の已むなきに至りしを以て西防波堤基點内部に移轉すべく大正十三年三月十八日工事に著手し西防波堤西港港西堤頭より約八十二尺(二五米)後方地點より東方百五度の角度にて突出する延長千二十三尺、高さ干潮面上約十七尺尖端幅約三尺の假防波堤を築造し昇降階段、繫船及電燈設備を爲し大正十四年三月十五日竣工せり其の工費金八萬八千九百四拾三圓なり

ハ 第二埠頭東部北部岸壁改築工事

本工事は船舶の荷役を敏活ならしむる爲施工せるものにして第二埠頭東部及北部に於ける在來岸壁約二千三百三十三尺を取除き新に東部に於て現有岸壁の前方約八十一尺乃至約九十一尺の位置に北部に於ては甲乙埠頭線より約二千尺を隔て、之に並行する岸壁を築造し其の背面約四千四百五十二坪を埋立て岸壁延長約二千四百五十七尺(約三〇〇尺は西側に屬する分)埠頭幅員基點(約四九一尺)先端(約四二四尺)とし大正七年三月三十日著手大正十二年三月十五日竣工せり其の工費金貳百拾四萬七千五百圓なり

ニ 第三埠頭築造工事

本埠頭築造前の埠頭岸壁延長は八千九百五十四尺にして僅に當時の需要を充たし得たるに過ぎず然るに入港船舶は年々増加する一方なりしを以て第三埠頭の築造を急務とし甲埠頭の見透線上に於て第二第三埠頭の間にある乙埠頭の築造延長九百尺を併せ岸壁の總延長五千三百

尺を築造せり乙埠頭九百尺は干潮面以下二十八尺、東側先端七百尺は干潮面以下三十五尺其他は干潮面以下三十尺の水深を保たしむることなし又岸壁の強度を増さしむる爲二十五分の一の勾配を附し三十三噸乃至四十八噸の混泥土方塊を積疊し干潮面以上四尺六寸乃至八尺に達せしめ其上部に場所詰混泥土の直立壁を施し岸壁の下部は地質に應じて一尺乃至十一尺に浚深し捨石又は混泥土を以て基礎工事を施し背部には割栗石及石屑を填充し壁面を帯固ならしめ又西部は延長千四百尺の護岸を築造し内部六萬八千八百九十七面坪餘を埋立てたり本工事は大正二年三月十七日著手し九年三月三十一日竣工したり其工費金參百參拾八萬八千四百參拾五圓を要し其の竣工延長埋立面積左の如し

岸壁竣工延長 五、三三三六寸
埋立竣工面積 六七、九一五坪九七

ホ 寺兒溝棧橋築造工事

本棧橋は明治四十四年八月工事に著手大正三年五月に竣工して石油棧橋又は危險物棧橋と稱せしも大正十一年十二月十二日より寺兒溝棧橋と改稱せり然るに本棧橋の構造は木造にして大正十四年七月の大暴風に一部破壊したるを以て在來棧橋の東側に六米の間隔を置き之と並行に長さ約五百五十八尺、幅約五十尺、橋面高さ干潮面上約二十三尺乃至約二十四尺、水深干潮面下三十三尺の棧橋を後方埋立豫定線の前面白二尺三寸の點より沖合に向つて築造し起點部附近に於て在來棧橋に聯結したり其の構造は鐵筋混泥土函(長さ四十九尺五寸、幅二十九尺七寸、高さ四十九尺五寸)六箇を七十五尺九寸間隔に据附け其の上部に高さ約九尺九寸乃至十尺五寸の場所詰混泥土を施し長さ約八十一尺の鐵桁を各橋脚間に架設し其の上部に張板を施し先端に高さ四十尺の標識燈竿を設けたるものにして大正十四年十月八日起工大正十五年十月三十日竣工して工費拾貳萬五千七百餘圓を要したり

ヘ 第四埠頭築造工事

第三埠頭完成し繫船に幾分の緩和を見たるも逐年船舶の出入多くなりて殊に冬季繁忙期にありては沖待船一時に數十隻を數へ岸壁の不足を見るに至りしを以て第四埠頭の築造を計畫して總工費約金六百拾萬圓を投じ八箇年繼續工事として大正十二年五月十二日より著手し即ち

第三埠頭の西方に長さ約九百尺、高さ干潮面上十六尺五寸、水深干潮面下約三十尺の丙埠頭を築き其の西端より直角に突出する長さ約二千尺、幅約六百尺、岸壁延長約四千六百尺、高さ干潮面上十六尺五寸、水深干潮面下三十三尺乃至三十八尺を保有する第四埠頭を築き更に西側岸壁線を南に延長し約五十五度の角度を以て西折し長門町荷揚場東端に至る延長約一千二百九十七尺約十三尺長門町埠頭を築造し而して是等海岸線を以て抱擁する海面約八萬五千七十坪（内約三六、三六〇坪は岸壁内部とす）を埋築するものにして岸壁總延長二千四十九米五（約六、七六三尺）とす工事は年々進捗して昭和二年三月迄に全工程の三割五分五厘を了へ昭和五年度完成の豫定なり

ト ケイソン船渠築造工事

本工事は目下築造中の第四埠頭のケイソン（鐵筋混凝土）製造用船渠を濱町未成船渠内に長さ四百九十五尺、上幅約七十三尺、底幅三十九尺七寸、深さ約三十四尺（干潮面下約十八尺）に築造し其の兩側を干潮面上十六尺五寸の高さに埋立てケイソン製造用諸材料の貯藏倉庫及工事監督詰所を建築し材料運搬輕便軌條を敷設し而して船渠兩側一段低き部分にエレベーター、混合機、起重機等を据附けたるものにして大正十三年度に假締切の補修工を了り大正十四年五月十四日排水作業に著手し六月十三日排水を終り引續き岩盤の掘鑿に著手し大正十五年九月三十日全部竣工せり其の工費金六拾參萬四千圓なり

チ 兒玉町地先護岸荷揚場築造工事

大山埠頭を距ること西方約五百尺海岸道路より約四百尺を隔て延長約一千二百尺の護岸石垣及幅員約六十尺延長約一千二百尺の荷揚場を築造せり而して其の内約一萬三千三百五十八坪を埋立て埋立地内に第一號、第二號各延長約四百尺の排水用モルタル管を埋設したり本工事は大正八年五月十九日著手して大正十一年九月二十日竣工せり

リ 長門町地先海面埋立工事

本工事は濱町棧橋基點より舊築港工場西端假防波堤先端に至る斜面内の海面約一萬八千三百四十七坪を干潮面上十六尺五寸に埋立延長二

百二十六尺の護岸石垣及延長五百尺の荷揚場並延長二十尺の假護岸を築造し埋立地内に暗黒下水を設け延長六百六十六尺の舊護岸を修築せるものにして大正五年十月五日著手し大正八年三月三十一日竣工せり

又 寺兒溝海面埋立工事

本工事は第一埠頭の東部寺兒溝海面干潮面上十七尺五寸に埋築せるものにして其の護岸延長約三千九百尺面積十萬七千坪中央に幅九尺、延長二千三百四十六尺及幅三尺、延長一千六百八十三尺の下水溝を設けたり明治四十三年九月三十日著手し大正七年三月三十一日竣工せり其の工費七拾四萬五千貳百八拾八圓を要したり此の竣工面積及護岸延長左の如し

竣工面積	一一一、〇八七坪八五四
同護岸延長	三、九七九尺四九

ル 東寺兒溝海面埋立工事

本工事は寺兒溝埋立地東側護岸屈折點より寺兒溝棧橋突堤部先端後方約八尺五寸の點に至る一線以内の海面約十二萬二千五百八坪を埋立て護岸延長約四千三百四十一尺の内約二千三百八十五尺間に護岸石垣を築き其の上部に高さ約三尺八寸の胸壁を設け第三號開渠以東約一千五百三十七尺に荷揚場を築造し埋立地内に幅約十八尺（第一號延長約一、二九〇尺）同約十二尺（第五號延長約六七〇尺）同約九尺（第三號延長約九五〇尺）同約六尺（第四號延長約九九五尺、第二號延長約九一〇尺）の開渠及徑約三尺（第一號延長約一、一四五尺、第二號延長約九二五尺）の下水溝二條を設け埋立地内にある検疫棧橋は撤去して新に検疫所正面護岸の前方約三千六百三十六坪の海面を防波堤にて抱擁し其の内に延長三百九十六尺の検疫用岸壁及延長百九十八尺の斜面荷揚場を築造して大正七年七月二十九日著手以來繼續して昭和二年三月迄に全工程に對する八割三分の工程を了へたり尙總工費約百六拾四萬百參拾餘圓にして昭和三年三月竣工の豫定なり

ヲ 小岡子海面埋立工事

本工事は小岡子海面約三十二萬七千八百五十九坪を埋立て其の中に約五千五百十坪の船溜(入口幅二〇〇尺、防波突堤四〇〇尺)を設け延長約六千五百八十三尺の護岸石垣に沿ひ延長約四千三百三十三尺(内約一、二〇〇尺船溜の周邊とす)の荷揚場を築造して埋立地内に幅約四十五尺(第一號延長約二、六四七尺)及約二十五尺(第一號延長約二、六三四尺)の開渠を設け幅約四十五尺開渠渠底下部延長約二千六百六尺間に下水管を埋設するものにして大正七年九月二十六日著手以來續行し昭和二年三月末日迄に五割の工程を了せり此の總工費約貳百七拾參萬八千貳百餘圓にして昭和四年三月末日竣工の豫定なり

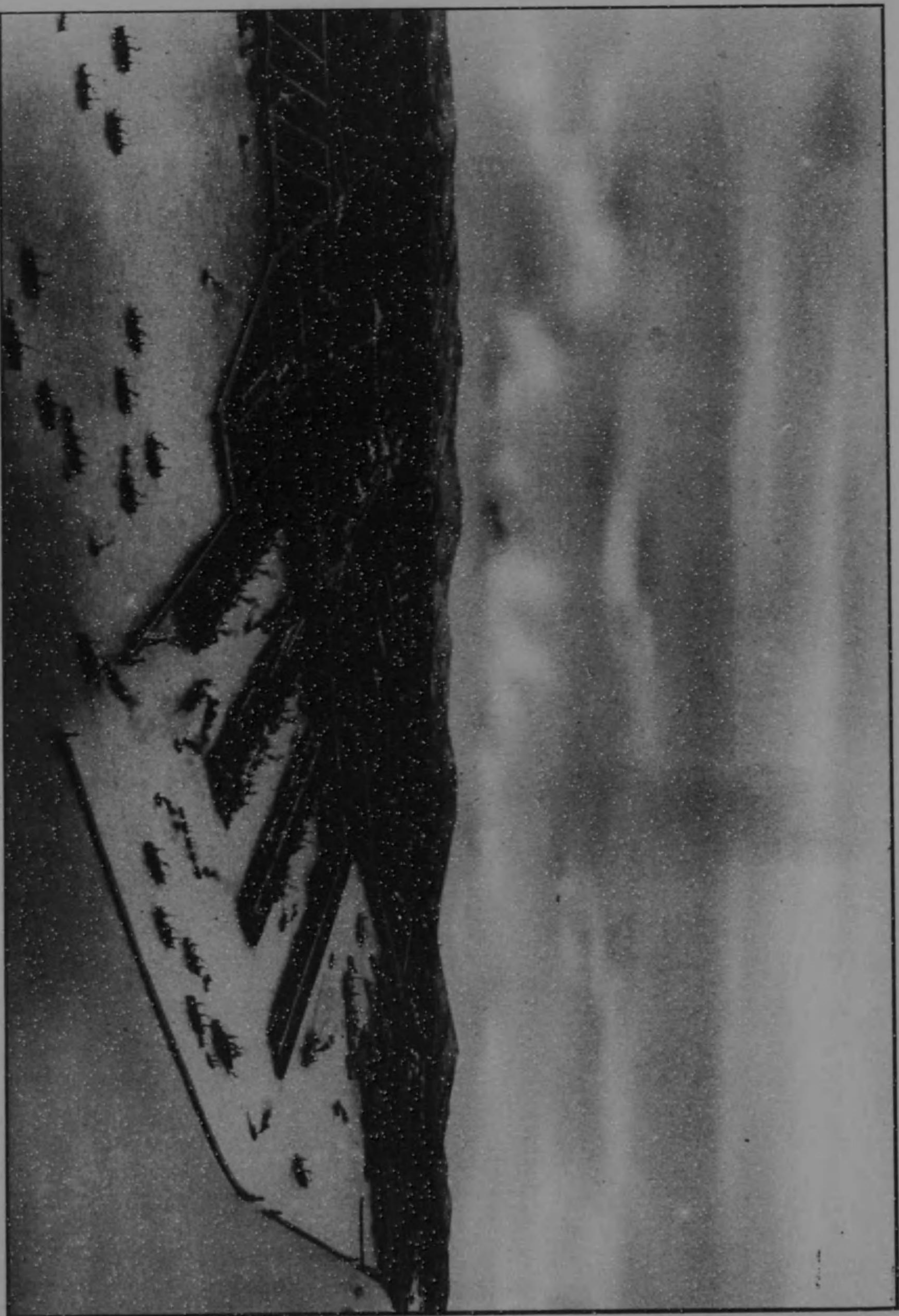
ウ 大連港浚渫工事

本工事は防波堤内及港外航路を浚渫するものにして防波堤内は殆ど其の大部分を水深干潮面下約二十三尺乃至約三十四尺に大山埠頭附近を干潮面下約三尺六寸乃至干潮面に港外航路(東港口を起點とし東方三山島に向ひ延長約一、〇〇〇尺、幅最廣約一、五〇〇尺、最狭約六〇〇尺)を干潮面下約三十六尺に浚渫するものにして其の浚渫總數量は約四千五百七十七坪九八(内約二二八、二六五坪は岩盤)とす明治四十一年三月二十三日著手以來年々續行して昭和二年三月末日迄に全工程の八割二分を了せり其の總工費約五百七拾餘萬圓にして昭和三年三月末竣工の豫定なり

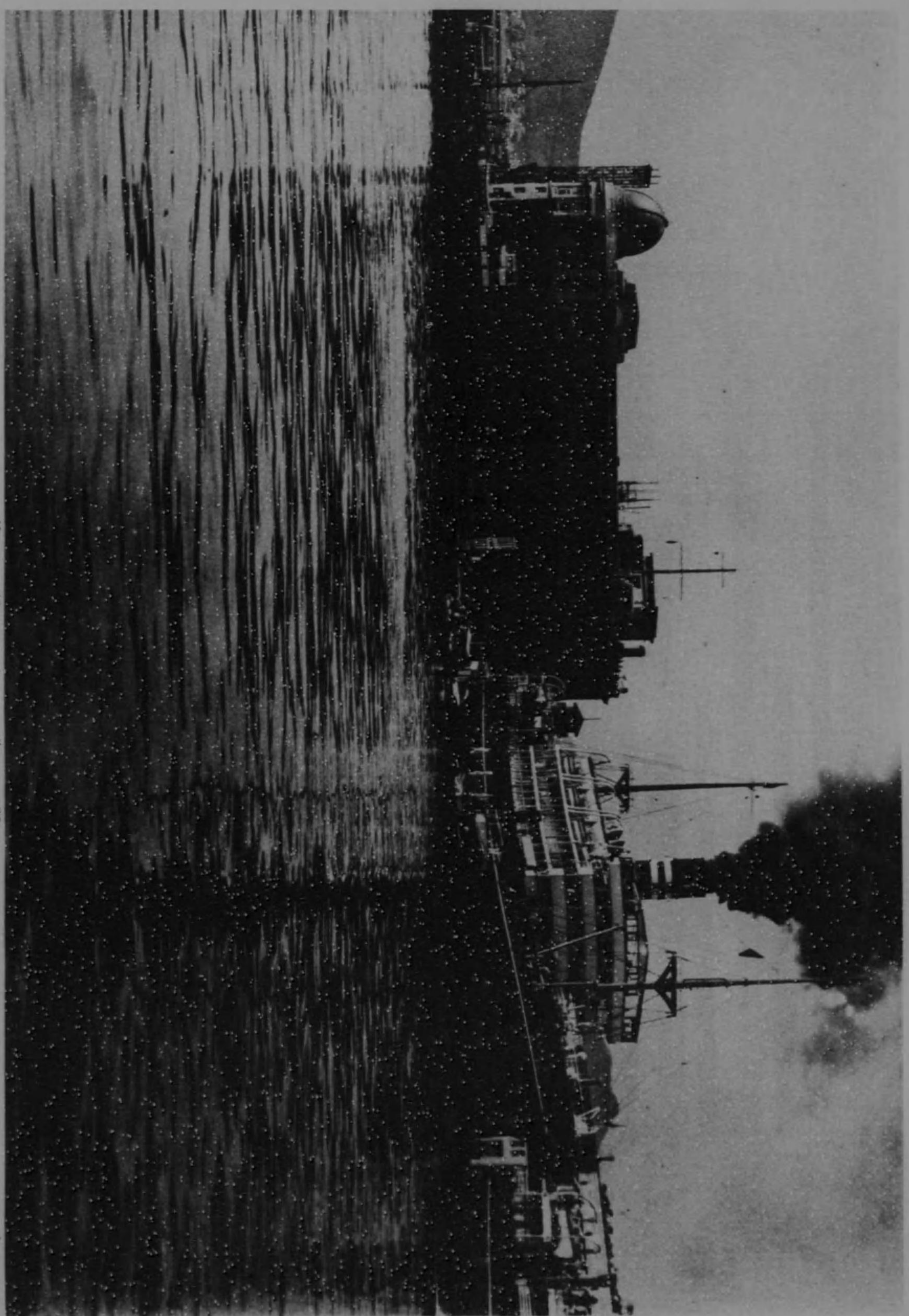
カ 甘井子石炭埠頭築造工事

撫順炭の輸出逐年増加するに従ひ現在の第一埠頭先端のみにては積出能力不足にして専用埠頭築造は多年の懸案たりしが昭和元年度より四箇年繼續事業として大連港の對岸甘井子に石炭専用埠頭を總豫算約參百六拾九萬貳千五百圓を以て建造する事となり目下工事進捗中なり本埠頭は長さ九百二十四尺、幅九十九尺(防波堤長さ一、六五〇尺)のケイソン式大規模の工事にして周水子或は其の附近より引込線を敷設して石炭輸出を専門とする計畫にして之に石炭積込機カーダンパーを附設するの設計なり

此の埠頭完成の際には大連港第一埠頭は専ら年約百萬噸程度の燃料炭の積出に充て甘井子埠頭よりは年約三百萬噸程度を積出さしむる計畫となすものなりとす



大連埠頭全景

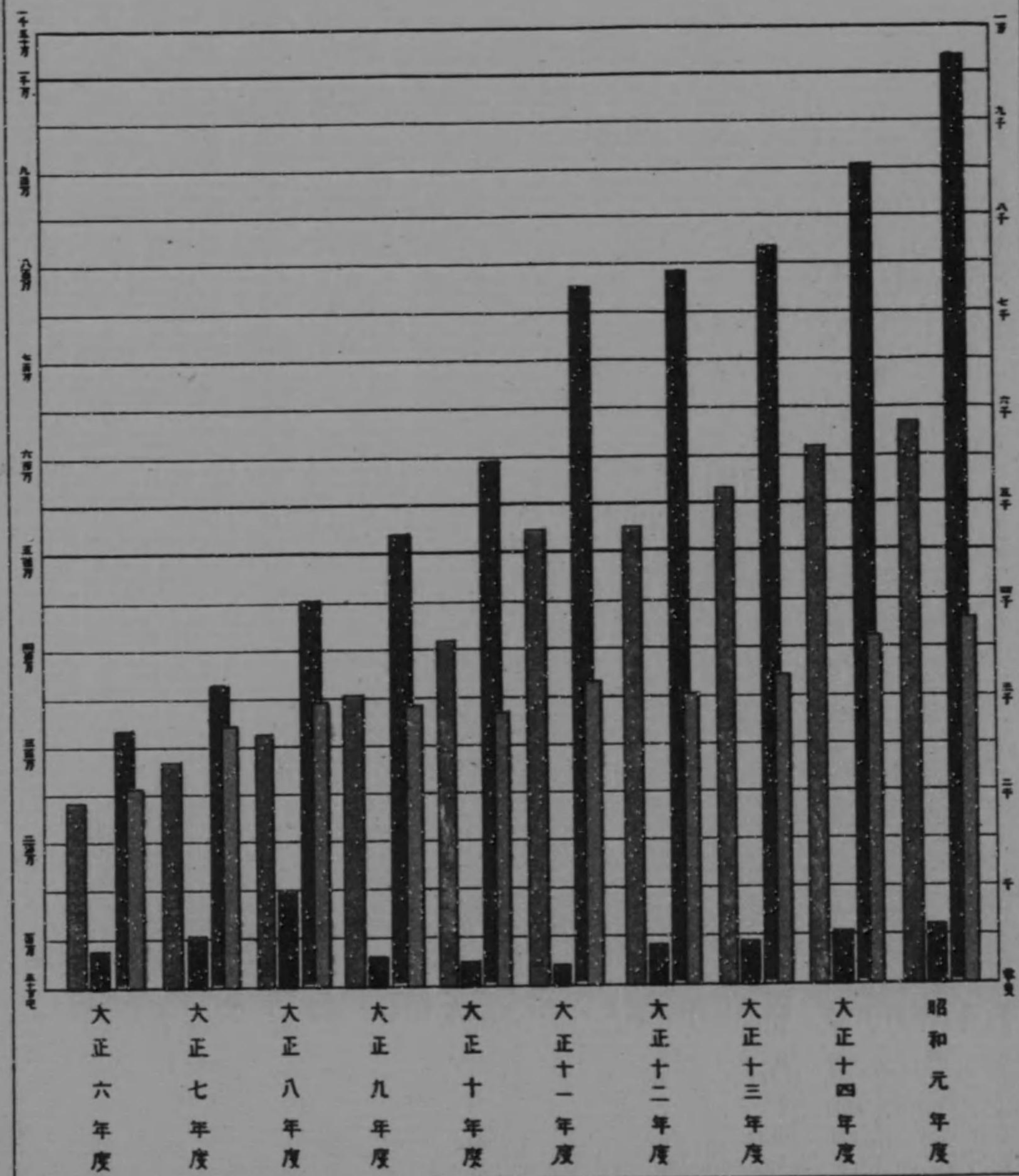


本 埠 船 塢 所

大連埠頭著埠汽船及 輸出入貨物噸數累年比較

自大正六年度至昭和元年度

輸 出 輸 入 汽船噸數 汽船隻數



既に昭和元年度に於て經費約四拾五萬圓を投じ防波堤、岸壁、護岸の測量、基礎掘鑿（泥土、岩盤）割草石投入等の基礎工事を爲し昭和二年度工事豫定としては岸壁築造二百六十四尺、護岸築造約二百六十七尺、陸上土砂埋立約八千七百九十二坪及防波堤築造六百六十尺なり

ヨ 寺兒溝棧橋海面埋立工事

寺兒溝棧橋以東三千六百九十六尺の地點約十萬坪の海面を抱擁する部分を埋立て將來危険貨物保管倉庫を建設せむとするの大工事にして必要に應じ危険物棧橋をも築造する豫定なり總工費約百參拾萬圓の豫算にして大正十三年度より起工し目下土砂埋立、護岸築造及下水道築造工事進捗中なり此完成は昭和五年度の豫定なり

第二節 埠頭

一 大連埠頭

イ 陸上設備

會社の引續當時に於ける倉庫棟數は僅に十二を算するに過ぎざりしも年々の出入貨物増加に従ひ新改築をなし擴張を圖りたる結果昭和元年度末に於ける倉庫及上屋は合計八十一棟十萬三千六百六十五坪を算するに至れり
今大正六年度以降昭和元年度に至る倉庫及上屋の累年數を擧ぐれば左の如し

年 度	棟 數	坪 數
大 正 六 年 度	四七	五〇、〇〇九
同 七 年 度	五四	六一、三二八
同 八 年 度	六五	七六、三六五

第二編 會社の事業

大正九年	七三	七八、八九二
同十年	七五	八九、一一七
同十一年	七六	九六、四二九
同十二年	七七	九八、五九四
同十三年	七七	九三、四四八
同十四年	八三	一〇〇、九一二
昭和元年	八一	一〇三、一六五

是等倉庫の構造を見るに木造トタン張六十八棟、鐵筋混凝土建四棟、煉瓦建四棟、鐵骨トタン張二棟、鐵骨煉瓦建三棟にして埠頭岸壁に沿ひたるものは船舶積卸物の一時的收容に充て其他は保溫倉庫一、豆油タンク倉庫一、危險物倉庫十一、四號倉庫の二階一部の冷蔵倉庫等
 特殊倉庫を除き他は總て一般貨物の營業保管用に充てたり而して將來岸壁倉庫は出來得る限りクレーンとエレベーターを具備する永久的二階建の建築物となす計畫なり

次に當港は一年を通じ雨雪の量少きを以て會社は此の天恵を利用し農産物其他に野積保管を取扱ひ來れり保管貨物は凡て庫内保管を原則となすと雖現在尙保管倉庫不足の状態にあるを以て濕氣に依る損害比較的少き農産物の如きものは之を野積保管となして其の保管料を庫内保管料の半額となせり然れども其の保管費用に於て庫内保管より却て割高となり損失を來すこと多きことあるが故に將來倉庫を増築し農産物の野積保管は之を廢するの方針なり現在野積保管として取扱ふものに農産物の外鐵材、木材、竹類等あり

野積貨物に對する防濕方法はターポレンと安平を用ひ地上面はコンクリートを以て固め縱横に溝を通して排水設備をなし尙農産物保管には特にコンクリートを敷きたる地上面に枕木を敷きて通風を計るを以て庫内保管と殆ど變ることなし而して是等野積保管貨物に對しては庫内保管貨物と同様倉庫證券を發行す現在大連埠頭内野積場總面積は九萬八千八百七十三坪にして其收容力三十五萬噸なり

此の他寺兒溝山麓に豆油混合保管用タンク十二基（各基容積一、五〇〇噸）を新設し昭和二年四月一日より豆油の混合保管を實施せり
 一旦埠頭構内に收容したる穀類の精選乾燥に際しては從來唐箕其他幼稚なる器具を用ひて之が精選を行ひ天日乾燥を爲したるも作業能



大連埠頭構造



船客待合所の玄関と大連埠頭の一部



船客待合所の内部

率其他の改善を要することより英國ヘンリー・モン・社製穀類精選乾燥機械を購入して大正十五年十月二十九日より其の組立に著手し同年度内に殆んど全部の工事を終了したり尙混合保管大豆に對しエレベーターの建設を計畫したるが近く大豆の撒保管搬送を開始するに當り荷役能率を發揮せしめんとするにあり

尙昭和元年度末に於ける當埠頭構内の貨物保管能力は約八十萬噸にして既往に收容したる最大量は約六十四萬噸なりき

次に前掲の外構内に於ける各種の設備に就き項を分け概説すべし

給水設備 各岸壁に給水栓ありて一時間の給水能力約六十噸なり、而して給水船は三隻、一隻の能力一時間三十噸乃至六十噸なり

給炭設備 第一、第二、第三、第四、第二十八、第二十九、第三十の各繫船區を特別に石炭ベースとして使用し石炭積込機（カーダンバース）は第一埠頭先端に設備して此の船積能力は一時間平均九百噸なり

燃料炭は各岸壁に於て貨車より直に積込むことなし又舁船給炭船にて給炭することを得而して石炭ベース貯炭能力は約四萬噸なり給炭船は現在一隻なるが之が給炭能力は一時間二百噸なり

荷役設備 船舶荷役能力は一日十時間に於て約三萬噸なり而して之が設備としては左記の如し

海上 五十噸クレーン二臺、五噸クレーン五臺

陸上 可動式クレーン（四十五噸一臺、二十七噸一臺、五噸三臺）半可動式クレーン四臺（三噸三臺、一・五噸一臺）豆油撒積用タンク五臺（各タンク容積一二〇噸）

構内荷役設備 大正五年度末に於ける構内鐵道線路は延長約二十五哩なりしが昭和元年度末現在には六十五哩に達せり今荷役設備の主なるものを示せば機關車十五臺、貨車（一車三十三噸）二百車、自動車（一臺四噸）八臺、自動車附屬トラクター（一臺二噸）八臺、自動車（一噸、一・五噸、二噸）各一臺、電気トラック（一臺二噸）五十四臺、電気トラクター六臺、同上附屬トラクター（一臺二噸）四十臺、電気トラクター（一臺二噸）二臺、同上（一臺三噸）六臺なるが其他馬車、小車を補助設備として一般荷役に使用す而して一日（十時間）の荷役能力は約二萬噸なり

船客待合所 第二埠頭にありて此の總建坪千五百坪にして専ら内地及上海往復定期船の船客乗降用に設けたるものにして建物内收容人

員約五千人、工費約五拾萬圓を投じたものにして大正十一年七月起工同十三年十月竣工せり

事務所其他構内詰所 甲埠頭後方に在りし舊埠頭事務所は初め構内に於ける要衝の位置に在りしが業務の膨脹に伴ひ著しく狹隘を告げたると構内の敷地も次第に狭くなりしかば之を移轉するの計畫を立て市内の東廣場より第二埠頭に至る直通道路と甲乙埠頭岸壁に併行したる新設道路を設け大正四年此の一角の地に建坪千四百坪餘の事務所の設計に著手したり而して敷地其の他の關係より全工事の三分の一を最初の工事となし大正五年六月十一日著手、同九年十月二十日竣工せしめたり而して三分の二までを次の工事とし大正十二年八月二十四日著手同十五年一月三十一日に竣工せしめたるが残部は將來の計畫として残したり而して既成部分の内第一期分建坪は三百六十五坪八八、工費は百七萬九千九百五拾五圓拾參錢にして第二期分は建坪五百二十六坪四〇工費九拾九萬六千圓なり

此の建物設計は主としてアメリカカンルネサンス式を參照したるものにして特に滿蒙の門戸として壯大の觀あらしむることに著想し尙内部は實用と堅牢を其の主旨とせり又埠頭構内附近に介在する官署の各事務所は殆ど全部を本建物内適當の場所に配置して彼我の便を圖り又將來豫定計畫竣成の際には埠頭業務關係諸會社をも此處に集合包含せしめて各業務の敏活を圖る豫定なり又構内作業に従事する者は固より多數に互るを以て便宜各所に従事員詰所を設けあるも之れ又年々増設して目下其の總數百九十箇所總坪數約四千二百二十九坪なり

船舶信號所 第一信號所、之は舊埠頭事務所の西側に在りし（現在待合所渡廊下附近）木造二階建、建坪二十六坪のものにして明治四十三年度に一度小修理を加へたる儘使用せし引繼家屋なり大正九年十一月新に埠頭事務所の建設と同時に本館屋上に建坪十六坪の假二階建の信號手詰所を建設し之を第一信號所と稱す即ち地上百六十五尺五寸鐵骨製の信號柱を設け夜間は之に電燈信號を爲すの裝置とせり

第二信號所、明治四十五年三月三十一日東防波堤の完成と共に第二埠頭突端に在りし海軍建設の木造建信號所を廢して此處に新設したるものにして同防波堤先端より南方百尺の地點にある煉瓦造二階建にして建坪約二十六坪なり

燈臺 東港口北端にあるものは明滅紅燈其の南にあるものは明滅白燈にして大正十三年十月より交互に明滅共三秒の明滅（電燈）燈に變更せるものにして何れも光達距離十一哩を有す北港口東及び西にあるものは不動紅色（電燈）にして大正七年五月初點、何れも約十七哩の光達距離を有す又西港口の北及南にあるものも前同様なれども大正四年五月初點、光達距離約七哩なり其の他港内外要所に燈竿を設備す尙外に瀨口黄白嘴に霧信號燈臺あり大正十四年十二月に新設し光達距離二十三哩を有す又大正三年南三山島に燈臺局の建設にかゝる光達距

離二十三哩の燈臺あり

以上の外陸上設備として船舶給水栓三十七箇所、消火栓九十箇所、水道栓七十五箇所及計量臺、計重機の設備あり又構内道路改修、排水設備、掃帚等の設備も重要なものなり

尙最近の施設として大正十五年八月無線電話裝置（埠頭事務所屋上及三山島）を昭和二年二月方向探知機（埠頭事務所屋上及圓島燈臺）を備附け前者は入港船舶名吃水等を敏速に報道せしめ、後者は入港船舶をして縦へ濃霧の場合と雖も二百哩の沖合より安全に其の航行を續くることを得せしむるものなり

海上設備

小蒸汽船は創業の際旅順海軍工作部より二隻陸軍運輸部より三隻を借入れたるも漸次會社に於て所要船を購入するに従ひ之を返還し大正六年度にありては所有船十三隻を算せるが昭和元年度末に至りては十七隻（二千二百二噸）に増加し此の外野船（運貨船傳馬船）三十二隻七千百噸給水船三隻、殺鼠船二隻防舷材二百六十五箇及多數の繫船物（錨、浮標、錨鎖、シャツクル等）の設備あり

船舶取扱

埠頭船舶著難に關し會社は創業の際差當り陸軍運輸部規程を準用し繫船料は總噸數一噸につき一日金五錢を徵收し繫留三日以上に對し一噸に付一日金拾錢を倍加徵收し尙貨物に就ては棧橋使用料として一噸に付金拾錢を徵收したるも出入貨物に混雜を來たし埠頭の經營上不便なるを以て之を廢し新に明治四十年九月埠頭船舶取扱規則を定め繫船料棧橋使用料を廢して曳船料を徵收することとせり次で明治四十三年十一月關東都督府令第三十三號を以て大連港則制定せられ總噸數一千噸以上の船舶は總て強制的に水先人の水路嚮導を要することとし又會社は同時に船舶取扱規則の改正を以て曳船料を廢し噸數に依る埠頭發著手數料を徵收することとし水先料は當分會社に於て負擔すこととせり又埠頭船客手荷物の取扱は一時請負とせしめたるも弊害多きを以て會社の直營に變更せり其後屢々船舶取扱規則の改正を行ひたるが大正十五年四月一日より繁忙期間に限り船型により一定の免除期間を置き其の期間經過後繫留するものに對し改めて繫船料を徵收することと

なせるが斯くの如きは東洋諸港に其の類例を見ざる處なり

繫船區域は埠頭事務所之を指定し繫船順序は入港順に依るを原則とすれども荷役の都合に依りては必ずしも入港の前後に依らざることあり又埠頭繋留後修繕工事或は貨物不揃等の爲荷役をなすこと能はざる船舶は一時離埠せしむることあり又船舶が入港に際し其の荷役に適當なる埠頭を他船により使用中なる場合或は風浪、結氷等の爲直に著埠し能はざる時は一時之を放泊區に停船せしむるものとす

汽船の埠頭著離に關しては必ず繫船方曳船(又は押船)、碎氷船、綱取船を準備し夫々必要なる援助を爲すものとす著埠汽船は左表に示すが如く年々増加し大正三年度の如き二千二百八十隻(三百九十二萬三千二十五噸)を算せるが其の後歐洲戰亂の影響を受け一時減少し殊に比較的大型汽船の減少著しきものありしが戦後舊態に復し而も逐年激増するの趨勢にあり而して毎年冬季は夏季に比し甚しく増加するを常とせりこれ滿洲の農産物輸出を其大なるものとするを以てなり汽船の國籍は元より日本船を主とし英獨之に亞ぐ然れども獨逸船は歐洲戰亂の爲大正四年より一時絶無となり同十年迄は全く其影を見ざりしが十一年より來港するものありて今や戦前に復活し入港の船舶隻數噸數に於て英國に亞ぎ支那船は大正四年より増加し初め同六年既に隻數に於て英國を凌駕するに至りしも多くは小型船なり

港内諸規定の内瓦斯殺鼠船規程、舁船賃規定、曳船規定、小蒸汽船賃規定の類は大正六年以前既に適當に改廢して引續き之に基き實行しつゝあるが船舶給水に關しては明治四十一年四月岸壁給水を開始し繫船區毎に給水栓を設けて直接給水し又沖合船舶の艦船に對しては蒸汽筒筒附給水船を以て撒水給水せり初め船舶給水料の規則ありしも其の後必要に應じ再三改正を加へたるが現行規則は大正十年四月改正のものなり給水力は一時間一栓約六十噸、給水船一隻の能力は三十噸乃至五十噸なり

著埠船隻

年 度	日本 船	支 那 船	外 國 船	計	噸 數	戎 克
大 正 六 年 度	一、六八八	一八〇	一〇四	一、九七二	三、一五四、五八	一八〇
同 七 年 度	二、三三三	三三三	七三	二、七三九	三、六四一、九三	三三〇

左に大正六年度より昭和元年度に至る大連埠頭著埠船の累年數を表示す

二 貨物取扱

輸出入貨物 輸出入貨物は戎克貨物を除く外總て埠頭事務所の掌るところにして明治四十四年以來の貿易統計により觀る時は毎年平均約三十五萬噸宛の増加を示せり而して輸出貨物は依然豆粕を主とし大豆、豆油、雜穀之に亞ぎ其の他は比較的少量なり但し重量に於ては石炭を以て第一とし以上の貨物仕向港は大阪、横濱、神戸、伊勢灣、高雄、基隆、門司、下關其他の日本内地各港と上海、南洋各港、天津等にして其他歐米主要各港なりとす

輸入貨物は麥粉、金物類、麻袋、石油、野菜及果物、砂糖、紙類、木材、綿絲、綿布類、食料品其他雜貨等にして是等の仕出港は大阪、神戸、門司及上海を主なるものとす

當港は地理又は其の他の關係より日本との貿易最も密接なるが支那各港との貿易も亦年々増加して將來の發達一層見るべきものなり更に歐米各港との貿易も逐年増加し殊に紐育、アントワープ、シヤトル、ポートランド、ハンブルグ各港との取引は多きを加へつゝあり

日本に輸出する主なるものは豆粕、大豆、石炭等にして大阪、横濱及神戸を第一とし清水、名古屋、武豊、四日市之に亞ぎ高雄、基隆、關門の順序なり

日本よりの輸入貨物は麻袋、紙類、野菜及果物、麥粉、金物類、綿絲布、セメント及石灰類其他食料品雜貨等にして大阪を第一とし神戸

同 八 年 度	二、三九一	四三三	一五五	二、九六九	四、五〇〇、四三五	七三
同 九 年 度	一、九六五	七三三	一六六	二、九〇四	五、一九一、三三九	一四九
同 十 年 度	一、八五九	七九二	一七五	二、八二五	五、九四五、八四五	六六
同 十 一 年 度	一、八九九	九七一	三〇一	三、一七二	七、七九一、五〇六	一三三
同 十 二 年 度	一、七七七	八五四	三二四	三、〇〇五	七、九二〇、三九六	三七一
同 十 三 年 度	二、一〇四	七三八	三二七	三、一四九	八、一六七、二七九	四三六
同 十 四 年 度	二、四〇〇	七七四	三九一	三、五九五	九、〇三六、九一一	五〇五
昭 和 元 年 度	二、五三三	七九九	四八一	三、八一一	一〇、一三三、一〇一	五九四

京濱、關門地方之に亞ぐ而して最近臺灣よりの輸入貨物増加し殊に青果類の輸入多く又北海道より木材、朝鮮より米穀の輸入あり
支那沿岸貿易は輸出入共上海を第一とし天津、青島之に亞ぎ香港、漢口、廣東、龍口、芝罘、汕頭方面又年々増加の傾向あり輸出貨物は大豆、豆粕及石炭を主とし芝罘、上海へ高粱、セメント等相當の額あり輸入は上海より麥粉、苳、米、雜貨を主とし之に次ぐは香港より砂糖、麻袋、米等にして天津、芝罘よりは食料品、龍口よりは野菜及果物類なり

又歐米向輸出は豆油最も多く之に亞ぐは大豆にしてポトサイド、ハンブルグ、ロンドン等の歐洲各港を以て第一となし大豆油工業の發達より大豆、豆油共に輸出額を増加して最近米國よりも歐洲向數量激増を見るに至れり

輸入は鐵道材料、金物、機械類、染織料等にして當初英國を第一とし獨逸之に次ぐの情勢なりしも歐洲戰亂の爲多大の影響を蒙り現今には米國の麥粉及石油を最とし其の他前記の鐵道材料、機械類等の順序なり

南洋及濠洲方面は大正六年頃より逐年砂糖の輸入増加し麻袋又砂糖に次ぐの數量あり露領沿海州方面よりは魚類及海産物の輸入をなすに過ぎざるも之は漸次増加の傾向あり南洋殊に馬尼刺、新嘉坡方面には大量の石炭を輸出す

斯くの如く輸出入貿易は獨り日支兩國に止らず開港以來近々二十年にして世界の主要港と何れも聯絡して世界有數の貿易港となり最近十年の貿易額に見るも輸出に二倍六分輸入に一倍三分の發達ありて支那全國を通じて上海港に亞ぐの貿易額を有するに至れるは畢竟滿洲を縱貫する鐵道と其の吞吐港たる大連埠頭に遺憾なき設備を施したるに因るものと云ふを得べし

今大正六年度以降昭和元年度に至る當埠頭輸出入貨物噸數及價格を表示すれば左の如し

大連埠頭輸出貨物噸數

年 度	日本内地	支 那	歐 米	其 他	焚 料 炭	計
大正六年度	一、六五、七二六	五、四、五二一	一、九七、一〇六	一、七〇、五四〇	二、三三、六五三	二、四九、一四五
同 七 年 度	一、六二、一四五	四、一、〇〇三	二、三九、五〇九	三、三三、七七〇	二、七〇、八二二	二、八五、七三九
同 八 年 度	二、〇、九四六	一、三三、三三六	三、〇、〇一〇	三、三三、三三三	二、〇、九八七	三、二五、八二三

大連埠頭輸入貨物噸數

年 度	日本内地	支 那	歐 米	其 他	計
同 九 年 度	一、八〇、五八六	六、〇七、三三三	三、八七、二四	六、四四、五三四	三、五〇、一八二
同 十 年 度	二、〇、四二二	七、九、二二九	一、三〇、一四五	六、一六、九二八	四、〇〇、三〇三
同 十 一 年 度	二、二〇、九五九	一、四八、五三六	二、二八、二四九	五、二七、五九一	五、三三、一五三
同 十 二 年 度	二、九四、七三六	七、四、〇三二	二、七〇、四〇一	六、〇五、四四八	五、二、五〇七
同 十 三 年 度	二、九七、一四七	一、〇、四〇六	三、三三、九〇〇	七、二二、〇〇七	五、六、七三三
同 十 四 年 度	三、〇、一〇〇	一、七五、七九五	三、三三、九〇八	三、三三、一〇四	六、〇、六九一
昭和元年度	三、三三、〇四四	一、六四、二三四	四、一七、一四六	四、一六、七八三	六、三、一五三

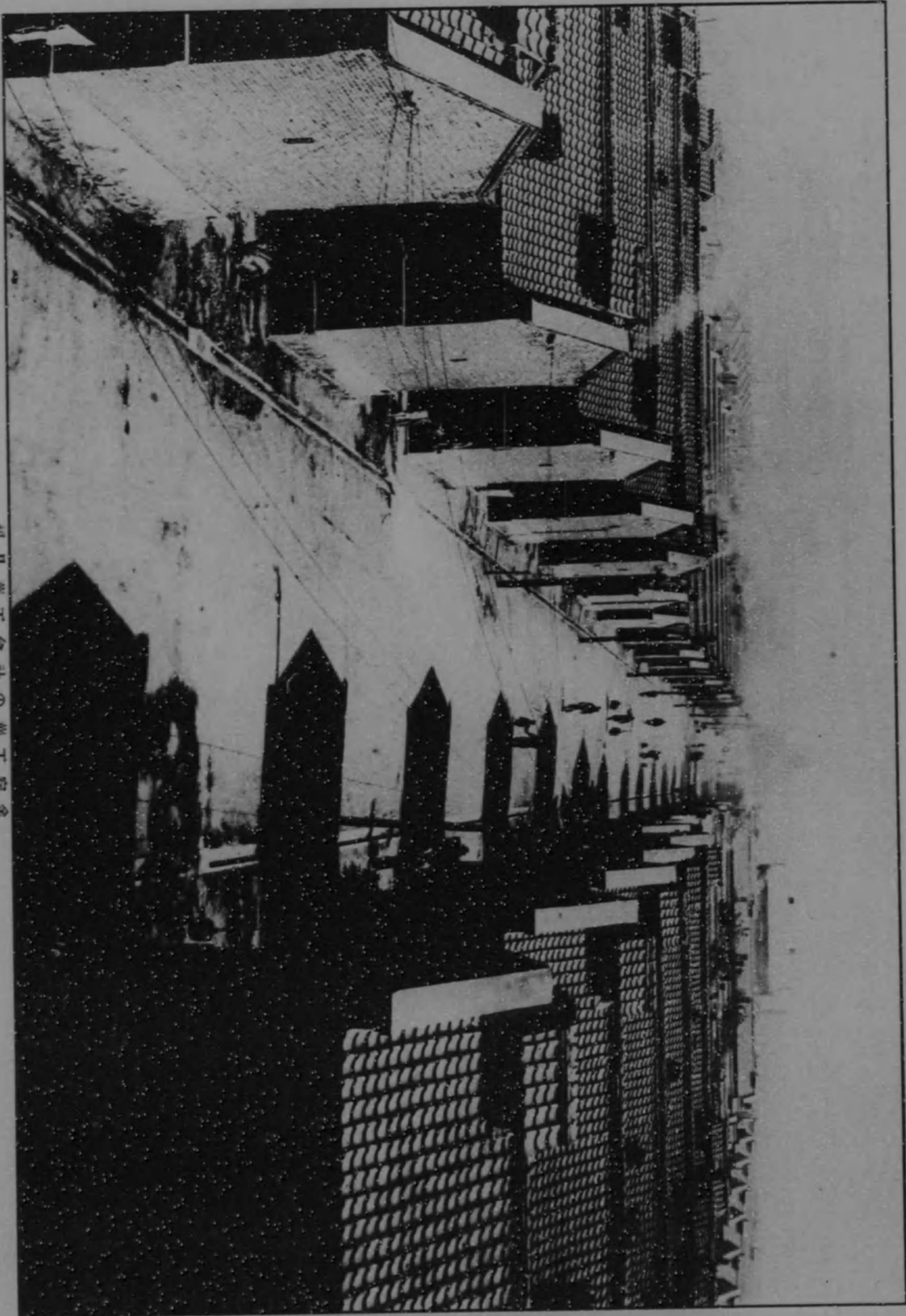
年 度	日本内地	支 那	歐 米	其 他	計
大正六年度	四、二二、八七	三、一一、〇四四	五、一六、〇五	一、〇六、五七六	八、九二、〇四一
同 七 年 度	五、〇一、五六九	四、〇、〇二八	四、三、九一一	五、三三、〇〇八	一、〇、四〇、〇一六
同 八 年 度	八、一三、三三三	五、三六、六〇三	一、四七、二二六	二、一七、二四	一、五〇、九一六
同 九 年 度	四、七、二六五	三、八、〇三六	八、九、七〇九	二、一〇、〇九	八、三、三六一
同 十 年 度	三、四、九八三	二、五、七二二	一、〇、五七三	五、〇、一五二	七、五、九三三
同 十 一 年 度	三、二、三九四	二、二六、七九四	一、六、一〇八	三、三、八五八	七、四、一五四
同 十 二 年 度	三、三六、八八一	二、八、二四二	二、五、九三五	三、〇、一〇六	九、五、一四三
同 十 三 年 度	三、三、四二八	三、三、〇三三	二、四、九五四〇	三、六、三五六	九、〇、六二五
同 十 四 年 度	四、九、八、二六六	二、四、五、一九九	二、五、一、七六七	三、八、七、〇二	一、〇、四、〇一四
昭和元年度	五、一、六〇七	三、三、七、七三	二、四、四、三三	三、四、七、〇二	一、〇、八、七、〇一六

大連埠頭貨物輸出入價額 單位海關兩(戎克ヲ除ク)

年 度	日 本 内 地	支 那	歐 米	其 他	計
大 正 六 年	七五四一、二八六	四二五〇、六二四	二四四一、六八二	一一〇、四五一	一五四三、七九四
大 正 七 年	九七五七、〇五二	四、五二一、三六七	四、四〇四、五五七	一一、六五四、七〇〇	一九七、〇七五、〇三六
大 正 八 年	一、五八二、七六六	四、八〇八、五三八	四、一七五、四三九	一一、七四一、六六	二、五四〇、七五八〇七
大 正 九 年	一、三三八、三六九	四、九六五、七四二	三、九六〇、八二二	二、六〇六、八二四〇	一、三三、五二八
大 正 十 年	一、二二六、八〇〇	五、八四三、六〇五	二、八、九六、三三〇	三、三二、四七、二五三	一、三三、九八、一一八
大 正 十 一 年	一、〇六六、七〇三	七、五二六、三三八	三、五、四、八、五六五	二、二、八、二、一七	一、三三、九八、一一八
大 正 十 二 年	一、三三六、五七五	六、四、三、〇、三三	四、一、五、一、七五九	二、〇、七、九、九、六	一、三三、九八、一一八
大 正 十 三 年	一、五九五、二三四	五、二、八、四、三、五八	五、七、三、四、六、八二	二、一、六、五、九、五	一、三三、九八、一一八
大 正 十 四 年	一、三、四、九、一〇、六三六	八、六、四、八、八、八五	四、八、一、五、一、四七五	二、五、五、九、九、七二	一、三三、九八、一一八
大 正 十 五 年	一、五九八、三二七	九、三、三、七、九、五	六、八、六、七、七、六五	三、〇、一〇、一、五、七	一、三三、九八、一一八

主要輸出入品噸數

年 度	輸 入						輸 出	
	大 豆	豆 粕	豆 油	雜 穀 種 子	石 炭 (船 用)	其 他	其 他	計
大 正 六 年	一、八八四、二六	八七〇、四二五	一、五四、五六二	一、六七、一九四	七、四〇、九六	三〇、八四、四二	二、四二、九一、四	二、四二、九一、四
大 正 七 年	三、七二〇、三三	一、〇五九、七三三	一、八六九、〇六	一、九五、七五八	七、七九、三	三二、二六、九六	二、八五、七、三九	二、八五、七、三九
大 正 八 年	六、四一、六六	一、〇九六、九三三	二、〇五九、〇〇	一、三三、九〇六	四、四一、六三	三、七、一、六五	三、三、〇、一、二	三、三、〇、一、二
大 正 九 年	五、九七〇、九七	一、四七、〇〇〇	一、五二、九五五	七、一、七、五三	五、〇八、四七	二、五三、三三	三、三、〇、一、二	三、三、〇、一、二
大 正 十 年	五、五二、九六七	一、一九九、四八八	一、一八、八、八七	六、一、〇、四〇	一、三、四、四、一八	三、五〇、七九	四、〇、〇、〇、〇	四、〇、〇、〇、〇
大 正 十 一 年	七、三三〇、三〇	一、一〇、四、三六	一、三、一、六、七	八、二、三、〇、三	二、〇、一、五、三、〇	三、五、七、三	五、一、三、三、三	五、一、三、三、三
大 正 十 二 年	七、三、八、四、五	一、四、〇、三、六	一、三、一、六、七	三、八、七、三、三	二、一、七、一、七	三、九、六、四、九	四、〇、九、八、九	四、〇、九、八、九
大 正 十 三 年	八、五、二、四、〇	一、五、〇、三、七	一、〇、四、五、四	四、一、九、七、四	二、五、四、一、七	四、七、一、七、五	四、七、一、七、五	四、七、一、七、五
大 正 十 四 年	七、六、五、七、五	一、七、六、三、四	一、六、〇、九、九	五、八、六、四、一	三、二、八、八、三	五、三、一、七、八	六、〇、六、九、一	六、〇、六、九、一
大 正 十 五 年	七、六、五、七、五	一、七、六、三、四	一、六、〇、九、九	四、九、八、五、七	三、二、八、八、三	五、三、一、七、八	六、〇、六、九、一	六、〇、六、九、一



西貢港工務局の埠頭

第三章 港灣及埠頭
 四九六
 六〇〇乃至一、〇〇〇噸
 六〇〇乃至 八〇〇噸

沖合荷役は危険物、軍艦燃料等已むを得ざる場合の外之を行はずにして總ての作業は特産物出廻の關係より輸出貨物は冬季一時に幅狭し
 繁忙を極め夏季は比較的閑散なるがため經營の全體より不利なるを免がれず貨車作業は大豆、雜穀其の他特産物の到着荷卸を主とし是等は
 苦力の肩上に依り一旦到着倉庫若は野積場に荷卸し船積船積確定の後岸壁附近に繰替ゆるを常とす（輸出炭は別に石炭埠頭に於て荷卸及船
 積を爲す）輸入貨物の奥地行貨車積作業も亦特産品以外は苦力肩上に依るものとし一車扱貨物の積込は其の保管場所に配車して積込み小口
 扱貨物は貨車積卸前陸揚場より小口發送倉庫に繰替集積するものにして是等は到着荷卸に比すれば甚だ少量なり只第二ホーム（埠頭鐵道貨
 物市内營業所）に於ける積込は市内へ搬出するものなれば一車小口の別なく直に其の構内プラットホームに於て之を爲すものとす
 繰替作業と稱するは當港特有とも云ふべく即ち構内に於ける保管貨物を便宜移換する作業にして之を保管地域（保管倉庫地域）と船積地
 域（岸壁及同上屋の）間に貨物の聯絡をなすを以て目的とす埠頭にては倉庫營業を兼營し構内は大體船積地域と保管地域とに區分せられ岸
 壁即ち船積地域は長く貨物の保管を爲し得ざるが故に岸壁と保管倉庫との間に貨物を聯絡移動せしむる必要あり此の作業は即ち繰替作業の
 本體なり而して是等繰替作業は主として鐵道によらしむるも又自動車、馬車、電氣トラクター、小車等を以てすることあり而して此の作業
 は荷揚、積荷の外保管場所移動、改装、看貫等の場合に於ても當然必要なるものとす
 大正六年度以降昭和元年度に至る荷役作業の狀況を左に表示せるが就中平均一日一人の取扱貨物高が年々増加せる點は正に荷作業力の進
 歩を示すものなり

荷役作業

（大正八年以後石炭作業を分離す）

年 度	船舶積卸	貨車積卸	荷揚、荷捌、改装、看貫	石炭作業	計	荷役收入	苦力延人員	支拂賃金
大正六年 度	三、三三二、一八六	二、八二二、一八六	三、九三三、三〇〇	—	一〇、〇六七、七五三	二、五五五、五九六	二、二六三、三七一	三、六七五、八八〇
大正七年 度	三、八九七、二五五	三、一八五、七〇〇	四、八八九、六六三	—	一一、二七二、六一八	三、四三三、五九〇	二、二九八、九〇八	三、三三三、八八八

年 度	取扱貨物	荷役收入	人員	支拂賃金	取扱貨物	賃 金
大正六年 度	一、七五八、三〇〇	七、〇〇一、五〇〇	五、八二五	三、九三三、七九〇	四、七三三	〇、六六八
大正七年 度	三、一六六、六六五	九、三三三、二一〇	六、〇八一	六、三三三、二一六	五、三二八	一、〇〇四
大正八年 度	三、七〇五、〇〇〇	一、一七五、〇一七	七、八四一	一、〇〇四、三三三	四、七三三	一、一八八
大正九年 度	三、七五三、三三三	一、七〇〇、〇〇〇	七、四〇〇	七、〇三三、三三三	五、〇〇四	〇、九九五
大正十年 度	三、八七五、〇〇〇	一、七〇〇、〇〇〇	五、九二二	五、六四八、二九	六、六四五	〇、九九六
大正十一年 度	四、四三三、三三三	二、〇三三、三三三	六、六八一	六、三六四、四四	六、六四	〇、九五
大正十二年 度	四、四三三、三三三	一、八五八、〇〇〇	七、〇五〇	六、一九二、五五	六、六	〇、八八八
大正十三年 度	四、八九八、〇〇〇	二、〇四〇、〇〇〇	七、六三三	七、八八三、三七	六、四	一、〇三三
大正十四年 度	五、二八九、三三三	二、二五〇、九八七	八、〇六八	七、八九二、〇六	六、五五	〇、九九
昭和元年 度	五、六一三、三三三	二、三三三、三七七	七、六七〇	七、四七〇、四三	七、三三	〇、九九七

年 度	取扱貨物	荷役收入	人員	支拂賃金	取扱貨物	賃 金
大正六年 度	一、七五八、三〇〇	七、〇〇一、五〇〇	五、八二五	三、九三三、七九〇	四、七三三	〇、六六八
大正七年 度	三、一六六、六六五	九、三三三、二一〇	六、〇八一	六、三三三、二一六	五、三二八	一、〇〇四
大正八年 度	三、七〇五、〇〇〇	一、一七五、〇一七	七、八四一	一、〇〇四、三三三	四、七三三	一、一八八
大正九年 度	三、七五三、三三三	一、七〇〇、〇〇〇	七、四〇〇	七、〇三三、三三三	五、〇〇四	〇、九九五
大正十年 度	三、八七五、〇〇〇	一、七〇〇、〇〇〇	五、九二二	五、六四八、二九	六、六四五	〇、九九六
大正十一年 度	四、四三三、三三三	二、〇三三、三三三	六、六八一	六、三六四、四四	六、六四	〇、九五
大正十二年 度	四、四三三、三三三	一、八五八、〇〇〇	七、〇五〇	六、一九二、五五	六、六	〇、八八八
大正十三年 度	四、八九八、〇〇〇	二、〇四〇、〇〇〇	七、六三三	七、八八三、三七	六、四	一、〇三三
大正十四年 度	五、二八九、三三三	二、二五〇、九八七	八、〇六八	七、八九二、〇六	六、五五	〇、九九
昭和元年 度	五、六一三、三三三	二、三三三、三七七	七、六七〇	七、四七〇、四三	七、三三	〇、九九七

保管、検査及代辦 埠頭に於ける貨物保管は多く倉庫營業の範圍に屬するが故に此處には倉庫業以外の保管に關する貨物に關し記述
 す即ち船舶より陸揚せられたる貨物は陸揚後四日間又鐵道若くは市内より埠頭に搬入したるものは荷卸後七日間を無料保管期間とし其の以

後は貨物取扱規程に依り保管料を徴収す又貨物の検査に關しては大正二年八月大豆其の他の検査規則を設け大正九年四月改正して大豆、豆油、高粱、包米又は豆粕其の他滿洲輸出農産物は検査の請求に應じて重要物産取引所に於ける取引標準に格付を爲したるが遺は農産物をし

て一層其の品質の改良進歩を促進せんとする主旨により特に設けたるものなり
又會社は貨主の便宜と貨物の停滯を防ぐ爲埠頭構内に於ける貨物に對し明治四十三年八月代辦事務を開始せしが大正十二年十二月國際運送株式會社(現今國際運輸株式會社)に之を委託することとなりたり代辦事務とは即ち貨主の依頼に依り通關手續、運送取扱、倉庫寄託、海上保險契約の締結、代金の取立、免重徵專照申請手續、子口半稅單申請手續、運照申請手續、陸揚證明書手續、貨物に關する検査及證明請求手續、事故損害賠償金の取立等を爲すものにして始め無料取扱となせしが漸次依頼者の増加に伴ひ低率なる料金を徴することとし最近は開始當時の一萬餘件に比し三倍の三萬餘件に増加せり

大正六年度以降昭和元年度に至る當埠頭の貨物集散狀況を表示すれば左の如し

大連埠頭貨物集散狀況 (單位噸)

年 度	入			出		
	船	貨車	計	船	貨車	計
大正六年度	三五四三七八	八五〇、四二二	三、七六六、九二二	四、二五五、八一	九、〇二七、四四四	四、〇九五、八
同 七 年 度	四〇、九八五	〇、四〇〇、一六二	二、六五五、九五一	四、〇〇、七四二	一、八八〇、二八八	二、八八〇、二
同 八 年 度	二、八八六、四二一	五、〇九九、六二二	四、五〇、九四九	一、五〇六、三三三	三、三三三、三三三	五、三三三、三三三
同 九 年 度	五、三三〇、九九九	八、三三二、三三三	一、〇五五、二七九	一、〇五五、二七九	三、三三三、三三三	四、三三三、三三三
同 十 年 度	四、九四八、七〇	七、九四三、三三三	一、七九六、五五五	一、七九六、五五五	五、〇五〇、四九七	六、〇五〇、四九七
同 十 一 年 度	六、〇五〇、四九七	七、四一、五〇四	七、七、八七、三三三	三、三三三、三三三	六、三三三、三三三	三、三三三、三三三
同 十 二 年 度	三、五五八、三三三	九、五、四三、四三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	七、七、七、七、七	三、三三三、三三三
同 十 三 年 度	四、三三三、三三三	九、〇六五、五三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	九、〇六五、五三三	四、三三三、三三三

水 諸 料 金

開業當時に於ては陸軍運輸部大連出張所々定の大連棧橋使用規則並普通船舶棧橋留心得に準據して取扱へるも爾來十數回の改正をなし現在施行のもの左の如し

埠頭貨物取扱規則抜萃 (大正十五年二月改正)

第一船内人夫賃	埠頭貨物取扱規則抜萃 (大正十五年二月改正)	第一船内人夫賃	埠頭貨物取扱規則抜萃 (大正十五年二月改正)
一 一般作業	一 普通貨物	一 一般作業	一 普通貨物
一 筒一噸又は一噸を超える貨物は別に定むる所に依る	一 筒一噸又は一噸を超える貨物は別に定むる所に依る	一 筒一噸又は一噸を超える貨物は別に定むる所に依る	一 筒一噸又は一噸を超える貨物は別に定むる所に依る
特別貨物	特別貨物	特別貨物	特別貨物
品名	單位	品名	單位
駱駝、牛、馬、騾、驢(容器に入れざるもの)	頭	駱駝、牛、馬、騾、驢(容器に入れざるもの)	頭
羊、山羊、豚	隻	羊、山羊、豚	隻
小船	隻	小船	隻
死體	噸	死體	噸
危險品	噸	危險品	噸
貴重品	噸	貴重品	噸
價格金壹千圓迄	金貳錢を加ふ	價格金壹千圓迄	金貳錢を加ふ
價格金壹千圓以上金壹千圓若は其の未滿毎に	金貳錢を加ふ	價格金壹千圓以上金壹千圓若は其の未滿毎に	金貳錢を加ふ

危険品並貴重品の品類の範圍に就ては貨物賃金表を準用す

二 特別作業

其の都度協定するものとす

三 戎克揚積の場合は船内人夫賃を申受けず

第二 陸揚貨及船積貨

イ 普通貨物 (每一噸に付)

一箇一噸又は一噸を超える貨物は別に定むる所に依る

ロ 特殊貨物

品名

駱駝、牛、馬、騾、驢(容器に入れざるもの)

羊、山羊、豚(同)

小船類

死體

危険品

其他

貴重品

豆類

穀類及種子

食鹽類

豆油類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

豆類

陸揚貨、船積貨各 金五拾五錢

陸揚貨、船積貨各 金壹圓五拾錢

陸揚貨、船積貨各 金參拾錢

陸揚貨、船積貨各 金參圓

陸揚貨、船積貨各 金貳圓

陸揚貨、船積貨各 金六拾錢

陸揚貨、船積貨各 金壹圓貳拾錢

陸揚貨、船積貨各 金四拾錢

陸揚貨、船積貨各 金八錢を加ふ

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

陸揚貨、船積貨各

第四 殘荷取扱料

本貨物に對しては殘荷取扱料を申受けず

品名

普通貨物

小船類

品名

小

普通貨物

小船類

品名

小

普通貨物

小船類

品名

小

第三 假置料

イ 普通貨物 (每一日一噸に付)

ロ 特殊貨物 (每一日に付)

品名

小船類

死體

危險品

貴重品

木材

礦

品名

小

普通貨物

小船類

品名

小

普通貨物

小船類

品名

小

普通貨物

小船類

品名

小

貨率 金參錢五厘

貨率 金四拾錢

貨率 金參拾錢

貨率 金拾錢

貨率 金拾錢

貨率 金拾錢

貨率 金貳錢

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

貨率 金壹錢五厘

第三章 港費及埠頭

死 體 一 箇

貴重品の品類の範圍に就ては貨物賃金表を準用す

一箇一噸又は一噸を超える貨物は別に定むる所に依る

大連埠頭手荷物取扱料金表 (大正一五、五社告第一〇號改正)

一 埠頭構内運搬料

種 別	單 位	料 金
五才若ハ五十斤未滿	每 一 箇	金 五 錢
十才若ハ百斤未滿	同	金 十 錢
十才若ハ百斤以上ハ一才若ハ十斤及其ノ未滿毎ニ増ス	同	金 二 錢

一 保管料

種 別	單 位	料 金
十才若ハ百斤未滿ノモノ	一日每一箇ニ付	金 二 錢
十才若ハ百斤以上ノモノ	同	金 十 錢

一 大連市内配達料

種 別	料 金
第一區	金 三 錢
第二區	金 五 錢
第三區	金 七 錢

五〇二

金 拾 錢 圓

每一箇五才若ハ五十斤未滿	金 十 錢
每一箇五才若ハ五十斤以上ハ一才若ハ十斤ヲ増ス毎	金 三 錢

埠頭船舶取扱規則拔萃 (昭和二年三月改正)

第一 埠頭發著手數料

總 噸 數	一回發著に付	發著手數料
百 噸 未 滿	同	金 參 圓
二 百 噸 未 滿	同	金 拾 五 圓
五 百 噸 未 滿	同	金 參 拾 五 圓
一 千 噸 未 滿	同	金 參 拾 五 圓

總噸數一千噸以上は一千噸若は其の未滿毎に金貳拾圓を加ふ

第二 埠頭轉繫手數料

總 噸 數	一回轉繫に付	料 金
百 噸 未 滿	同	金 壹 圓
二 百 噸 未 滿	同	金 貳 圓
五 百 噸 未 滿	同	金 拾 五 圓
一 千 噸 未 滿	同	金 拾 五 圓

總噸數一千噸以上は一千噸若は其の未滿毎に金拾圓を加ふ

- 一 焚料炭又は淡水のみ搭載の爲埠頭に發著若は轉繫する場合には規定料金の半額を申受く
- 二 夜間に發著若は轉繫する場合には規定料金の二割増を申受く

五〇三

第三章 港 灣 及 埠 頭

五〇四

- 三 天候不良のときは特別の割増料金を申受けることあるべし
- 四 曳船のみに依る發着者は轉繋の場合には五割増の料金を申受く
- 五 寺兒溝棧橋に繋留する船舶にして埠頭に轉繋するときは埠頭發着手数料を申受く

第二の二 埠頭繋船料

- 一 一隻一回の繋留二十四時間又は其の未滿毎に總噸數一噸又は其の未滿に付金壹錢を申受く
但し總噸數二千噸未滿の船舶に對しては四十八時間、總噸數二千噸以上の船舶に對しては二千噸以上の千噸又は其の未滿に付二十四時間割を以て計算したる時間に四十八時間を加へたる時間に對しては之を申受けず
- 二 埠頭繋船區間に於ける轉繋の場合は之に要する時間を繋留時間に算入せず
- 三 修繕の爲濱町埠頭繋留の船舶に對しては埠頭繋船料を免除す
- 四 六月一日より十月三十一日に至る五箇月間は埠頭繋船料を免除す

第三 寺兒溝棧橋繋船料

- 一 一隻一回繋留に付埠頭發着手数料の五割増を申受く
- 二 船舶の棧橋繋留三日以上に互るときは四日目より一日又は其の未滿毎に總噸數一噸又は其の未滿に付金壹錢を申受く
繋留第一日は之を一日に計算す
- 三 棧橋繋留中の船舶にして一時棧橋を離れ沖合假泊の後再び棧橋に繋留する場合には其の都度埠頭發着手数料と同額の料金を申受く
- 四 棧橋繋留中の船舶にして棧橋に於て轉繋する場合には埠頭轉繋手数料と同額の料金を申受く

第四 浮標使用料

總噸數	一回に付	料
一 千噸未滿	同	金拾圓
五 千噸未滿	同	金拾五圓

五 千噸以上

同

金貳拾圓

- 一 浮標より埠頭に轉繋するときは埠頭發着手数料を申受く
- 二 埠頭より浮標に轉繋するときは浮標使用料を申受く

大連埠頭船給水料 (改正大正一〇、四社告第四號)

當埠頭に於ける船舶給水料を左の通定む

- 一 大連埠頭及北大山通埠頭繋留船舶給水料 一噸(一立方米突に付) 金五拾四錢
- 一 大連港内碇泊船舶(濱町埠頭及寺兒溝棧橋を含む)給水料 同(同) 金七拾五錢

旅順埠頭船給水料 (大正二二、一〇社告第一二四號)

一噸(一立方米突に付) 金五拾四錢

旅順埠頭繋留船船料

大連港水先料 (明治四三、一一社則一一號制定)

明治四十三年十一月以降大連港水先料を當分當社に於て之を負擔す

小蒸汽船賃貸規定 (改正大正二二、五鐵貨甲第二二號)

- 一 當所都合の許す場合には請求に應じ小蒸汽船を賃貸することあるべし
- 二 小蒸汽船賃貸料は左の割合により申受く

イ 港内碇泊船舶に往來する場合

モーターボート

防波堤内の場合	一 往復	金貳圓
防波堤外の場合	同	金參圓
總噸數三十噸未滿の小蒸汽船	一隻に付一時間若は其の未滿毎に	金五圓
總噸數百噸未滿の小蒸汽船		

一隻に付 一時間若は其の未滿 金 拾 五 圓
 一時間以上は其の超えたる一時間若は其の未滿毎に 金 拾 圓
 總噸數百噸以上の小蒸汽船

一隻に付 一時間若は其の未滿 金 貳 拾 五 圓
 一時間以上は其の超えたる一時間若は其の未滿毎に 金 拾 五 圓

其の他の場合
 臨時の協定に依る

- 三 日没より午後十二時迄は五割増午後十二時以後日出迄は十割増を申受く
- 四 天候不良のときは特別の割増を申受くることあるべし
- 五 賃貸中に生じたる自他の損害は當所の故意又は重大なる過失に因る場合の外總て賃借人に於て負擔すべきものとす
- 六 本規定は賃貸したる小蒸汽船を曳船用に供する場合には適用せず

曳 船 規 定 (改正大正九、一一 運輸甲第三一四號)

- 一 當所都合の許す場合には所屬小蒸汽船の曳船申込に應ずることあるべし
- 二 大連灣内に於ける曳船料は當分左の割合にて申受く
 - イ 一回一隻を曳きたるとき一時間以内金參拾五圓
 - ロ 一回一隻を曳き一時間を超えたるときは超えたる一時間又は其の未滿毎に金貳拾圓を加ふ
 - ハ 同時に二隻以上を曳きたるときは一時間若は其の未滿毎に前二項の外一隻に付金拾五圓を加ふ
 - ニ 當所々定の終業時間より午後十二時迄若は其の以内は五割増とし午前零時より所定就業時間迄若は其の以内は十割増とす
 - ホ 天候不良の場合には特別の割増を申受くることあるべし
 - ヘ 本料金は百噸未滿の船、戎克及來多曳船の場合に適用するものとす

ト 前記各項以外の場合は其の都度協定するものとす

- 三 大連灣以外に於ける曳船料は其の都度協定するものとす
- 四 曳船時間は曳船を始めたる時間より起算するものとす
- 五 曳船と第一被曳船間の曳綱は當所之を準備し其の他に要するものは被曳船の負擔とす
 但し曳船切斷に基因する損害に對しては當所は其の責に任ぜざるものとす
- 六 曳船作業中に生じたる自他の損害は、當所の故意又は重大なる過失に基因したることの證明をなし得る場合の外は總て曳船申込者の負擔となす

舢 船 賃 貸 規 定 (改正大正九、一一 運輸甲第三一三號)

- 一 舢船は當所都合の許す限り賃貸することあるべし
- 二 舢船賃貸料は左の割合に依り申受く
 - 一 石炭及鐵石類
 - 一 雜費及普通木材類
 - 一 舢船の最低賃貸料は其の舢船の積載定量に賃貸料金を乗じたるもの半額とす
 - 一 長大重量の特種貨物は別に協定す
- 三 舢船の滯泊料は舢船が貨物を陸揚すべき場所に著したるときより左の計算により申受く
 - 一 中 丸 級 (積噸數二百五十噸) 金 參 拾 五 圓
 - 一 國 丸 級 (積噸數百噸) 金 貳 拾 圓
 - 一 其の他の舢船 (積噸數百噸未滿) 金 貳 拾 圓

- 四十八時間を超えたるときは其の超えたる二十四時間若は其の未滿毎に
- 四 滯泊料は如何なる事由あるも右の時間に依り申受く
- 五 舁船賃貸後借主の都合に依り荷役を爲さず
- 空しく滯泊したるときは相當の滯泊料を申受く
- 六 陸揚場所が舁船の繋留に適せざるときは場所替を請求することあるべし
- 七 舁船の曳船は操縦上當所に於て必要と認めたる場合に限り無料とす

第一條 舁鼠の驅除を要する船舶は舁鼠申込書を埠頭事務所にて提出せらるべし

第二條 舁鼠手數料は左の區別に従ひ之を納付せらるべし

登簿噸數

壹千噸未滿

金 五拾圓

登簿噸數壹千噸以上は千噸若は其の未滿毎に金拾五圓を加ふ

第三條 舁鼠を完了したる船舶には關東廳海務局の具書ある證明書を交付す

第四條 舁鼠施行中の船舶は埠頭事務所より交付する注意書に基き施設及取締の責に任ぜらるべし

埠頭特定期料 金 (改正大正十五年一月十五日現在)

一 貨物積卸賃

貨物船積賃

單位 (噸內入夫)

賃 金

一ノ二 豆油倉庫使用荷役料

單位

賃 金

豆油倉庫使用荷役料

單位 (重量)

賃 金

- 一 豆油倉庫は壓搾豆油(黃豆)の船積の場合に限り使用し保管又は青豆油若は「ベンジン」其の他の抽出油船積の取扱を爲さず
- 二 豆油倉庫を使用せむとするものは別に定むる豆油倉庫使用申込書を提出するものとす
- 三 前號一申込書上の數量は積込船舶一隻に付最低四百噸とし最低重量に滿たざる場合は最低重量に對する料金を申受く
- 四 豆油の持込並油槽の使用は船積開始の日の二日前後とす
- 但し特に承認したる場合は此の限に在らず
- 五 豆油船積終了後は直に整理に著手し遅くとも翌日中に殘餘の豆油、容器其の他を引取るべきものとす

二 船内荷練賃

作業種別

單位

賃 金

同一船舶内荷練

單位

賃 金

隣接せる船舶間荷練

單位

賃 金

隣接せざる船舶間荷練

單位

賃 金

特量品に就ては其の都度協定す

三 特殊貨物船内入夫賃

豆油流し込み

單位

容積に依る場合

重量に依る場合

レール六十封度以上のもの

單位

賃 金

賃 金

一噸以上三噸未滿

單位

賃 金

賃 金

三噸以上五噸未滿

單位

賃 金

賃 金

五噸以上十噸未滿

單位

賃 金

賃 金

十噸以上十五噸未滿

單位

賃 金

賃 金

十五噸以上二十噸未滿	一	噸	金壹圓四拾錢	金貳圓五拾錢
二十噸以上二十五噸未滿	同	同	金壹圓五拾錢	金參圓
二十五噸以上三十噸未滿	同	同	金貳圓	金四圓
三十噸以上三十五噸未滿	同	同	金貳圓五拾錢	金六圓
三十五噸以上は臨時の約束に依る				

三ノ二 特種船内作業賃

船首部、船尾部、炭箱、水輪等に於ける船内人夫作業又は船内荷操作業が一般作業に比し困難なりと當社に於て認めたるときは各所定料金の十割増を申受く

但し沖合荷役の場合は所定沖合荷役賃の五割増を申受く

四 特種貨物陸揚及船積賃

種別	單位	容積に依る場合	重量に依る場合
六十封度以上のもの	一	噸	金八拾錢
一噸以上三噸未滿	同	同	金壹圓
三噸以上五噸未滿	同	同	金壹圓貳拾錢
五噸以上十噸未滿	同	同	金壹圓貳拾錢
十噸以上二十噸未滿	同	同	金貳圓
二十噸以上二十五噸未滿	同	同	金貳圓五拾錢
二十五噸以上三十噸未滿	同	同	金參圓
三十噸以上三十五噸未滿	同	同	金四圓
三十五噸以上は臨時の約束に依る			金六圓

五 沖合荷役賃

但し陸揚の際貨車へ直積したるとき又は船積の際貨車より直積したるときは揚積賃は其の半額とす

汽船より積積又は其の反對(船内人夫賃共)

一般貨物	一	噸	金四拾錢
危險貨物	同	同	金六拾錢
火藥類	同	同	金八拾錢
特量貨物	同	同	特殊貨物船内人夫賃の十五割

沖合船間の場合(船内人夫賃共)

危險貨物	一	噸	金九拾錢
埠頭繫留船船積荷役賃 <small>(等量積留船積)</small>	一	噸	金參拾錢

但し船内人夫賃及陸揚又は船積賃は別に之を申受く

船内貨物の海難に因る損害に對しては會社其の責に任ぜず

六ノ二 浮標繫留船船積荷役賃(等量積留船積)

一般貨物	一	噸	金四拾錢
危險貨物	同	同	金六拾錢
特量貨物	同	同	特殊貨物船内人夫賃の十五割
最低料金			金貳拾圓

但し船内人夫賃及陸揚又は船積賃は別に之を申受く

船内貨物の海難に因る損害に對しては會社其の責に任ぜず

七 船積貨物 (沖合寺兒溝棧橋間) 但し會社之廻漕す

危險貨物	一噸及一噸未滿	金 五圓
	一噸以上は一噸又は一噸未滿毎に	金 貳圓五拾錢
	十噸以上は一噸又は一噸未滿毎に	金 壹圓五拾錢

貨主の要求に依り危險貨物登載船を滞泊せしめたる時は船積荷役終了後船積貨物規定に依り別に滞泊料を申受く
別段の定なき限り船積の取扱は船積貨物規定に依る

八 寺兒溝棧橋積卸貨

危險貨物(船舶揚より危險物倉庫迄又は其の反對)	一噸	金 七拾錢
雜貨(同)	同	金 八拾錢
減摩油(同)	一樽	金 四拾錢

(但し減摩油積卸貨中には船内人夫賃金拾錢を含む)

船舶揚より寺兒溝火藥倉庫迄又は其の反對の場合には前項の外に所定の荷練賃を申受く

九 接續貨物費用

一 普通貨物	一噸	金 壹圓貳拾錢
一 危險貨物	同	金 貳圓

一 特量貨物 陸揚貨、船積貨及荷練を要したる場合には荷練賃を併算したるものを申受く接續貨物に對しては前項の外別に荷練賃及假置料を申受けず

一〇 危險貨物貨車積卸貨 (鐵道貨物貨金表に掲名せざる危險物)

危險貨物貨車積込貨	小口扱	一百斤	金 六錢
	一口車扱	一百斤	金 七拾錢
危險貨物貨車卸貨	小口扱	一百斤	金 五錢
	一口車扱	一百斤	金 六拾錢
一 看貫貨	雜貨	單位	貨金
	物(百八十五斤未滿)	一件二十袋未滿	金 參拾錢
	(同)	同二十袋以上一袋に付	金 四拾錢
	(同)	同二十袋未滿	金 貳錢五厘増
	(同)	同二十袋以上一袋に付	金 五拾錢
	(同)	同二十袋以上一袋に付	金 參錢増
	豆	同三十枚未滿	金 四拾錢
	(同)	同三十枚以上一枚に付	金 八厘増
	糖耐及油類(籠、箱及ドラム入)	一箇(二十才未滿)	金 八錢
	(同)	同(二十才以上)	金 拾五錢
	糖耐、油類の空籠空箱及空樽	同	金 貳錢
	石油箱入豆油類	一箱(二罐入)	金 貳錢五厘
一二 改装及荷造貨(絲、釘、ハンダ會社持)			

品名	作業種別	單位	貨金
袋物(百八十五斤未滿)	普通改装	一袋	金五錢
同(百八十五斤以上)	同	同	金六錢
同	口縫直し	同	金參錢五厘
同	看貫付の場合	同	金壹錢五厘増
同	二重麻袋の場合	同	金壹錢五厘増
同	混	同	金五厘増
同	萬通し使用の場合	同	金貳錢増
同	唐箕使用の場合	同	金參錢増
同	荷印刷込	同	金貳錢五厘
同	荷印刷込他作業に伴ふとき	同	金五厘増
同	二枚續麻袋普通改装	同	金拾錢
同	普通改装(出來上り)	同	金貳錢
同	漚付改装(同)	同	金四錢五厘
同	漚詰(看貫付)一箱二漚入	一箱	金九錢
同	同(豆油粘附屬荷造場)(看貫付)	同	金八錢
同	中味均一箱詰(看貫付)	同	金拾錢
同	中味均一樽入(看貫付)	一樽	金貳拾八錢
同	荷印刷込一箱(二漚入)	一箱	金壹錢八厘
同	荷印刷込他作業に伴ふとき	同	金六厘増

品名	作業種別	單位	貨金
同	荷印刷	同	金貳錢五厘
同	荷印刷他作業に伴ふとき	同	金壹錢參厘増
同	帶鐵打付	同	金貳錢五厘
同	帶鐵打付他作業に伴ふとき	同	金壹錢參厘増
同	二漚箱詰	同	金貳錢
同	番號荷印量目又は番號量目片面刷込	一樽	金五錢
同	右兩面刷込	同	金八錢
同	普通改装	一袋	金八錢
同	袋糺合せ	同	金七錢
同	普通改装(仄又は麻袋詰)	同	金七錢
同	繩掛(繩貨主持)	同	金四錢
同	繩掛他作業に伴ふとき(繩貨主持)	同	金貳錢
同	同(看貫付)	同	金貳錢増

解凍ドラム入鉛封作業に對しては其の都度協定するものとす

一三 荷線貨

品名	單位	貨金
大豆、雜穀、種子類及其の他の袋物 (百八十五斤以上)	一袋	金四錢
同	同	金壹錢五厘
豆粕	一噸	金壹錢四厘
燒酎及油類(箱及ドラム入)	一噸	金七拾錢

第三章 港灣及埠頭

石油箱入豆油類	一	噸	金壹圓貳拾錢	五二六
落花 生(二枚積麻袋入)	同	同	金壹圓五拾錢	同
撒 コ ー ク ス	同	同	金六拾錢	同
鐵 石 類	同	同	金六拾錢	同
鐵 鐵	同	同	金六拾錢	同
木 材(工を加へざるもの)	同	同	金六拾錢	同
雜 貨	同	同	金五拾錢	同
死 體	一	箇	金壹圓	同
危險貨物(燐寸)	一	箇	金六拾錢	同
同 (其他)	同	同	金九拾錢	同
同 (火藥倉庫鐵道線路間荷線)	同	同	金壹圓貳拾錢	同
小口坂發送荷線 <small>(發送直率に荷線を、場合に依る)</small>	同	同	金參拾錢	同
埠頭大山埠頭相互間荷線	同	同	金四拾五錢	同
麥粉、豆粕、大豆、雜穀、種子類及其他の袋物	一	噸	金四拾五錢	同
石炭及鑛石類	同	同	金四拾五錢	同
雜 貨	同	同	金六拾錢	同

一 料金計算最低噸數を二十噸とす
 二 大山埠頭に於ける貨物の積卸は貨主の負擔とし遲滞なく之を爲すものとす

客積に依る場合
 貨 金壹圓
 重量に依る場合
 金壹圓貳拾錢

三噸以上五噸未満	同	同	金壹圓貳拾錢	金壹圓五拾錢
五噸以上十噸未満	同	同	金壹圓五拾錢	金貳圓
十噸以上十五噸未満	同	同	金壹圓七拾錢	金參圓
特量貨物 十五噸以上二十噸未満	同	同	金貳圓	金四圓
二十噸以上二十五噸未満	同	同	金貳圓五拾錢	金五圓
二十五噸以上三十噸未満	同	同	金參圓	金六圓
三十噸以上三十五噸未満	同	同	金四圓	金九圓
三十五噸以上は臨時の約束に依る	同	同	同	同

穀類及種子類豆粕油類其他普通品の配替賃は荷線賃の半額とす
 埠頭倉庫は野積場と小崗子詰所間に限り左の賃金を申受く
 混合保管大豆、豆粕及普通預豆粕 一車(三十三米噸以内)に付
 埠頭構内と寺兒溝棧橋との相互間に行はるゝ荷線に對しては所定荷線賃の五割増を申受く

特 量 貨 物	特量貨物荷線賃の半額	金參圓
一五 起重機、起重機船、潜水器船使用料	一時間又は其の未滿毎に	金拾圓
種 別	一時間又は其の未滿毎に	金拾圓
三十噸起重機	金參拾圓	金拾圓
五十噸起重機船	金五拾圓	金貳拾圓
五十噸起重機及起重機船	金拾圓	金六圓
潛水器船	金拾圓	金五圓

但し時間の計算は其の使用地點に到着したる時より起算し其の作業の終了したるときを以て終る

品名	單位	貨金
袋物	一袋	金八厘
豆 粕(大小共)	一斗	金參厘
豆 油(石油箱入)	一箱	金五厘
同(バレル入)(總量風袋検査)	同	金壹錢五厘
同 總量検査	同	金壹錢
同 風袋検査	同	金壹錢
雜貨	一噸	金拾五錢
一七 雇 傭 賃	一時間	貨金 貳圓
種 別		
日 本 人 夫	一時間	金參圓五拾錢
同	一時間	金貳圓五拾錢
苦 力	一時間	金貳圓五拾錢
同	一時間	金貳圓五拾錢
同	一時間	金貳圓五拾錢
常 備 苦 力	一時間	金貳圓五拾錢
同	一時間	金貳圓五拾錢
同	一時間	金貳圓五拾錢

タリマン(支那人)	一 半	日	金壹圓貳拾錢
同 (同)	一 半	日	金貳圓
同 (日本人)	一 半	日	金參圓
同 (同)	一 半	日	金五圓
夜業を爲したるときは左の割増金を申受く			
一 所定終業時より午後十二時迄若くは其の以内	十 五	割 割	分 分
一 午前零時より所定就業時迄若くは其の以内			
一八 代 辨 手 敷 料			
一通 關 手 續			

筒數又は價額に依り計算し何れか高額のもの申受く

イ 筒數に依りて計算する場合

一件に付	筒 數	一筒以上十筒迄	金 壹 圓
		十一筒以上五十筒迄	金貳圓五拾錢
		五十一筒以上	金 四 圓
		但し價格金拾圓未滿の場合	金 五 拾 錢

ロ 價格に依りて計算する場合

一件に付	價 格	金五千圓以上金壹萬圓迄	金 五 圓
		金壹萬圓を超ゆるときは五千圓若くは其の未滿毎に	金 貳 圓
		麻袋豆粕麥粉及大豆其の他の穀物又は同一品質にして荷造せざる貨物	金 貳 圓

但し數量に拘らず

貨物の性質上箇數を以て計算し難きものは臨時の約束に依る

二 運送取扱

通關手續代辨手数料と同率とす

三 倉庫寄託に關する手續

但し通關手續の代辨と同時に運送取扱の代辨を爲したる場合には其の一方のみを申受く

四 海上又は陸上保険契約の締結

五 代金の取立(但し南滿洲鐵道運送規則及び南滿洲支那鐵道運送規則に依る場合を除く)

取立金額

同

六 免重徵專照申請手續

七 子口半稅單申請手續

八 運照申請手續

但し支那收入印紙代金は別に之を申受く

九 陸揚證明書申請手續

但し收入印紙代金は別に之を申受く

十 貨物に關する検査及び證明請求手續

十一 事故損害賠償金の取立

十二 代辦事務に關聯し金錢の立替を爲したるときは金拾圓若くは其の未滿毎に金五錢の割にて別に手数料を申受く

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

金壹千圓迄

金壹百圓若くは其の未滿毎に

金貳拾五錢

一件に付

同

同

同

一件に付

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

著埠船船輸出入貨物及荷役噸數は逐年激増して益好況を呈し荷役作業力も亦漸次進歩の跡を示せるは叙上の如し従つて營業收支の狀態も漸次良好なるは勿論なりと雖事業の性質上收支の必ずしも之に伴はざるものあるは埠頭營業直接の目的が滿洲に於ける海陸關門の聯絡を完全ならしめて通商貿易を促進せしむるの重要機關たるを主眼とするが故に會社は從來之により直接の収益を目的とせず而も尙收入の増加に従ひて料金を益低廉ならしめ船舶の著埠を獎勵し其の諸掛を減せしむるの方針を採り以上の如くにして會社は埠頭築造費に巨額の資金を固定せしめたるものなれば將來に於ても之に依り直接利潤を求め得べきものとはならざるべし

左に大正六年度以降昭和元年度に至る大連埠頭の營業收支を擧げむ

年 度	收 入			支 出		差 引 益	收入百に付支出
	船舶收入	埠頭收入	雜收入	計	計		
大正六年	1,131,488.94	2,555,549.63	1,246,923.36	2,883,980.93	2,545,757.57	2,777,757.57	90
同 七 年	1,632,766.60	3,413,559.08	2,269,032.81	3,794,289.96	3,897,583.06	1,033,549.10	103
同 八 年	1,864,335.51	4,595,017.21	5,241,246.61	5,295,565.33	6,652,223.33	1,356,657.89	126
同 九 年	1,835,560.11	6,107,183.05	4,000,387.91	6,910,777.86	6,802,149.99	1,086,787.87	98
同 十 年	3,666,686.55	6,449,508.97	3,280,752.7	7,174,200.69	5,689,272.74	1,484,927.95	108
同 十 一 年	4,497,740.33	7,442,246.96	3,066,749.33	8,222,878.42	6,033,766.90	2,189,111.52	133
同 十 二 年	4,496,693.57	6,777,276.56	2,966,682.9	7,533,599.42	5,895,383.95	1,638,215.47	118
同 十 三 年	5,136,046.68	7,447,266.50	3,093,382.33	8,180,259.41	6,811,645.97	1,368,613.44	112
同 十 四 年	5,721,699.35	8,226,102.95	3,273,967.44	9,161,599.04	7,977,019.25	1,184,579.79	117
昭和元年	6,134,032.7	8,656,688.7	3,273,967.44	9,586,369.96	8,033,897.82	1,552,472.14	114

ト 旅順出張所

大正十二年八月十日埠頭事務所旅順出張所を開設し従來興業部販賣課の取扱にかゝる業務一切を繼承し大連港の補助港として主として石炭輸出作業をなす現在の施設を見るに

棧	橋(護岸に平行)	長さ四六〇尺、幅二六尺
浮棧	橋(ボンツーン)	二 箇
給水船		一隻積載量五〇噸
構内鐵道線路延長		一、五一八尺
使用線路		一、一五五尺
通過線路		約一〇、〇〇〇坪
構内面積		

船舶貨物集散狀況は逐年増加の盛況を示せり目下工事中の海面埋立並棧橋の増築構内の擴張を見るに至らば更に是等を利用するもの多きに至るべし今開所以來の業績を示せば左の如し

著 埠 船 船 狀 況 (但大正十二年度は八月十日以降とす)

年 度	日 本 船		支 那 船		外 國 船		計
	隻 數	噸 數	隻 數	噸 數	隻 數	噸 數	
大 正 十 二 年 度	三九	一〇六,〇三三	八	一四,四二二	一	四七	一〇一,五九二
同 十 三 年 度	一〇四	二二〇,〇〇六	三〇	七七,四八二	四	一三八	二九三,九五五
同 十 四 年 度	一〇六	二八〇,五七七	三八	五三,三七七	四	一四八	三四五,七二二
昭 和 元 年 度	一三三	三〇七,〇〇一	二四	三七,一七五	四	一五九	三四九,七三〇



營 口 埠 頭



營 口 遼 河 の 結 氷

尙輸出入貨物噸数は左の如し
 輸 出 入 貨 物 (但大正十二年度は八月十日以降とす)

年 度	輸 出			輸 入			船 舶 炭 料 炭 合 計
	石 炭	鹽	其 他	鹽	其 他	計	
大 正 十 二 年 度	一〇九五三〇	一一四六五	六八四〇	一〇〇四九	一	一〇〇五〇	七七四二
同 十 三 年 度	三〇五、七二	三三、八二	七、八七	一〇〇、四九	二四	一〇〇、七三	三三、四一九
同 十 四 年 度	三三八九三	一七、九〇〇	八、〇三三	一一、五二五	一	一一、五二五	三三、五二七
昭 和 元 年 度	三三、七三三	一五、〇二六	三、一九六	一六、五二九	一	一六、五二九	二七、〇二五
計	一〇、九五四	一、一四六	一、七三六	一、〇〇九	一	一、〇一〇	一、三三、五七

二 其他の埠頭

イ 安東埠頭

明治四十五年四月大連埠頭事務所安東支所を設け業務を開始したるが大正三年五月安東支所を廢し營業其他一切を擧げて安東驛所管に移せり

歐洲大戰前後より貨物は關稅、船腹の影響により鐵道に依るもの多く大正六年大阪商船は定期航路を廢止したる等一時埠頭業務は不振を見るに至りしも同八年安東を中心とせる輸出木材増加して稍挽回し同九年以後は船腹の過剩を次第に此方面に向くるもあり大阪商船も同十年より定期航路を復活し鐵道貨物を船舶に吸収したる結果附近一帶の農産物殊に豆粕、豆油、大豆及小豆等の特産物の輸出も亦年々増加し此沿岸の主要港となれり

而して埠頭諸設備は漸次整頓して昭和元年度末にありては埠頭倉庫四棟千二百六十三坪三五、護岸延長九千百十尺、貯水池三萬五千坪、浮棧橋二箇及び鐵製クレーン(三噸)一臺あり

而して大正十五年に百參拾餘萬圓を投じ一萬九千尺餘の新堤防と附近一帯の雨水排泄工事に著手したるを以て是等竣工の際には此河港利用を一層有效ならしむべし

今大正六年度以降昭和元年度に至る當埠頭の取扱に係る輸出入貨物噸數及木材の輸入噸數を表示すれば左の如し

安東埠頭輸出入貨物

年 度	輸 入 貨 物	輸 出 貨 物	年 度	輸 入 貨 物	輸 出 貨 物
大 正 六 年 度	一九五七・四七	二二七・四八九	大 正 十 一 年 度	一九二・四三三	五八七・二六
同 七 年 度	一六五・一〇五	三〇〇・六〇	同 十 二 年 度	二〇六・八九七	八六四・三七
同 八 年 度	二五三・七三九	一〇一・八七二	同 十 三 年 度	九三・六六九	二二七・八六
同 九 年 度	一八〇・一〇五	三二九・二四	同 十 四 年 度	二七・八八一	二六九・七六
同 十 年 度	一九七・七三〇	八〇・四五二	昭 和 元 年 度	一六二・五五二	三七一・二〇

木材輸入噸數

大 正 六 年 度	二四六・七〇四	大 正 十 一 年 度	一八二・五一三
同 七 年 度	一四五・六三八	同 十 二 年 度	一九二・四四四
同 八 年 度	一七七・一八四	同 十 三 年 度	八五・五六五
同 九 年 度	一七〇・〇三三	同 十 四 年 度	一〇七・〇八三
同 十 年 度	一八九・一六三	昭 和 元 年 度	一五一・三三八

營口埠頭

明治四十三年十月大連埠頭事務所營口支所として埠頭事務を開始せるが大正三年五月營口埠頭支所を廢し同時に之が業務一切を營口驛の

所管に移せり初め構内設備に殆ど見るべきものなかりしも大正五年度末にありては倉庫六棟(五、〇九九坪)護岸は延長四千二百二十六尺となり外に野積場、貯炭場並海陸諸設備を整へたり然れども其後河港に必要な設備として河岸に鐵骨倉庫二棟を新設し又牛家屯貯炭場埠頭に船舶留所を二箇所貨物埠頭に同じく一箇所を増設したり然るに貯炭場石炭荷役及船舶作業を牛家屯埠頭に於て行ふは河流の關係と車輛入換作業等に著しく不便なるのみならず其位置港外にあるを以て保稅に不便を來す等の事情ありたれば大正十五年十月新市街第二鐵道用地内一切の設備を移轉することとなし將に工を了へんとす之にして完成せば内外の便は從前より敏活となり當港特有の發達を見られ得べし

當港は河港なるを以て十餘の埠頭は江岸に沿ひ帶の如く連り其の延長二哩に互るが故に保稅方法にも特殊の施設を要するを以て特許倉庫と稱し從來の缺陷を補へり即ち大正十五年十月從來の第三號倉庫を之に充つることとなし北京總稅務司の特許を得たり又同十五年八月試驗的に施工したる護岸シートパイルの成績より既に腐朽に近き木造護岸の改修を之に依らしむるの計畫あり

昭和元年度末に於ける當埠頭に於ける營業倉庫及上屋は鐵骨七棟、木造一棟及煉瓦造危險品倉庫一棟合計九棟にして六千九百五十七坪餘を有し護岸設備は汽船用として木造四百四十三米六〇、シートパイル七十三米五〇、浮船用として張石百九十一米六〇、石炭積用として六百五十四米五〇を有し總延長千三百六十三米二〇にして此の外貯炭場一萬七千八百坪、野積場一萬二千坪、浮棧橋十四箇、船渠一ありて僅に三千噸級汽船七隻を同時に繋留して全部に對し積卸作業を行ひ得るなり

而して當埠頭に於て取扱ふ輸出品の主なるものは石炭なるが外に大豆、豆粕、豆油、穀類等あり輸入品としては綿絲布、麥粉、穀類、苘、木竹材、セメント、石灰及食鹽等なり

今大正六年度より昭和元年度に至る當埠頭の著埠船舶隻數及輸出入貨物噸數を擧ぐれば左表の如し

營口埠頭著埠汽船及輸出入貨物

年 度	著 埠		汽 船		輸 入 貨 物 噸 數	輸 出 貨 物 噸 數
	隻 數	噸 數	隻 數	噸 數		
大 正 六 年 度	二九	三〇、〇三九	四四、九五七	一〇四、一五三		

年 度	大 正 七 年 度	大 正 八 年 度	大 正 九 年 度	大 正 十 年 度	大 正 十 一 年 度	大 正 十 二 年 度	大 正 十 三 年 度	大 正 十 四 年 度	大 正 十 五 年 度
埠頭	四三	一一五	六一	五五	六七	四九	一一九	一二三	一二三
汽 船	三八、八四二	一〇九、五二七	五〇、九六二	六七、二〇五	八〇、三五五	五九、五九四	一一一、四六一	二八三、〇五八	三三七、九一〇
一隻平均汽船噸數	七六、三五八	一〇〇、〇〇二	九六、一〇二	三三、三七四	一九、四六九	三九、八八一	三〇、二三五	五三、三六一	九三、三四二
輸入貨物噸數	一四五、一九一	一六六、三〇八	一六六、八一七	二九九、三八七	二九一、九六五	二二八、七〇一	二五一、四五四	四四六、八七九	六〇八、五三三
輸出貨物噸數	一四五、一九一	一六六、三〇八	一六六、八一七	二九九、三八七	二九一、九六五	二二八、七〇一	二五一、四五四	四四六、八七九	六〇八、五三三

ハ 上海埠頭

明治四十四年十月埠頭事務所上海支所開所以來歐亞並南支那交通貿易の中樞地として大連港と相俟て年と共に業務の繁忙増大を來し從て倉庫の新設、改築、船客待合所の新設、緊留區域の水深浚渫等をなし又曩に會社及大連汽船株式會社船船に限り諸般の取扱をなしたりしも大正十三年九月一日より佛國郵船會社船船の緊留及荷役取扱を契約實施し次で同十四年二月十五日より東洋汽船株式會社上海寄航船船に對し其の緊留並荷役に關する契約を結び實施する等施設の改良經營の擴張に漸次面目を改め同十五年九月十二日事務所を黃浦灘路二十四號正金ビルディング内に移轉したり是より先同十三年二月十九日埠頭事務所より獨立し上海事務所となり本社鐵道部直屬となれるが同十五年九月一日より又本社庶務部の管理に移し同時に埠頭業務の經營は大連汽船株式會社に委託し從來の直營を廢したり

次に本埠頭の施設を觀るに明治四十四年九月上海黃浦江下流に棧橋埠頭並附屬土地二萬餘坪倉庫九棟(三、〇〇〇坪)其の他の建物及附屬設備を購入す即ち當時の主なる設備は棧橋延長九七三呎、煉瓦二階建倉庫二棟、鐵骨平屋建四棟、木造平家建二棟、煉瓦平家建一棟、木造平家建一棟(三四三坪)計三千三百四十三坪と事務所其の他建物三棟、浚渫船一隻、泥受船二隻なり現在施設の主なるものは棧橋九百三十八呎、小蒸汽船一隻浚渫船二隻、泥受船四隻、倉庫十二棟、船客待合所一棟、緊留區域水深二十呎乃至二十六呎あり倉庫は三階建コンクリート

倉庫一棟、二階建煉瓦造二棟、鐵骨木造平屋四棟、木造平屋四棟、煉瓦造危險品倉庫一棟、計十二棟總延面積約八千二百五十三坪なり本埠頭開始當時に於ける上海の市況は革命動亂等の影響を受け頗る不況にして料金の低下其の極に達し新棧橋の經營甚だ困難なりしが大正三年末より同七年に至る間は上海航路、南支那航路及臨時航路の活躍により貨物取扱數量は戰前の約二倍となり戰後は反動的に一時戰前の數量より減じたりしも海運界の回復に伴ひ漸次増加して大正十三年に至り戰前を凌駕するに至れり陸揚貨物の主要なるものは大豆、豆粕、穀類、石炭、金物、苧等にして麥粉、綿絲布、穀類は主要なる輸出品となす貨物の陸揚船積仲仕に關する作業は大正十二年十二月三十一日國際運輸株式會社の經營に當らしめたり

今大正六年度以降昭和元年度に至る當埠頭の著埠汽船及輸出入貨物噸數を表示すれば左の如し

上海埠頭著埠汽船及輸出入貨物

年 度	著 埠		汽 船		輸入貨物噸數	輸出貨物噸數
	隻	噸	隻	噸		
大 正 六 年 度	二二六	五八六、五七二	二、四八五	二七六、四四六	一三五、九二六	一三五、九二六
同 七 年 度	二七四	五〇一、〇〇六	一、八三三	二六六、七七〇	一四九、〇八一	一四九、〇八一
同 八 年 度	二五六	五三四、〇五六	二、〇八六	一七九、九八六	九三、九三八	九三、九三八
同 九 年 度	一七二	六一五、九一〇	三、五八一	一四一、六五七	五二、九八五	五二、九八五
同 十 年 度	一六一	五五八、〇八三	三、四六六	一五七、三四〇	五五、六六八	五五、六六八
同 十 一 年 度	一九一	七二七、五七四	三、七五七	二二一、〇六一	四九、五三〇	四九、五三〇
同 十 二 年 度	一八五	八〇九、一四〇	四、三七四	一五四、八四五	八一、一六三	八一、一六三
同 十 三 年 度	一七九	八五五、七二九	四、七八一	一五一、九二〇	一一〇、八二五	一一〇、八二五
同 十 四 年 度	一七〇	八九二、一八	五、二四八	一七八、一九〇	七二、四八九	七二、四八九
昭 和 元 年 度	八二	四〇九、三三〇	四、九九一	九〇、六二〇	三五、〇一九	三五、〇一九

第三節 港灣營業收支並事業費

港灣營業收支 大正六年度以降昭和元年度に至る大連、上海、旅順、營口及安東の各港に於ける港灣營業收支を表示すれば左の如し

年 度	支 出					入 入				
	大連	上海	旅順	營口	安東	大連	上海	旅順	營口	安東
大正六年度	二八、三三〇、九三三	四、二二二、三三三	六、四一七、六六六	一、〇〇〇、〇〇〇	九、八五〇、〇〇〇	二〇、二二二、三三三	三、〇〇〇、〇〇〇	五、四一七、六六六	一、〇〇〇、〇〇〇	八、八五〇、〇〇〇
同 七 年 度	三〇、七九七、二八八	四、五七九、一〇〇	六、八八四、三三三	一、〇〇〇、〇〇〇	一〇、二二二、三三三	二二、二二二、三三三	三、〇〇〇、〇〇〇	五、八八四、三三三	一、〇〇〇、〇〇〇	一〇、二二二、三三三
同 八 年 度	三二、二六四、六四四	四、九四六、四〇〇	七、二五一、六六六	一、〇〇〇、〇〇〇	一一、一〇〇、〇〇〇	二四、二六四、六四四	三、〇〇〇、〇〇〇	六、二五一、六六六	一、〇〇〇、〇〇〇	一一、一〇〇、〇〇〇
同 九 年 度	三三、七三二、〇〇〇	五、三一三、〇〇〇	七、六一八、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一二、〇〇〇、〇〇〇	二六、七三二、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	六、六一八、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一二、〇〇〇、〇〇〇
同 十 年 度	三五、一九九、三三三	五、六八〇、三三三	八、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一三、〇〇〇、〇〇〇	二八、一九九、三三三	三、〇〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一三、〇〇〇、〇〇〇
同 十 一 年 度	三七、六六六、六六六	六、〇四七、六六六	八、三六六、六六六	一、〇〇〇、〇〇〇	一四、〇〇〇、〇〇〇	三〇、六六六、六六六	三、〇〇〇、〇〇〇	七、三六六、六六六	一、〇〇〇、〇〇〇	一四、〇〇〇、〇〇〇
同 十 二 年 度	三九、五三三、〇〇〇	六、四一五、〇〇〇	八、七三三、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一五、〇〇〇、〇〇〇	三二、五三三、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	八、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一五、〇〇〇、〇〇〇
同 十 三 年 度	四一、四〇〇、三三三	六、七八二、三三三	九、一〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一六、〇〇〇、〇〇〇	三四、四〇〇、三三三	三、〇〇〇、〇〇〇	八、三三三、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一六、〇〇〇、〇〇〇
同 十 四 年 度	四三、二六七、六六六	七、一四九、六六六	九、四六七、六六六	一、〇〇〇、〇〇〇	一七、〇〇〇、〇〇〇	三六、二六七、六六六	三、〇〇〇、〇〇〇	八、六六六、六六六	一、〇〇〇、〇〇〇	一七、〇〇〇、〇〇〇
昭和元年度	四五、一三五、〇〇〇	七、五一七、〇〇〇	九、八三五、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一八、〇〇〇、〇〇〇	三八、一三五、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	九、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一八、〇〇〇、〇〇〇
年 度 計	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇
合 計	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇

年 度	差 引					損 益				
	大連	上海	旅順	營口	安東	大連	上海	旅順	營口	安東
大正六年度	二、六七五、五五五	一、六六一、二二二	一、六六一、二二二	一、六六一、二二二	一、六六一、二二二	一、六六一、二二二	一、六六一、二二二	一、六六一、二二二	一、六六一、二二二	一、六六一、二二二
同 七 年 度	三、〇〇〇、〇〇〇	一、九〇〇、〇〇〇	一、九〇〇、〇〇〇	一、九〇〇、〇〇〇	一、九〇〇、〇〇〇	一、九〇〇、〇〇〇	一、九〇〇、〇〇〇	一、九〇〇、〇〇〇	一、九〇〇、〇〇〇	一、九〇〇、〇〇〇
同 八 年 度	三、三三三、三三三	二、二二二、二二二	二、二二二、二二二	二、二二二、二二二	二、二二二、二二二	二、二二二、二二二	二、二二二、二二二	二、二二二、二二二	二、二二二、二二二	二、二二二、二二二
同 九 年 度	三、六六六、六六六	二、五五五、五五五	二、五五五、五五五	二、五五五、五五五	二、五五五、五五五	二、五五五、五五五	二、五五五、五五五	二、五五五、五五五	二、五五五、五五五	二、五五五、五五五
同 十 年 度	四、〇〇〇、〇〇〇	二、八八八、八八八	二、八八八、八八八	二、八八八、八八八	二、八八八、八八八	二、八八八、八八八	二、八八八、八八八	二、八八八、八八八	二、八八八、八八八	二、八八八、八八八
同 十 一 年 度	四、三三三、三三三	三、二二二、二二二	三、二二二、二二二	三、二二二、二二二	三、二二二、二二二	三、二二二、二二二	三、二二二、二二二	三、二二二、二二二	三、二二二、二二二	三、二二二、二二二
同 十 二 年 度	四、六六六、六六六	三、五五五、五五五	三、五五五、五五五	三、五五五、五五五	三、五五五、五五五	三、五五五、五五五	三、五五五、五五五	三、五五五、五五五	三、五五五、五五五	三、五五五、五五五
同 十 三 年 度	五、〇〇〇、〇〇〇	三、八八八、八八八	三、八八八、八八八	三、八八八、八八八	三、八八八、八八八	三、八八八、八八八	三、八八八、八八八	三、八八八、八八八	三、八八八、八八八	三、八八八、八八八
同 十 四 年 度	五、三三三、三三三	四、二二二、二二二	四、二二二、二二二	四、二二二、二二二	四、二二二、二二二	四、二二二、二二二	四、二二二、二二二	四、二二二、二二二	四、二二二、二二二	四、二二二、二二二
昭和元年度	五、六六六、六六六	四、五五五、五五五	四、五五五、五五五	四、五五五、五五五	四、五五五、五五五	四、五五五、五五五	四、五五五、五五五	四、五五五、五五五	四、五五五、五五五	四、五五五、五五五
年 度 計	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇
合 計	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇

備考 昭和元年度上海營業收入ハ業務委託前ノモノナリ(自四月一日至八月末日)
事業費 昭和二年三月末現在事業費箇所別を擧ぐれば左の如し

科 目	港									
	埠					港				
	燈臺	築物	防波	道路	下水	機器	電線	備用	費	計
大連	一〇、九四一、七四七・一六	一、三九五、一八〇・四四	五〇、六一三、二二五・一	六〇、三六七、七二五・九	九一、七九六、四八六	四、七三〇、一四九・九	四、三三〇、一四九・九	四、三三〇、一四九・九	四、三三〇、一四九・九	一、八二〇、八七五・三
旅順	一六、八〇二、四九九	一〇、三九八、八七七	一〇、三九八、八七七	一〇、三九八、八七七	一〇、三九八、八七七	一〇、三九八、八七七	一〇、三九八、八七七	一〇、三九八、八七七	一〇、三九八、八七七	二、五二五、九八一
上海	三、〇〇一、〇一七	三、〇〇一、〇一七	三、〇〇一、〇一七	三、〇〇一、〇一七	三、〇〇一、〇一七	三、〇〇一、〇一七	三、〇〇一、〇一七	三、〇〇一、〇一七	三、〇〇一、〇一七	一、三二六、五九九
計	一〇、九四一、七四七・一六	一、三九五、一八〇・四四	五〇、六一三、二二五・一	六〇、三六七、七二五・九	九一、七九六、四八六	四、七三〇、一四九・九	四、三三〇、一四九・九	四、三三〇、一四九・九	四、三三〇、一四九・九	三、〇、一八五、四七〇・三五

總 計	船					埠				
	內港			外港		埠			埠	
	小汽船	波深船	起重船	汽船	通船	倉庫	築物	防波	道路	下水
五二、九八七、八四三・四六	一、三三〇、〇〇〇・〇〇	一、三三〇、〇〇〇・〇〇	一、三三〇、〇〇〇・〇〇	一、三三〇、〇〇〇・〇〇	一、三三〇、〇〇〇・〇〇	一、三三〇、〇〇〇・〇〇	一、三三〇、〇〇〇・〇〇	一、三三〇、〇〇〇・〇〇	一、三三〇、〇〇〇・〇〇	一、三三〇、〇〇〇・〇〇
四、二二八、四四〇・七〇	三、三〇六、九八七・六八	一、七七一、七六・三八	五、二五〇、二四	一、一九二、一九二	三、三三三、七〇〇	六、八二、九九二・一一	一、三三〇、〇〇〇・〇〇	一、三三〇、〇〇〇・〇〇	一、三三〇、〇〇〇・〇〇	一、三三〇、〇〇〇・〇〇
一、六六六、七四九・九	一、六六六、七四九・九	一、六六六、七四九・九	一、六六六、七四九・九	一、六六六、七四九・九	一、六六六、七四九・九	一、六六六、七四九・九	一、六六六、七四九・九	一、六六六、七四九・九	一、六六六、七四九・九	一、六六六、七四九・九
八、七三三、三三三・三五	八、七三三、三三三・三五	八、七三三、三三三・三五	八、七三三、三三三・三五	八、七三三、三三三・三五	八、七三三、三三三・三五	八、七三三、三三三・三五	八、七三三、三三三・三五	八、七三三、三三三・三五	八、七三三、三三三・三五	八、七三三、三三三・三五
九、三九一、〇四七・一	九、三九一、〇四七・一	九、三九一、〇四七・一	九、三九一、〇四七・一	九、三九一、〇四七・一	九、三九一、〇四七・一	九、三九一、〇四七・一	九、三九一、〇四七・一	九、三九一、〇四七・一	九、三九一、〇四七・一	九、三九一、〇四七・一

科目	鐵道									
	陸	海	附	道	鐵	港	埠	頭	費	計
口	陸	海	附	道	鐵	港	埠	頭	費	計
	陸	海	附	道	鐵	港	埠	頭	費	計
東	陸	海	附	道	鐵	港	埠	頭	費	計
	陸	海	附	道	鐵	港	埠	頭	費	計
計	陸	海	附	道	鐵	港	埠	頭	費	計
	陸	海	附	道	鐵	港	埠	頭	費	計

合	計	一、六四三、八四九・五七	七七二、七八四・四二	二、四一六、六三三・九九
---	---	--------------	------------	--------------

從 事 員 會社は事業の性質上鐵道關係に従事する者常に全社員の過半を占む即ち現在三萬五千の社員中鐵道部所屬員は實に一萬八千人に及ぶ左に大正六年度以降昭和元年度に至る各年度末現在の鐵道部從事員數を簡所別に示すべし次に又往々にして此種の從事員に發生し易き所謂勞働爭議に類する紛擾の如きを見る事あるも由來會社は特殊の使命を有し其の組織内容に於ても又幾分趣を異にするものがあるが故に會社と從事員との關係は一般此種關係のものと同じに論すべきものに非ざるなりされば是等の事に關し其大様を附記し置くこととせり

鐵道業關係從事員

第二編 會社の事業	本部各課	所 別	年 度	從 事 員											
				六年度	七年度	八年度	九年度	十年度	十一年度	十二年度	十三年度	十四年度	昭和元年度		
計	本線營業部	路業部	課	六年度	六五	七三	二六	二七	一七	二〇	三九	三九	四二	四二	四二
				七年度	七三	八〇	二六	二七	一七	二〇	三九	三九	四二	四二	四二
				八年度	七三	八〇	二六	二七	一七	二〇	三九	三九	四二	四二	四二
				九年度	七三	八〇	二六	二七	一七	二〇	三九	三九	四二	四二	四二
				十年度	七三	八〇	二六	二七	一七	二〇	三九	三九	四二	四二	四二
				十一年度	七三	八〇	二六	二七	一七	二〇	三九	三九	四二	四二	四二
				十二年度	七三	八〇	二六	二七	一七	二〇	三九	三九	四二	四二	四二
				十三年度	七三	八〇	二六	二七	一七	二〇	三九	三九	四二	四二	四二
				十四年度	七三	八〇	二六	二七	一七	二〇	三九	三九	四二	四二	四二
				昭和元年度	七三	八〇	二六	二七	一七	二〇	三九	三九	四二	四二	四二

第二編 會社の事業

計	車輛關係		本部各課														
	檢車區	機車區	計	本部		線路課		營業課		機械課		計畫課		保險課		運輸課	
				中國人	日本人	中國人	日本人	中國人	日本人	中國人	日本人	中國人	日本人	中國人	日本人	中國人	日本人
一八四〇	九四三		一八四〇	九四三	四	二四		三	七			五	三	四	三	三	
一二二四	一二二六		一二二四	一二二六	四	八		二	二			四	三	四	〇	〇	
一三三八	一三三七		一三三八	一三三七	六	五		一	一			九	三				
一〇五五	九〇〇		一〇五五	九〇〇	五	六		一	二			二	二			五	
一〇九四	九三三		一〇九四	九三三	三	八		三	二			〇	〇			九	
九〇九	三〇〇	二二	九〇九	三〇〇	二	八		三	三			二	二			八	
一三三三	一〇六	二二	一三三三	一〇六	三	四		一	一			一	〇	二	二	〇	
一三三三	一〇六	二二	一三三三	一〇六	三	四		一	一			一	〇	二	二	〇	
一三五五	一三六	二二	一三五五	一三六	六	六		二	二			〇	二	三	三	三	
一三六六	一三七	二二	一三六六	一三七	五	〇		一	一			一	二	三	三	三	

五三五

計	貨物課	旅客課	經理課	庶務課	其他	職員及委託											
						其他	埠頭關係	工場	各列	保線關係	工務	保險	檢車	車輛關係	車		
																運輸及鐵道事務所	築港事務所
三三七					六	二五	六	三三	二〇	三三	一四〇						八二
三三七					六	二五	六	三三	二〇	三三	一四〇						八二
五八五					六	六〇	七	六	二五	二七	一九三						一九三
五三四					二	七三	一	六	二四	二四	一四〇						一四〇
五三四					二	七三	一	六	二四	二四	一四〇						一四〇
五二六					二	六	一	六	二四	二四	一三二						一三二
五二六					二	六	一	六	二四	二四	一三二						一三二
五〇九					二	五	一	六	二四	二四	一三二						一三二
五〇九					二	五	一	六	二四	二四	一三二						一三二
四九二					二	四	一	六	二四	二四	一三二						一三二
四九二					二	四	一	六	二四	二四	一三二						一三二
四六五					二	三	一	六	二四	二四	一三二						一三二
四六五					二	三	一	六	二四	二四	一三二						一三二

第三章 港灣及埠頭

五三四

が如き態度を執る者少きに基因するものと認め得べきなり而して日支兩國人混交して共に同一の業務に従事すと雖孰れも各自の立場と使命に理解を有し互に反感を懐き或は争議のために相互に加擔し又は相通するが如きことも一、二の例を除きては殆ど類例あらざりしなり
又中國人現業員を觀るに多くは山東地方の出身にして其共通せる從順克己の特性は徒らに争議紛擾を惹起することを好まず多くは勤勉力行只管終生の計を立てんとするの氣風あり而してこれ上述の如く一面に於て會社の待遇、施設が彼等に對し不満を懐かしめざるの結果なりとすべし

然れども會社は現在の待遇施設を以て決して満足するものにあらず時代の趨勢に伴ひ克く彼我の間に協調を保ち以て社業の遂行を期すべく更に深く勞資の問題に留意して調査研究を進めつゝあり

今會社が創業以來現業従事員に依りて惹起されたる所謂争議に類するものを考察するに明治四十年創業以來約十年間は全く此種の事例なく大正五年に至り始めて沙河河口工場支那人職工によりて起されたる賃銀増額の要求を見たり而して其の後に於て起りたる以下列記する事實の如きも何れも嚴正の意味に於て所謂労働争議の種類とは全く其の趣を異にするものなり左に大正五年度以降の大小事件を記述すべし

一 大正五年十二月四日會社沙河河口工場支那人職工四百八十名は一、二主謀者の脅迫、煽動に因り銀價騰貴に對し一日一人五拾錢以上壹圓以内の賃銀に多少値上すべきことを要求し直に罷業の擧に出でたり
沙河河口警察官派出所は工場よりの報に接し重なる職工十一名を召喚し且主謀者三名を留置し嚴重加論したる結果反省して漸次罷業人員減少を來し同月六日より全部就業するに至れり

一 大正六年八月二十八日公主嶺驛支那人従事員二十九名、同驛助役より同僚の一名毆打されたるを憤慨し罷業したるも同日圓滿解決せり
一 大正七年一月二十五日沙河河口工場職工日本人八百六十名、支那人千二百九十二名が其の數日前に勃發したる大連川崎造船所職工の同盟罷業の影響を受けたると不良高級社員の煽動等に因り會社に對し左記諸項の要求をなせり

- 1 日給四割増のこと
- 2 残業歩合手當一時間一分一厘とすること
- 3 規定時午後五時經過後退場する時は早退とせざること、公休日二日を與ふること

4 クレーン運轉人、動力従事員及同様の職業に従事するものに相當加給すること

5 危険作業に従事する者に加給手當を與ふること

右は全然罷業の態度を執らずして怠業の状態にありしが旋盤工七十名は交渉の爲め工場長に面接を要求し若し要求を容れざるときは罷業すべしと示威せり

然れども主謀者六名は警官に檢束せられ一方會社に於て職工の慰撫に努めたる結果翌二月二日圓滿解決せり

一 大正七年六月十二日遼陽驛支那人従事員十二名増員を口實に賃金値上を慫慂し罷業の擧に出でたるも會社は之を拒絶したるが翌十三日には全部復業せり

一 大正七年九月十一日遼陽保線係支那人従事員二百名、會社の増給發表遲延を誤解し増給を要求して罷業したるが増給發表を見て翌十二日より就業せり

一 大正七年九月二十四日大連驛従事員日本人八名、支那人五十名昇給額豫想に反したるに依り主謀者日本人數名の不良分子の煽動に依り増給を要求せるも會社の諭示により即日就業せり

一 大正七年十月七日沙河河口工場支那人職工等二千六十二名不良職工の煽動に依り九月二十八日物價騰貴を理由とし賃金増給の嘆願書を提出したるに會社は翌二十九日各職場主任を通じ最近一般増給の外手當を増加したるに更に増給を要求するの不當にして之に應じ難き旨を諭示せしめたるに十月七日彼等は遂に罷業せり茲に於て警察署は工場の報告により主謀者數名を留置し殘餘の職工に戒告を加へたるに何れも反省して同月十三日より就業せり

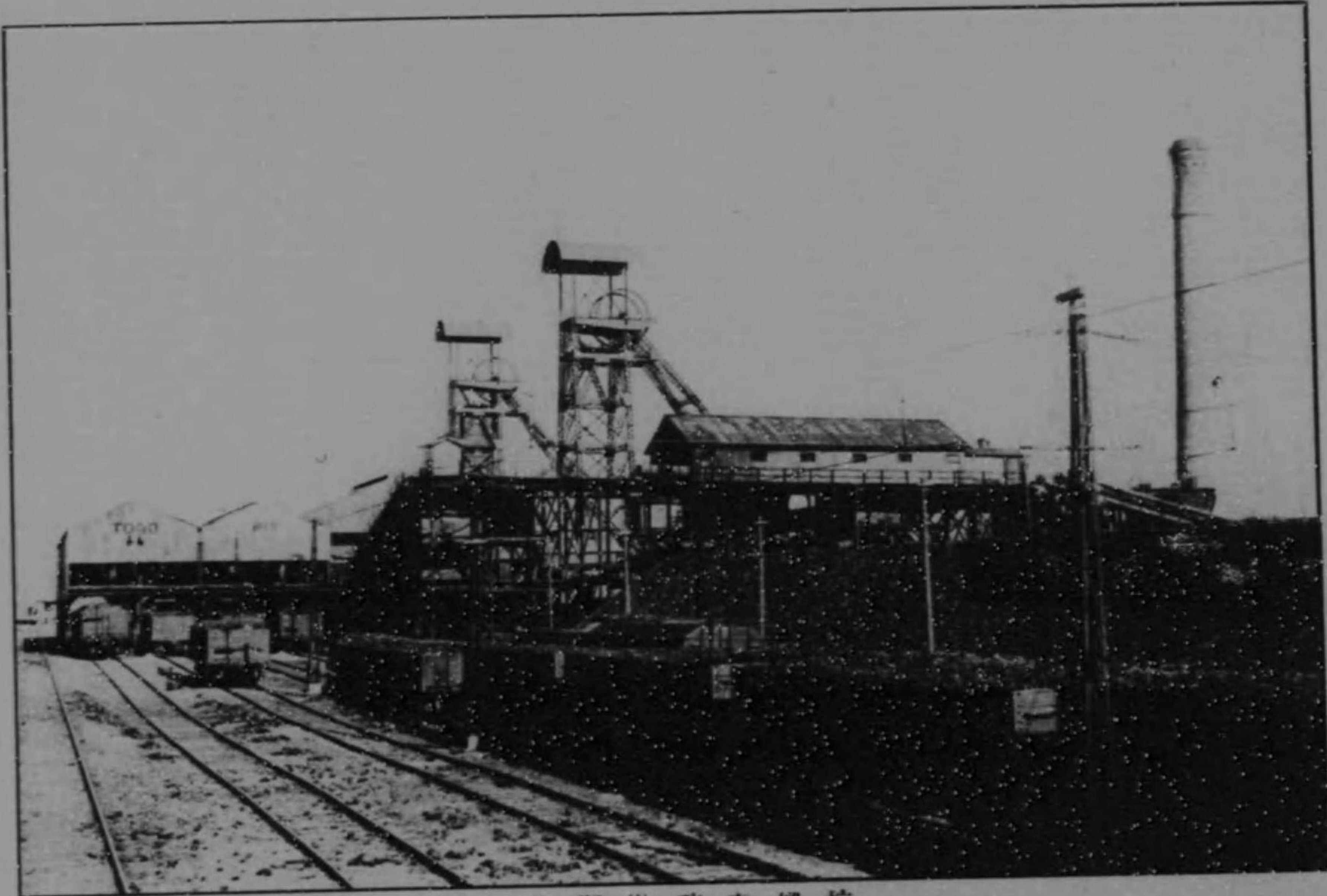
一 大正八年七月二十八日沙河河口工場木工科日本人職工四百名は他科職工に比し賃銀稍々低額なるより之が増給と八時間従業を要求して罷業せるが會社は幾分の賃金値上に應じ翌八月一日圓滿解決せり

一 大正八年十月二十三日沙河河口工場貨車職場日本人職工百七十名は大連車輛係より檢車手五十名推薦方申込ありしを聞き同職場より十七名の希望者ありたり然るに同職場主任は内十名を推薦し餘は希望者外の貨車工同志會長外會員三名を採用せしむる取計ひをなしたるの處置を耳にしたる同職工側は之を不都合なりとし全部希望者のみを推薦すべしと要求せるも職場主任之を聽き容れざりし結果遂に罷業の擧

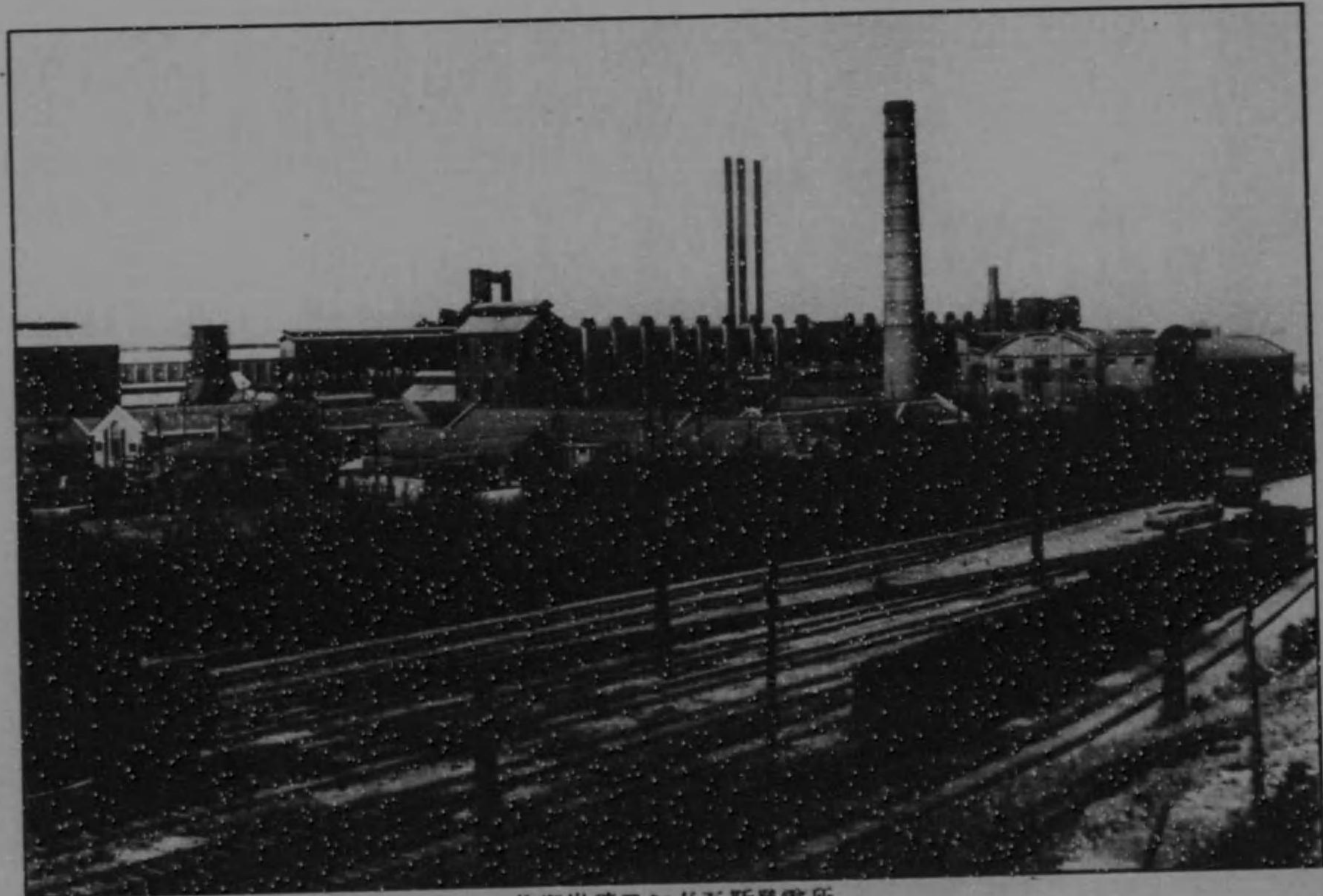
に出でたり會社は主謀者五名を解備し他を説諭して同月二十六日より復業せしめたり
一 大正九年二月五日沙河口工場客車職場日本人職工二百八名職場主任の更迭及職業者手當を要求し遂に罷業せるが會社側は同主任及職工代表を辭職せしめ一方職工側に説諭を加へ同月十五日より復業せしめたり

一 大正九年五月一日沙河口工場職工日本人千三百六十五名、支那人千二百名物價騰貴の爲賃金値上及諸施設の改善を要求し罷業せるが其後會社及職工側との間に交渉の結果會社側は職工の要求を全部承諾して不良分子を淘汰し翌六月十日に至り解決せり
一 大正九年八月一日長春機關庫支那人從事員二十五名は賃金値上を要求せるも會社は不當と認め翌二日は等の者を全部解備せり

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な縦書きの文章が続く）



坑郷東礦炭順撫



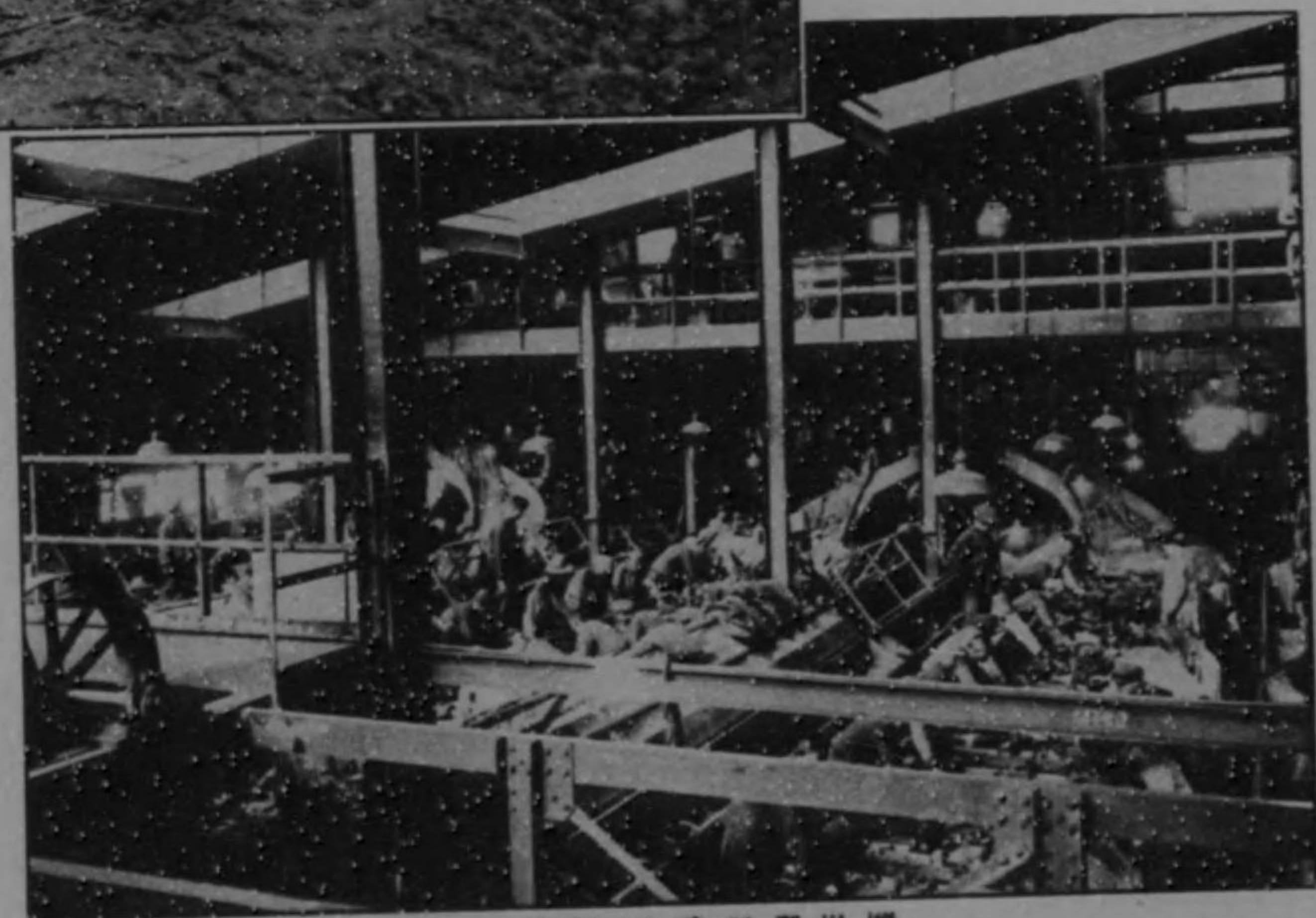
所電瓦斯頓東礦炭順撫



撫順炭礦エキスカベーター



撫順炭礦電氣シヨベル



撫順炭礦新選炭機

第四章 鑛山 業

一 撫順炭礦

第一節 採 炭

一 新坑の開掘

大正六、七年度は歐洲戰亂の影響による工業界の異常なる勃興に刺戟せられ石炭需要の増加日に甚しき盛況に在りしを以て六年度に於て龍鳳坑を開坑し七年度には新屯坑の開坑を促すに至れり

古城子第一露天掘は採掘に伴ひ深厚なる上盤岩の剝離を必要とし引續き作業を進せしむる爲には設備之に伴はず且採算上不利益なるを認めて之を中止し大正六年十月千金寨西方地域に於て開發に著手せる第二露天掘に全力を集中することとなり第二露天掘は撫順大露天掘計畫の基礎坑として爾來著しき進展を示せり

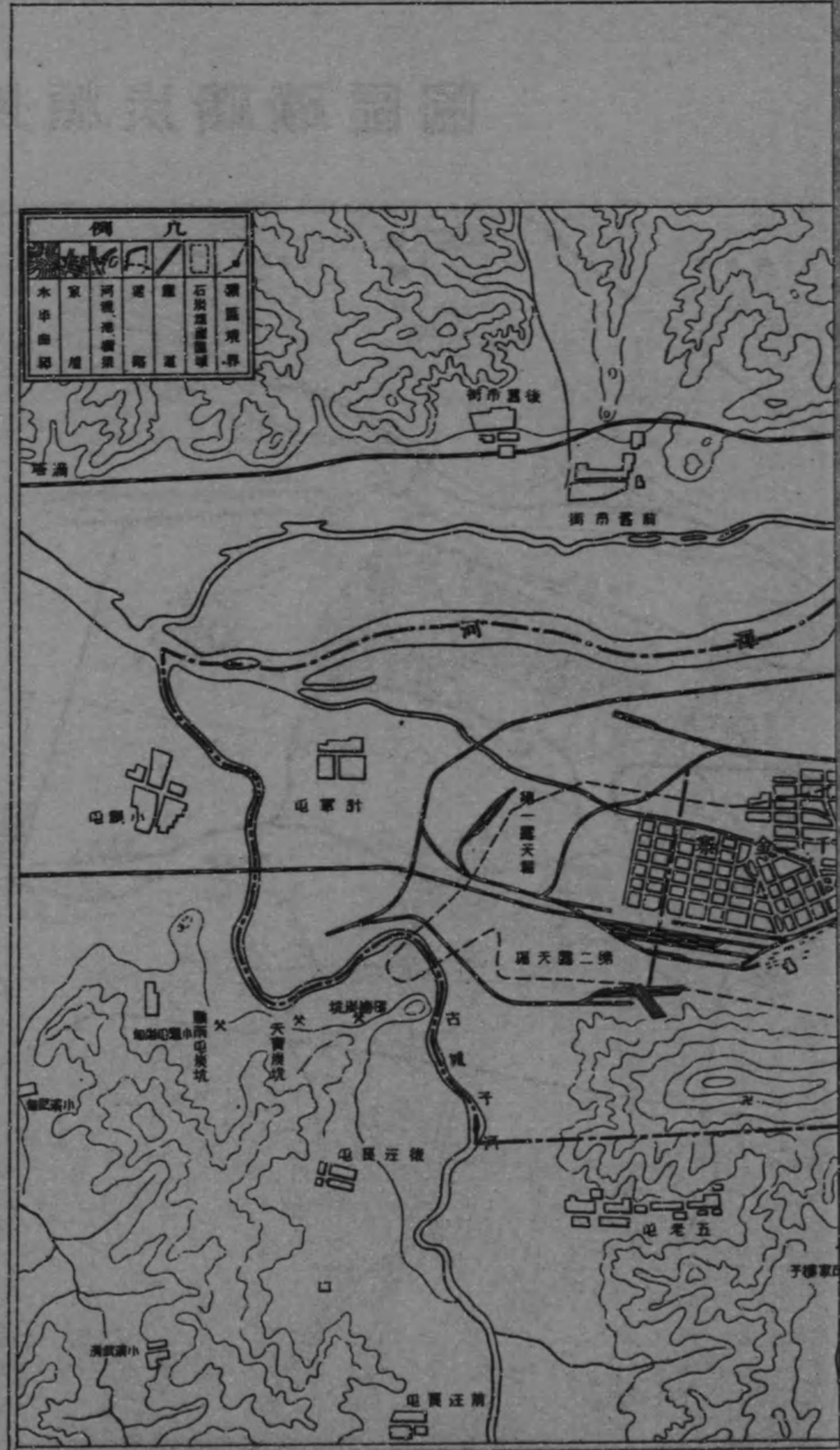
大正十三年初頭老虎臺探炭所管轄下に老虎臺露天掘の開發を計畫し同年四月割土作業を開始し同十四年二月之を鑛務課の所管に移し東露天掘と命名せるが其後作業工程著しく進展し十五年四月遂に獨立經營に移り東ヶ岡探炭所と改稱せり

搭連炭坑は龍鳳探炭所と炭層連接し其採炭區域の限界は從來屢々問題となりしが大正九年十二月會社が該炭坑の採掘權を有する東洋炭坑株式會社の權利を買収したる結果同十三年九月以降は之を龍鳳探炭所の所管とし施設の改善並出炭に努めつゝあり

二 試 錐

鑛山の開坑に當りて試錐は最も重要な作業の一にして最少の經費と努力とを以て下層の地質を知り礦床、炭層の存在狀態其他一切の性質を略明瞭ならしむる爲には一に本作業に依らざる可らず今大正六年度以降に於ける當礦試錐作業業績に關し其概況を表示すれば左の如し

年	鐘	種	別	箇	數	造鐘總延長(米)	箇	所
大正六年	ハ	ロ	ブ	式	三六	二、七四二	古城子、龍鳳、搭連	
同 七年	ハ	ロ	ブ	式	五〇七	三、六五三	古城子、新屯、龍鳳	
同 八年	ハ	ロ	ブ	式	一〇四三	四、五五五	古城子、新屯、龍鳳	
同 九年	ハ	ロ	ブ	式	八二	四、七八四	新屯、搭連、古城子、龍鳳	
同 十年	ハ	ロ	ブ	式	一七三	二、五〇五	新屯、搭連、古城子、龍鳳	
同 十一年	ハ	ロ	ブ	式	九一	五、五八一	古城子、千金寨、塔灣、新屯、小風屯、第二露天棚	
同 十二年	ハ	ロ	ブ	式	一八一	五、六四〇	千金寨、古城子、第二露天棚、萬達屋、老虎寨、塔灣、新屯、小風屯、龍鳳	
同 十三年	ハ	ロ	ブ	式	二六	三、七四二	萬達屋、老虎寨、龍鳳、千金寨、大山、東鄉	
同 十四年	ハ	ロ	ブ	式	一〇	二、〇〇六	第二露天棚、千金寨、老虎寨、萬達屋、龍鳳	
昭和元年	ハ	ロ	ブ	式	四	一、七四	第二露天棚	



撫順炭礦區圖



撫順炭礦區圖



三 採掘及充填

當礦に於て實施せる露天掘及填砂採掘法に就きては既に會社十年史に於て之を詳述せり更に大正十一年度以降當礦の採炭施設上に一大變革を興へたるは龍鳳坑及老虎臺坑に於ける炭層傾斜向長壁拂法の創始なり當礦の如き厚層の採炭は坑内を水平掘となすよりも成る可く廣き範圍に於て傾斜長壁拂法を施行する時は採掘炭を水力を利用して運搬することを得従つて炭塵防止手段として最適の方法なるのみならず出炭の増加、經費の節約等有利なる方法なること確認せられたるを以て全坑に互り其普及を圖りつゝあり傾斜向長壁拂法の創設並其詳細は龍鳳採炭所の項に譲り茲には充填用土砂の採取設備及其方法に就き概述すべし

採掘砂充填に要する土砂の採取は最初楊柏堡川より手掘せしも規模甚だ大ならず其後大山、東郷の二大注砂場等其他逐年完成せらるゝに及び土砂の需要も亦増大せるを以て大正四年六月採砂係を創設し該事業の重責を充たさしめんことを期せり
今大正六年度以降昭和元年度に至る採砂受拂高を表示すれば左の如し

採砂受拂高 (立方メートル以下四捨五人)

年 度 別	前年度繰越高(立方メートル)	本年度受人高(立方メートル)	本年度拂出高(立方メートル)	期末貯藏高(立方メートル)
大 正 六 年 度	三、七九、五七二	一、九六、九四七	一、七五、〇一九	五、九八、九二〇
同 七 年 度	五、九九、九二〇	一、七〇、四九三	二、一〇、六一七	二、三三、一八六
同 八 年 度	二、六三、一八六	二、一八、七〇三	二、四九、九五四	一、〇〇、三三五
同 九 年 度	一、〇〇、三三五	二、三九、一九一	一、四一、〇〇〇	七、三一、四六六
同 十 年 度	七、三一、四六六	二、三八、七八八	二、三三、三三三	一、〇八、七三三
同 十 一 年 度	一、〇八、七三三	二、二八、五〇四	二、四三、六六六	五、七〇、六〇〇
同 十 二 年 度	五、七〇、六〇〇	二、二八、九八四	二、二〇、三二八	三、九六、九六六
同 十 三 年 度	三、六六、九九六	二、七〇、三九六	二、六九、〇八六	一、〇六、三三六

第二編 會社の事業

大正十四年度	106,333米	15,590,010	1,266,695	15,796,705
昭和元年	12,110米	1,675,956	1,267,913	15,796,705

採砂場としては楊柏壘川、黎家溝、塔灣、計軍屯、葛布街、劉山、楊山、古城子、新屯等の各所を擧げ得べきも現在採砂しつゝある採砂場は塔灣（川砂）劉山、楊山（以上山砂）の三箇所にして川砂は主として萬達屋以東の注砂坑に向け山砂は老虎臺以西の需要に充つこととせり又採砂代用としてモンド瓦斯焚殺は一日出來高約四十五立坪にして之が處分法として大正九年十二月より使用を開始せるものと古城子露天掘初期の剝土は試用の結果充填用に不適當なりしも近來該剝土の充填に用ふるに足るものを生ずるに至りしを以て必要に應じて之を使用せり葛布街採砂場は河中三角洲にして洪水の被害多く其復舊作業は常に多大の經費を要するを以て同十年採砂を中止し之を計軍屯に併合せり然るに計軍屯も亦露天掘の擴張に伴ひ大官屯驛新設の爲輸送の關係上同十五年以後は採砂を中止せり新屯採砂場は砂質不良にして作業僅に二箇年にして廢止し黎家溝は楊山に移り楊柏壘川老虎臺等は砂量貧弱にして早く既に採盡せり目今計畫を進めつゝあるオイルシエール工業の起業計畫に依れば粉碎せられたるシエール及採油の殘滓は昭和四年度末に於て一日六千噸に達すべきを以て本工業の開始以後は充填材料の供給に相當緩和を得べき見込なり採取したる土砂運搬設備は各採砂所より注砂坑迄専用の運砂廣軌鐵道を敷設して電氣機關車を用ひ貨車は三十噸積にして三立坪の積載量を有す尙採砂地點變更の爲送電設備の及ばざる場合には線路のみを敷設し蒸氣機關車を用ふることとせり

注砂場は成る可く露頭際に置くを原則とし以て運砂範圍の廣からんことを期せり
採砂の可能期節は概ね四月中旬より十一月中旬迄の七箇月にして其の間霽解け霖雨等季節上の障害あり又毎季作業前の準備作業後の跡始末等多大の日子を費し實際の就業僅かに五箇月にも充たざることあり而して採砂したる土砂は夏季に於ては直ちに需要坑に向つて運搬し得べきも冬季の需要に對しては豫め結氷前に之を採取貯藏し必要に應じて之を配給するが如き二重の手續を要するにより近年爆發薬を使用し冬季作業を續行し四季を通じて採行することとせり

川砂採砂には一部會社直營若くは請負により手掘又は手積を行へども主として機械力を用ふ現在採砂作業に使用せる機械種類左の如し

採砂機械	臺數	用途	デイツパーノ大サ
ビイサイラス型スチームシヨベル	五	山砂採取、貯砂積込用	一・九立方米三臺 ○・七二立方米 二臺
マリオン型レボルピングスチームシヨベル	六	土工用	○・四八立方米
ビイサイラス型ドラッグラインエキスカベーター	一	川砂貯砂用	二・七立方米
アトランチック型スチームシヨベル	二	川砂採取用	一・九立方米
マリオン型ドラッグラインエキスカベーター	一	川砂採取用	二・七立方米
リユーベック型エキスカベーター	一	積込及土工用	能力一時間一九八立方米

四 諸機械設備

選炭機 選炭機の設置せられざりし以前に於ては棧橋上に架設せる選炭萬斛或は手萬斛を使用せしが明治四十三年七月大山坑に於て始めて選炭機（ベルトコンベア）一臺を設置し爾來各坑に及ぼし大正十五年八月古城子露天掘選炭機の建設を見るに至れり最近古城子露天掘に設置したる大選炭機の装置及選炭順序の概要左の如し
露天掘は從來坑内に於て手選りしたるが大露天掘計畫に伴ふ出炭増加に順應するため大選炭機設置の必要に迫られ大正十四年獨逸メグイン會社製選炭機を購入し同年四月十一日より機械建設に着手し翌十五年八月二日落成し十月二十三日より選炭を開始するに至れり其規模概要左の如し

- 一 總電力 量 一、四一六キロワット
- 一 所要水量 量 二、三〇〇立方米（一時間）
- 一 建設面積 三、九八四平方米
- 一 建設家鐵骨重量 一、五〇〇噸

- 一 諸機械重量
- 一 煙房放熱面積

一、三〇〇噸
一、一〇〇平方米

本選炭場は實動時間十六時間に於て一萬六千噸を處理し二〇%の硬を取り捨て七の硬炭及七%の良炭を回収せんとする計畫にて容量の大なることは世界に於ても類例稀なる大規模のものなり原炭選炭順序左の如し

坑内にて採掘せられたる石炭はエンドレス運炭機によりて選炭場に運ばれチツプラーによりて翻覆せられエプロンコンベヤー及クラツシャヤを経て二百耗以下の石炭となりてベルトコンベヤーに移されローコールバンカーに入れられ次に其下部に在るフイーダに依りてローラアスクリーン上に送らる

篩分けられたる六〇耗以上のものは乾式選炭法(ハンドピツチング)によりて精選し六〇耗以下の小なるものは濕式選炭法(ウォッシング)にて選炭せるものにして後者は種々の様式あるも特にレオラバー式水洗法を採用せり

次に龍鳳採炭所に於て實施せられつゝある坑内粉炭選別法に就て述べん

長壁拂法に依り採掘せられたる石炭は水流に依つて輸送せられ塊炭ポケットに入らんとする處に設けられたるメツシュ又はバアスクリーンを通過す此處にて塊炭と粉及土砂の混合物を分離させ塊炭ポケットと粉炭ポケットとの間に選砂坑道の裝置を設け粉と砂及微粉と粘土水とを分ちて夫々のポケットに入れ砂及粉硬の大部分を取除くものなり

メツシュ上にて分離せられたる砂及粉炭は水量調節を行ふ可き小なるバツク或は箱に入り夫れより三角種に移され徐々に流下せしむるときは種中に於て其含有物の比重に依り各異りたる累層を形成するが故に三角種の末端に選砂のため裝置せらるゝ一種の漏斗により細小なる砂及硬の一部を除去し更に粉炭及水を流送す再三之を繰返す事によりて選砂器にて採られたる砂及硬は砂ポケットに入り粉炭のみは稍完全に選別せられ一分目メツシュ上にて水に含まれたる微粉炭に篩別され粉炭ポケットに入り下方取附のダンパーにより炭車に積載搬出せらるるものなり次に一方メツシュを水と共に溜りたる微粉炭は再び前記選砂方法を以て微細なる砂及硬を選別排除し微粉炭の沈澱を待ち水を排除して炭車に積込み搬出せらるゝものなり此微粉炭沈澱池は二箇所を有し一方送水中は他方に於て積込を行ふものとす

上述操作を経たる比較的清浄なる餘水は排水坑道により淨水池に入り唧筒にて排出され坑外貯水池に至るものなり尙坑内に於て三角種を

用ひ粉炭を洗別し砂及硬を除去しつゝあるも尙其除却物中には五〇—六〇%の石炭を含むを以て之を坑外に於て水洗しその中に含まるゝ石炭を回収し且レオラバー其ものを研究する目的を以て大正十四年春季この水選法を開始したるが猶多少の改良を要するは勿論なり

各採炭所別選炭成績

(昭和二年三月分)

採炭所別	選炭機種別	臺數	選炭				
			切込	塊	粉	硬炭其他	計
大山採炭所	粉炭コンベヤー	一					
	スクリーンコンベヤー	三	三六、六五九	三八、六四六	五八、八二八	四、七五六	一三八、八八九
	ナットコールコンベヤー ピツキングコンベヤー ローディングコンベヤー	一 三 三					
東郷採炭所	スクリーンコンベヤー	一					
	ピツキングコンベヤー	一					
	ローディングコンベヤー	一	三八、八七七	二八、七五八	五一、〇九四	一〇、九七二	一一九、七〇一
	硬炭コンベヤー	一					
	粉炭コンベヤー ベルトコンベヤー	一 一					
老虎臺採炭所	マーカスコンベヤー	四	二一、〇一〇	三九、六一三	四七、一四三	七、一九九	一一四、九六五
龍鳳採炭所	マーカスコンベヤー	四	一、四三四	二六、二一八	四五、八九四	九、二四二	八二、七八八

安全燈 坑内照明用として従前は支那カンテラを使用せしも明治四十年五月以來之を廢し坑内の燈火は總て安全燈を用ふることに改め嚴に裸火を戒め坑内にて開燈する者には罰金を課する規定なり最初採用せし安全燈はクランニー式及テビー式にして前者は一般採炭其

他作業上に後者は監督及瓦斯検定に用ひたるがクランニー式は開燈容易なる爲禁を犯す者續出し保安上完全を期し難きを以て逐次ザイベル式に改むることとし大正八年四月以來本多製ザ式安全燈を採用しザイベル式と併用シクランニー式及デビー式は全廢せられたり照明用としての電燈は通氣良好なる主要運搬坑、人道坑、各仰筒座、捲揚場及坑内詰所等に百ボルトタンダステン二十五燭光のものを常設せるも大體に於て電燈は事故發生を恐れ最小限度を保つに止むるものとす最近絶對的安全率を有する安全燈として電氣安全燈の使用を開始し油安全燈との利害に就き研究中なるが成績佳良にして漸次其普及を見んとす

安全燈使用箇數

(昭和元年度末現在)

坑別	電氣安全燈	本多製ザ式	本多製ザ式點火燈	其他	計
大山坑	四〇	七〇二二	—	一九	七〇七一
東山坑	—	八二八	—	一五	二、九四九
楊柳坑	—	三、三〇三	七〇二	九	四、〇一四
老松坑	—	二、六三二	—	七	二、六三九
萬達坑	—	一、九九九	—	五	一、〇〇四
新屯坑	—	二、一三三	—	二	二、一三四
龍鳳坑	—	一、四一六	一六九	四	一、五八九
搭連坑	—	六九一	五一	四	七四六
煙臺坑	—	一〇六	—	—	七四一
計	七五四	二二、二一九	九二二	六五	二二、九八七

動力機 發電所の設立以前は各坑共捲揚機、排水機等の動力には總て蒸氣力を使用せる爲夫々適當なる汽罐場設備をなしコルニツシニ型水管式ロコモチー型或はヴァーチカル型等の蒸氣汽罐を据え露人經營時代の遺物たる舊蒸氣汽罐も亦當時使用せられたり蒸氣汽罐は動力の外に冬季は社宅工場の暖房用通氣に使用せられ又通氣坑注砂坑の保温の爲めにも送電をなすものとす其後汽罐に田熊式ボイラー

を採用せるも田熊式は採炭所の炭質に依り不適當なる箇所ありて此等はランカツシャーボイラーに漸次變更せられたり夏季は送電箇所減じて汽罐の使用閑散なる爲此間交互に各汽罐の洗滌及補修を行ふものとす
 發電設備の完成後は蒸氣力の使用は殆ど暖房用に限られ時に捲揚機、扇風機等の動力に使用せらるゝものあるは電氣動力に故障ある場合に限らるゝものとす
 電氣動力の使用は明治四十一年十一月大山坑に發電所の設立ありたる以來にして大山坑は直ちに電氣動力設備に變更し各捲揚機の運轉に供せり第二發電所設立以後は同所より送電を受け各坑亦夫々坑内外の電線及配電所を設置せり第二發電所より直送せる一萬一千ボルトの特高電氣動力は之を各坑變電所に於て二千二百ボルトに下降せしめ各作業箇所配電するものにして坑内外捲揚機及排水仰筒の運轉は多く高壓を用ひ低壓のもの少なし

電力供給成績 (單位KWH)

(昭和元年度末現在)

箇所用途	充填機械	運炭機械	選炭機械	扇風機械	排水機械	其他	計
古城子採炭所	—	四九七、五〇〇	六四四、〇〇〇	—	一八七、一八九	七八七、一〇	一、四〇七、三九九
東ヶ岡採炭所	—	一一、五四五	九〇一〇	—	—	三三、一三五	五四、八〇〇
大山南坑	—	八一、六六七	—	—	八八〇、〇二六	五三九、五四二	一、五六一、五〇五
大山本坑	—	一三、一八九五	—	—	四六二、三五四	一四四、一一一	八〇、一三四
東山坑	—	七、七二二	—	—	三三、〇〇〇	一一、一六三	四六、九七七
楊柳坑	—	一五、一四九〇	—	—	一五六、七四七	九八八	四〇、一三八三
老松坑	—	四、八九一六	—	—	四四九、五〇〇	一一、八八五	七三、一九九六
萬達坑	—	二〇、五四八	—	—	二八、一〇七七	—	五三、六八六
新屯坑	—	一五、一五六八	—	—	五三、一八九七	—	七八、一七九
龍鳳坑	—	一〇、七三〇	—	—	四三、三八四二	—	六七、六一四六
搭連坑	—	一六、九五	—	—	七九、九八〇	—	一三九、〇三八
計	—	二九、〇〇八	—	—	七、九八八	六四、〇一三	—

排水、通氣、運搬 排水、通氣、運搬の状況に關しては各採炭所の項に詳述し茲には單に其等の機械設備を表示するに止む

各坑排水唧筒設置箇所及臺數能力表

(昭和元年度末現在)

坑別	坑内外	設置箇所	種類	臺數	一分間排水量(M ³)
大山山本坑	外	盤下	六、八〇〇×五〇四	二	五、四四〇
大山山南坑	外	パイプ卸上十二片	五、七〇〇×二二二	三	四、五六〇
大山山坑	内	東第一本卸下六片	三、四〇〇×四〇二	一	二、七二〇
大山山坑	内	西下六片	一、七〇〇×二二二	二	一、三六〇
大山山坑	内	東下六片	一、七〇〇×二二二	二	一、三六〇
大山山坑	内	西下六片	二、二四〇×二二二	二	一、六九〇
大山山坑	内	下三片	五、七〇〇×二四四	三	四、五六〇
大山山坑	内	第二添卸下八片	一、七〇〇×二二二	六	一、三六〇
大山山坑	内	同奥八片	一、八〇〇×六一	二	一、四四〇
大山山坑	内	同第一卸下四片	五六六×六一	一	四五三
大山山坑	内	同底	一四二×八四	二	一一四
大山山坑	内	同底	五、六六四×三〇四	二	五、二九六
大山山坑	内	同底	二、三九八×二四三	二	一、九二五
大山山坑	内	同底	一、六九九×七六	一	一、一三三
大山山坑	内	同底	五、六六四×二四三	一	五、一八二
大山山坑	内	同底	三、三九八×二四三	一	三、一一五
大山山坑	内	同底	二、二二三×二二三	二	一、八四〇
大山山坑	内	同底	五、六六〇×二四四	二	四、五〇〇
大山山坑	内	同底	一七〇×六一	四	一七〇

坑別	坑内外	設置箇所	種類	臺數	一分間排水量(M ³)
同 遠屋坑	外	同掘造	一四二×八六	二	一四〇
同 同	外	同掘造	五、六六〇×二四四	二	五、五〇〇
同 同	外	同掘造	三、三九六×二八七	一	三、三〇〇
同 同	外	同掘造	三、三九六×二八七	一	三、三〇〇
同 同	外	同掘造	一、四一五×二三四	一	一、四〇〇
同 同	外	同掘造	二八三×八三	二	二八三
同 同	外	同掘造	一四一×八三	一	一四一
同 同	外	同掘造	二八三×八三	二	二八三
同 同	外	同掘造	六、〇〇〇×二五〇	三	六、〇〇〇
同 同	外	同掘造	八三〇×六一	二	八三〇
同 同	外	同掘造	三、四〇〇×二四四	一	三、二五七
同 同	外	同掘造	三、四〇〇×二四四	一	三、二五七
同 同	外	同掘造	五、六四四×二四四	一	五、六六五
同 同	外	同掘造	五、六四四×二四四	一	五、三三三
同 同	外	同掘造	五、六四四×二四四	一	五、三三三
同 同	外	同掘造	四、二四八×二二二	一	三、九六五
同 同	外	同掘造	二、二六五×二二二	二	二、一〇〇
同 同	外	同掘造	二、二六五×二二二	二	二、一〇〇
同 同	外	同掘造	一、六九九×二二二	一	一、六〇〇
同 同	外	同掘造	一、六九九×二二二	一	一、六〇〇
同 同	外	同掘造	一、八一二×二二二	一	一、八一〇
同 同	外	同掘造	一、八一二×二二二	一	一、八一〇

扇風機配置箇所及臺數能力表

(昭和元年度末現在)

激増により甚だしき脅威を受けるに至り一時同社は危機に立ちしも漸く難境を脱し経営法を改善緊縮して事業を繼續し今日に至れるものとす

北滿東部線にありては大正九年に至り輸送状態稍回復せられ且銀の下落に依る出材費と東支運賃の下落とによりて他と競争し得るに至り請負納入者は一面坡附近より雜木堅木を、穆林驛よりは主として松材を坑木として納入せり同地方の出材は一方南滿方面に於ける坑木價格を牽制し其材質優良にして寸法も亦當礦所要のものを任意に調達し得らるゝため大正九年には六百車の註文を發し大正十四年には三百車、昭和元年には二百車の註文をなせり

此外東支西部線にありてはシベリヤ落葉松の産出多く油松と共に推賞すべきものなるも輸送賃の點に於て引合はざりしが大正十年に至り同地方の出材を目的として札免公司なるもの設立せられ同十二年には百八十三車同十三年には四百二十四車の廻送を見たり然るに其後同公司に内紛起り後東支鐵道が同公司に對する運賃割引契約を廢棄したる結果營業休止の已むなき窮況に陥り坑木の供給は杜絶するに至れり

日本内地坑木は開坑當時に若干を購入したるのみにて一時全然跡を斷ちしも財界の不況による船賃の暴落と關東震災復舊の遲延による一般木材の需要薄とは樺太材價の下落を來たし加ふるに日本圓貨の下落に伴ふ銀及留騰貴の結果北滿材の南下減少し之に代つて樺太材の大連侵入を見るに至りたる等の原因により坑木も亦吉林及北滿に比し却つて安價となり所謂逆轉の現象を生じたるを以て大正十三年大連秋田商會を通じ約二百萬才の註文をなし十四年度には二百二十萬才昭和元年には五百萬才の納入をなせり

納入の樹種はトド松及エド松を主として落葉松をも混するものにして北海道の諸炭礦に於て使用の結果成績優良なりとの評あり大體に於て當地に於ける白松即杉松に比すべきものなり

使用數及金額 炭礦用品の内にて其金額に於ても其需要量に於ても坑木は最も重きを置くべき用品にして其使用數と價格とは直ちに石炭採掘經費に影響を及ぼすものなること勿論なり坑木費と全用品費の比較を見るに開礦以來昭和元年度迄の貯藏品拂出合計金一三八、五六八、六九九圓に對し坑木は金三三、七七〇、二二二圓にて約一七%に相當す

大正六年度以降に於ける坑木の使用數量及金額並に出炭噸數、採炭原價等の割合は左表の如し

坑木使用統計表

年 度 別	出炭噸數 (坑内掘ノミ)	採炭噸當原價	坑 木		
			本 數	總 才	使 用 金 額
大 正 六 年 度	一一,五四七	一〇,三三三	三,一九三	三,七六六	一〇,三三三
同 七 年 度	一一,四一〇	一〇,三〇一	三,七三三	四,一四五	一〇,三〇一
同 八 年 度	一一,四七二	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 九 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 十 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 十 一 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 十 二 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 十 三 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 十 四 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 十 五 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 十 六 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 十 七 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 十 八 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 十 九 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 二 十 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 二 十 一 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 二 十 二 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 二 十 三 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 二 十 四 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 二 十 五 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 二 十 六 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 二 十 七 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 二 十 八 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 二 十 九 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 三 十 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 三 十 一 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 三 十 二 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 三 十 三 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 三 十 四 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 三 十 五 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 三 十 六 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 三 十 七 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 三 十 八 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 三 十 九 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 四 十 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 四 十 一 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 四 十 二 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 四 十 三 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 四 十 四 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 四 十 五 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 四 十 六 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 四 十 七 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 四 十 八 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 四 十 九 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 五 十 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 五 十 一 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 五 十 二 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 五 十 三 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 五 十 四 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 五 十 五 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 五 十 六 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 五 十 七 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 五 十 八 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 五 十 九 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 六 十 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 六 十 一 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 六 十 二 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 六 十 三 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 六 十 四 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 六 十 五 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 六 十 六 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 六 十 七 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 六 十 八 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 六 十 九 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 七 十 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 七 十 一 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 七 十 二 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 七 十 三 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 七 十 四 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 七 十 五 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 七 十 六 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 七 十 七 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 七 十 八 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 七 十 九 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 八 十 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 八 十 一 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 八 十 二 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 八 十 三 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 八 十 四 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 八 十 五 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 八 十 六 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 八 十 七 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 八 十 八 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 八 十 九 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 九 十 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 九 十 一 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 九 十 二 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 九 十 三 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 九 十 四 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 九 十 五 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 九 十 六 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 九 十 七 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 九 十 八 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 九 十 九 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
同 一 百 年 度	一一,三三三	一〇,四〇三	三,九一五	四,一四五	一〇,四〇三
計	二,九八九	二,六四四	三,一八八	三,一八八	二,九八九

坑内掘一噸當り坑木使用才數は開坑以來を通計して平均一・二四才となるも明治年間には撫順炭礦としては開坑準備時代とも見做すべきものなるにより之を統計より除外し大正元年以降のみに就きて言へば平均一・八八才以上となり最も使用數の多かりしは大正五年度の一九・六四才にして次は七年度の一八・四六才なり最少は大正十一年度の六・九二才次は十五年度の七・二〇才第三位は大正元年度の七・三二才にして大正十四年度を第四位なりとす

而して大體の傾向より言へば大正元年以後五年迄は年々急激に増加し以後八年迄は稍低下せるも猶高率を持續し其後大正十一年度迄毎年急落し同年度を最低の極點として十二年度は十一年度に比し一・五五才の増加を示し十三年度以後は又漸減せるも昭和元年度以後は大體前年度と同様の見込なり

而して出炭量と坑木使用噸當才數との關係を見るに大正元年度は大山及東郷坑が採炭緒につきたる時なるを以て之を基本として其後の割

合の變化に於て大正二年迄は兩者相併進し以後五年迄出炭は幾分の減少を來たせるに拘らず坑木使用数は正反對に急激の増加を示せり是れ蓋し當時未だ當礦の如き厚き炭層に對する採炭法には學說、經驗共に參考とすべきものなかりしと老虎臺及大山坑の災變ありし結果坑内整理のため出炭減少せるに拘らず坑木使用數増加せること及び更に將來の増加に備ふる爲め採炭場の擴張を強行せるがために外ならず

其後大正九年度迄に新屯坑、龍鳳坑の開坑あり且充填作業に依る舊坑整理の進捗に伴ひ出炭は毎年堅實なる歩調を以て増加を示し出炭と坑木使用量との兩者の歩調は八年度頃より漸次相接近し來り十年度に於て全然相一致し以後十一年度には出炭増加せるに拘らず坑木の噸當使用數は大正元年度より尙低下し十二年度には出炭と同様上昇の結果を表はし更に十三年度には出炭は急激に増加し使用坑木割合は前年度より降下せり是れ十年度に於て賣炭不振の爲め出炭の制限をなせしにより其餘力を利用して坑内整理を完成したると財界の不況は採炭原價の大節減を強ひ坑木の使用數を節減するの已むを得ざるに至りたるも此當時より試驗的に行はれ居りたる傾斜充填採掘が愈々各所に於て實行せらるゝに至り十一年度には出炭の増加と反對に坑木使用割合を減少せるものとす

而して大正十一年度より十二年度に及び採炭量の急増は採炭切羽の擴大を生じ従つて坑木使用割合の増加を現はしたるも十三年度には傾斜掘の普及と坑道延長縮少と更に經費緊縮の結果前表の如き好結果を擧ぐることを得たるものとす

以上過去の統計より考ふるに大正四年度より七、八年度頃の坑内状態の不良なりしにも拘らず戦時の好況に隨伴して能力以上の採炭を續けざるべからざる時代又は採炭法の變更に依る場合は別として大正元年度より四年度迄及大正十一年度より十二年度迄の實績に現はれしが如く出炭の増加と共に噸當坑木使用數も必ず其割合を増加するものなる事を示せり

出炭一噸當本數は大體に於て才數と同様の傾向を辿り大正五年度の一・七七本を最高として前後に遞減し居れるも一本當の平均材積は大正六年度の一・七九才を最高とし以前は漸減し以後は大體に於て平均の結果を示せり

上記噸當本數が開坑當初に於て少きは新山なるが爲めにして近年の減少は充填による舊坑の整理及傾斜充填掘の結果なりと断定し得べし又一本當平均材積に付ては坑内採掘の進むに従ひ大となるを一般的原则とするも當坑に於ては坑内採掘後直ちに充填をなすため其材積は特に増加せざるなり

次に各年度中使用本數及才數の最も多きは共に大正八年度なるも開坑以來昭和元年度迄の合計使用數は

四八、三〇八、七四九本 四九一、四九九、一一九才

となりて之を延尺にして約三三〇、〇〇〇、〇〇〇尺即ち約六〇、二二〇哩にて其容積は滿鐵貨車七〇、〇〇〇車、重量一、五四〇、〇〇〇噸となるが故に坑内掘總出炭四三、七三三、九二七噸に比すれば一噸當本數一・一本才數一一・二四才にて之を重量に換算すれば〇・〇三三二噸即ち石炭一噸を掘りて其の三・五二才の坑木を坑内に入れたるなり

坑木價格は上表に示す如く大正元年度以降大正九年度迄年々騰貴し來れるもこれ濫伐の結果林地が年々遠隔となりしこと、戦時の供給難銀高及勞働賃の騰貴等の結果にして大正十一年度以後は銀價平時に復し供給も潤澤となり九年度の一才八錢五厘より昭和元年度の六錢八厘迄下落せり

坑木使用數の増減と價格の騰落とによる出炭噸當坑木代價は開坑以來毎年遞増し特に大正七年より急激なる増加を示し大正九年には金壹圓參拾貳錢壹厘に達し之を頂上として以後降下し同十四年度、十五年度に至り戦後の平調を得約五拾錢となれり一方坑内採掘費を見るに右坑木費と全く同一の徑路を取りて高低せることを看取し得べし

坑木の防蝕及代用品 坑木防蝕劑にはクレオソート油或は鹽類藥品等ありて前者は單に木材防蝕劑としては最も適當なるも坑木に對しては其臭氣が坑内瓦斯に酷似せると之が運搬及作業に當つて衣服及皮膚を汚損腐蝕する爲め坑夫等が其取扱を嫌忌する缺點あり然れども其の臭氣も慣るゝに従ひ自ら瓦斯と判別し得るに至り又クレオソート油は當礦の副生産物なる爲め進んで之を使用するに至れるものとす防蝕劑注入の實行の期に入りしは大正十三年よりにして試験は其以前二回之を行へり第一回は大正元年楊柏堡坑に於て坑木良材を汽罐場内にて充分に乾燥し之を華氏百度のクレオソート油中に十時間浸したるものを同坑内に使用し大正十年五月に至る間に於て其の結果を調査せしが大體に於て少くとも其の耐久力を二倍せしむるものなることを立證し第二回は大正九年蘇家屯防蝕工場にて各樹種の坑木にクレオソートの完全注入をなし各坑に試用せるものにして此分は未だ其結果を見る能はざるも普通材の同一箇所に於ける坑木の腐朽程度に比し是亦少くとも二倍以上の耐久力あることを認定し得たり而して坑木の耐久力は地壓による裂損と菌の發生による腐損とによつて決するものにして防蝕の必要は後者の場合に存し地壓力多き箇所の坑木に防蝕を施すは却つて不利益なりとす故に坑内中濕氣及氣濕の關係上腐損甚だしく且地壓の大ならざる所に防蝕坑木を使用するを以て最も有利なりとす當坑防蝕工場は大正十二年に設備を整へ十三年八月より作業を開始せる

ものにして注油成績及其経費左の如し

- 一 注油能力 一箇年 二百萬才(一年坑木總使用材積の六%)
- 二 注油法 オープンタンク、温冷各一回に浸滴す
兩者にて約三時間一才に付一合を注油す
- 三 工場設備投資 二〇、三〇九・七一
- 四 注油費 才當油代壹錢五厘諸費五厘計貳錢(金利償却費は約參厘なれ共加算せず)
- 五 注油材使用の豫想利益
一梓に要する金額比較左の如し

種別	寸法	一梓ノ本數	一本單價	一梓坑木金額	工賃	一梓價格
注油材	〇・七×八	三	三・一一	九・三三	一・〇〇	一四・六三
注油材	〇・三×六	一〇	〇・四三	四・三〇	(二五増)	
注油材	〇・七×八	三	二・二九	六・八七	〇・八〇	一〇・八七
普通材	〇・三×六	一〇	〇・三三	三・三〇		

右一梓の坑木才數は一四二・九八なるを以て本設備による注油材二百萬才は一四、〇〇〇梓となる(當坑内總數は約四〇萬梓なり故に其三五%に過ぎず)而して注油坑木が二倍の耐久力あるものとせば普通坑木にては二八、〇〇〇梓を要す仍て一四、〇〇〇梓に對する利益計算左記の如し

普通材	二八、〇〇〇梓	一〇・八七	三〇四、三六〇圓
注油材	一四、〇〇〇梓	一四・六三	二〇四、八三六圓
差引利益			九九、五二四圓

但し實際には毀損により一割乃至二割は利益を減少すべきも梓の取替により他の作業に影響する障害を考慮に加ふる時は之を補ひて餘りあるべし

注油作業開始以來の成績は注油坑木使用數二、六六〇、九六七才に過ぎざれば防腐材の坑木としての實績は寧ろ將來に期待すべきものなりとす

六 變災及救護班

採炭の如き坑内作業を主とする事業に在りては不慮の災害を惹起すること稀ならず當礦に於ては最新の科學的設備を充實して之が絶滅に努めつゝありと雖も時に突發する不測の災禍は其原因の那邊に伏在せるやを豫知すること容易ならず今日に於ける學理に於ては萬全の對策を以て之を未然に防遏し盡し得ざるものとす

坑内の通有事故たる自然發火、瓦斯噴出、落磐等の小事故は各坑共に枚擧に過ぎなきも何れも注水、土砂充填に依りて終熄せしむることを得大に充填法の効果を認め得たり大正十二年十月十八日老虎臺に起れる變災は大正六年度以降に於ける特記すべき災害なりとす該變災は西大捲十片附近に起れる自然發火に起因し白煙は入氣卸を下りて西大捲卸全部に擴がり消火に著手せる時は各通路の進入不可能となり遺憾ながら入坑華工を救助するの遅なく西捲卸四片以下十八片迄假閉密閉を行ひ次に本密閉作業に移り同月二十四日に至り終了せり而して十一月三日以後は西十片以上の復舊作業を遂行し漸く西十片櫻二十六卸口、九片二十六卸、八片二十六卸の三箇所に煉瓦密閉を施し七片の大排氣路を張切り十片以上の密閉箇所の瓦斯を放散せしめ西上部の採炭作業を開始せり十二月一日より西十片以下の復舊作業に著手し同月十五日を以て本密閉箇所の充填作業を殆ど完了し西下部内の採炭作業を開始し殉職華工六十八名の屍體は同月十八日に至り漸く全部の收容を終れり

救護班 歐米諸國に於ては鑛山事業の災害に對して夙に救命器の案出あり豫てレスキューステーションなる名稱の下に救護班を設置し不時の變災に備ふ當礦に於ても既に救護の救命器を購入し又救護班を組織して之が訓練に努めたり而して當礦備附の救命器は現在に於てはドレーゲル式十四組プロト式七十組其他附屬品及蘇生器(アルモーター)九臺にしてドレーゲル式は目下練習用の外には殆ど使用せざるも夫等備品の一部を豫備として本部に備へ其他を撫順各坑及煙臺坑に適宜配置して使用しつゝあり

主要備品配置状態

(昭和元年度末現在)

一 プロト式救命器	總數	七十八組(内本部備附十九組)	配置坑名	數量
配置坑名	數量			
大山坑	六	大山南坑	六	
東郷坑	六	楊柏壘坑	三	
老虎臺坑	七	萬達屋坑	五	
龍鳳坑	六	新屯坑	四	
古城子坑	六	搭連坑	三	
煙臺坑	七			
二 ドレーゲル式救命器	總數	十四組		
殆ど使用不可能の爲め本部格納中				
三 プルモーター	總數	九臺		
内本部四臺、大山坑、東郷坑、老虎臺坑、龍鳳坑、煙臺坑各一臺を配備す				
四 送風式救命器	總數	十一組		
内本部六組、大山本坑、東郷坑、龍鳳坑、老虎臺坑、煙臺坑各一組を配備す				
五 擔架	總數	二十箇		
内本部十四箇、大山坑、大山南坑、楊柏壘坑、老虎臺坑、龍鳳坑、煙臺坑各一箇を配備す				
六 救急藥盒	總數	十二箇		
内本部三箇、大山本坑二箇、東郷坑、楊柏壘坑、老虎臺坑、萬達屋坑、新屯坑、龍鳳坑、搭連坑各一箇を配備す				

七 携帯電燈(各種)

總數 百六十四箇

内本部百五十七箇、大山本坑四箇、東郷坑三箇を配備す

救護班 組織、訓練、編成、出勤及手當等に關して大正十一年五月一日撫順炭礦救護班規程を設けたり救護班員の定員左の如し

本部 中央救護班事務所

係長 一 係員 二 助手 二

第一班 大山南坑(二箇分隊編成)

司令 一 組頭 一 救護手 六

第二班 大山坑(二箇分隊編成)

司令 一 組頭 二 救護手 一八

第三班 東郷坑(二箇分隊編成)

司令 一 組頭 二 救護手 一二

第四班 楊柏壘坑(一箇分隊編成)

司令 一 組頭 一 救護手 四

第五班 老虎臺坑(二箇分隊編成)

司令 一 組頭 二 救護手 一二

第六班 萬達屋坑(一箇分隊編成)

司令 一 組頭 一 救護手 四

第七班 新屯坑(一箇分隊編成)

司令 一 組頭 一 救護手 四

第八班 龍鳳坑(二箇分隊編成)

司令 一 組頭 一 救護手 四

司令 一 組頭 二 救護手 二二

第九班 搭連坑(一箇分隊編成) 頭組 一 救護手 三

第十班 煙臺採炭所(一箇分隊編成) 司令 一 組頭 一 救護手 五

第二節 採炭華工

一 募集及移動

(一) 募集

募集方法 鑛山事業の原動力として労働者需給の圓滑を得ると否とは斯業經營上の盛衰に關する緊要問題にして當礦に於ても創業以來労働者の招來に就ては多大の費用を投じ幾多の辛酸を嘗め漸く今日に至りて略確實なる募集地盤を保持するに至れり

本礦に於て使用する中國人労働者中募集待遇に關し最も注意を加ふるは採炭作業に従事する採炭華工なりとす而して採炭華工の採用には現地採用と募集採用とあり現地採用は當礦區内各坑間を轉々移動し來る者と沿線各地方其他遠隔地より來坑せるもの二種なり何れも親戚友人同郷を頼りて來坑し小把頭の推薦により各坑現場華工係に於て體格検査の上採用す採炭華工の募集方法は實地の經驗に照して夙に募規内規を作成し爾來四圍の情勢に適應する爲め一年乃至三年を以て之が變改を行ひ總て同内規により取扱ふものとす募集方法は炭礦所屬把頭の配下なる古參採炭華工より募集人を選定し多くは其募集人出身の郷土に向はしめ炭礦の施設待遇を説きて出稼を勧誘せしむるにあり

募集人には土地の遠近便否の狀況により各一定の旅費を支給し華工招來に要する汽車及汽船賃並途中の宿泊賃食費を炭礦負擔とし其他の雜費は募集人に於て支辨す而して募集華工の就業成績佳良の場合には募集人及把頭に其成績に應ずる獎勵金を給與し又應募華工をして途中

逃亡せしめ或は募集華工の就業成績不良なる等の場合には不成績の程度に應じ賠償の責を把頭に負はしむるものとす

募集人は募集の結果豫定人員に達したる時は最寄りの招工公所又は出張所に同行し華工の收容、輸送等の手續を了す右の外大募集に際しては公所自ら募集の任に當り又直接職員を派して募集に従事せしむる場合もあるも由來把頭と採炭華工とは線業に際し所謂親分子分の關係を保持する因習深く從來の經驗に徴するに炭礦直接に募集せる華工は其配屬を受けたる把頭と相互の感情に疏通を缺く嫌ひあり隨つて配下華工の逃亡率を高むる事實あり殊に募集に際しては必ず金錢貸借問題を伴ふものなるが故に他人の募集せる系統不明の華工を其債務と共に引受くることは把頭に於て之を喜ばず此等の點より考察して炭礦直接の募集は不得策なりとし萬已むを得ざる場合を除き募集の事は一切把頭の手に一任するの方針を採れり

而して把頭の募集に對しても餘りに保護に過ぐる時は彼の依頼心を助長し自己の責任と負擔を軽減せんとする傾向あるを以て把頭の派遣する募集人の行動に關し一切の責任を負はしめ之に對し炭礦としては所定の手當を支給する外成る可く命令的干渉を避くるの方針なりとす而して現在把頭が募集人を派遣する主なる地方左の如し

- 膠 縣 地 方 海陽、萊陽、平度、昌邑、濰、安邱、高密
- 益 都 地 方 榮城、文登、寧海、福山、棲霞、蓬萊、黃、招遠、掖、諸城、萊蕪、昌樂、益都、臨朐、博山、淄川、壽光、臨淄、樂安、博興、新城、長山、鄒平、周村、章邱
- 濟 南 地 方 日照、莒、沂水、蒙陰、新泰、泗水、曲阜、寧陽、汶上、東平、東阿、平陰、肥城、聊城、茌平、博平、清平、高唐、平原、長清、歷城、禹城、臨邑、德平、商河、惠民、陽信、海豐、霑化、利津、濱、蒲臺、青城、齊東、濟陽
- 朝 陽 地 方 朝陽、凌源の一部及綏東
- 天 津 地 方 天津、靜海、青、滄、大城、文安、鹽山、寧河、玉田、豐潤、遵化、薊、寶坻、武清、安次、永清、香河、灤
- 京 兆 地 方 大興、宛平、良鄉、固安、三河、霸、通、昌平、順義、密雲、懷柔、房山、平谷、新鎮、雄、新城
- 凌 原 地 方 臨榆、撫寧、昌黎、盧龍、遷安、樂亭、綏中、建平、赤峯、平泉、承德、灤縣の一部、凌源縣
- 康 平 地 方 康平、法庫、彰武、阜新、黑山、北鎮、盤山

本溪湖及煙臺採炭所附近に於ては此等炭坑の作業に支障を來す可き虞あるにより此等炭坑を中心とせる一區域を限り撫順炭礦の華工募集をなさざることとせり

博山、淄川、新泰、萊蕪等の炭坑所在地より熟練なる採炭華工を招募するに對しては一般募集内規に準ぜず別に之を定め募集人は該地方出身の老實なる採炭華工を派遣し募集成績に對し幾多の優待條件を附加せり

臨時華工は即ち雜役夫の謂にして採炭作業に對して何等經驗なく採炭華工に比し募集適に容易にして往々供給過多を告ぐる場合あり撫順に於ては彼等は日常大山坑下に群集して労働市場を形成し隨時の招募を待ちつゝあり

臨時華工の募集は撫順炭礦を距る五十支里以外の地方より募集し著坑せしめたるものには各一名に付把頭に金五拾錢の募集補助金を支給するものとす

抑も華工募集の爲に募集機關を設け募集人を特派し多額の經費を要することは礦山經營上甚だ不利なる方法にして遠隔地の華工が募集人の特派を待たず自發的に來坑する方法を講ずるの有利なるは論なき所なれば當礦としても出炭計畫に支障を來たさざる限り募集人の派遣を、手控へ自費來礦者の誘致に努め其一手段として出稼華工の來集する地方の客棧を利用して宿泊出稼人に當礦への來稼を勧誘せしめつゝあり然るに採炭華工大部分の出身地たる直隸山東方面は歐洲戰亂に際し英、佛、露の三國が三十萬の軍役夫募集に著手し其の雇傭條件は一般労働者の歡迎する所となり之に應ずる者夥しくこれがため當礦の募工上に一大脅威を感じ從來の機關のみにては所期の華工數を得ること困難なるを認め此機會に當礦募集機關の擴張を企て六年五月新たに招工公所を錦州に開設し主として朝陽、遼西方面の募集に便し引續き平泉及凌源方面に募集區域を擴張して同年十二月凌源縣牛營子に招工公所を開設し以て錦州招工公所を経て營口に輸送するの計畫を樹て當礦の華工募集網は其一半を組成するに至れり

大正七年歐洲戰亂の終末に近づくに及び滿洲事業界は遽に活況を現出し形勢に乗ずる華工の移動日に激甚を加ふるに至り當礦は絶えず退散華工の補充に忙役せられ大募集に次ぐに大募集を以てし爲に山東方面よりの出稼華工の輸送頻繁を告げ船車の聯絡及監督中繼の必要に迫られ同年二月大連に出張所を、又錦州、凌源、朝陽方面よりの出稼華工を一時收容する機關として營口に出張所を設置せり越えて八年炭業界の黄金時代に入るや當礦の大出炭計畫に策應するため從來大把头鄭輔臣個人の募工機關たりし朝陽招工公所を直營に移したるを手初めに

天津を中心として直隸方面に大募集を開始し同年四月同地に招工公所を假設しこれと前後して山海關招工公所を開設するに至れり

是より先大正七年春山東方面に調査班を出だし具さに華工の集散状態を調査せしめたる結果臨沂縣(舊名蘭山縣)城内に募集常置員を派遣して青島以南より來たるものを招集せしむることとし又濟南には出張所を置き即墨縣方面には常置員を特派して相互の聯絡を保たしめ同年一月に至り山東省陽信鎮に出張所を設置せり茲に於て華工募集機關は山東省内に青島、濟南、即墨、陽信鎮、蘭山の五箇所直隸省内に天津、山海關の二箇所熱河區域内に朝陽、凌源の二箇所奉天省内に錦州、營口の二箇所合計十一箇所に達し當礦の募集網は其大體を完成するに至れり

然るに大正九年上半期に入り歐洲戰亂に由る一般事業界の好況は漸く其反動期に入り炭界亦不振を告げ當礦に於ても自然出炭制限の已むなきに至り随つて募集手控への必要を生じ同年六月山海關招工公所を撤廢し翌年四月天津出張所を閉鎖して駐在員一名とし代ふるに濟南出張所を擴張して山東西部地方の中樞機關たらしめたるも後再び縮少して日本人常置員を罷め支那人書記を常置するに止めたり大連招工所も募集事務閑散の爲十一月七月之を閉鎖せり然るに華府會議の結果山東鐵道は膠濟鐵路局に移管せられ青島招工所は華工輸送の中繼所として從來の便宜を失ひたると十三年度に於ける撫順炭の需要増加を見込み華工約一萬人増募の必要上十二年六月芝罘招工公所を復活し經費節減上成る可く遠隔地の募集を手控へ龍口方面等の交通便利にして華工自ら來集に便なる地方を物色して募集をなすの方針とせり

招工公所の組織は普通當礦の事情に通曉せる傭員級の支那人を派遣して常置し其下に實際の勧誘に當る可き支那人數名を使役することとし青島招工所の如き樞要の地には特に日本人礦員を常置し募集事務並華工に關する一般情勢の研究調査等に任せしめたり募集人が各地方に於て募集せる華工は募集人之を引率して最寄招工公所に出頭せしめ招工公所は一應身體検査を行ひ肺患、梅毒、阿片癮等の有無を検し合格者は合格者名簿に記載し捺印を徴し所定の場所に收容し乗船乗車手續並本部華工係に輸送通知を發する等中繼的業務を執ることとせり

即墨地方は當礦の採炭華工出身地として歴史的に不動の根據地を有する重要地方なるが故に青島招工公所は最も完全なる組織を有し日本人礦員之を監督す同所は常に募集員を奥地に派遣し應募者には護照を交付し山東鐵道の最寄驛より青島へ向け乗車せしむ而して山東鐵道とは豫て特約を結べるが故に乗車賃は應募工の青島招工公所到着後の後拂扱とし公所は四百名を收容し得る華工收容所を設備せり

各地方の招工所は時々形勢に應じ移轉閉鎖等のこと多きと支那領土内に不動産を設置するは其所有權の保護に危險なる等の理由により

之を支那民家より普通一年毎の契約を以て借入使用せり

應募華工の輸送経路は山東省内の輸送には曩に芝罘を中心として取扱へるも中途山東鐵道が我管理に移り大連青島間の航運業又我手に歸したる時青島經由の方針に一轉し大正十二年同鐵道の膠濟鐵路に移管せらるゝに及び更に芝罘龍口方面よりの輸送を企つるに至れり直隸省に於て募集せらるゝものゝ内天津を中心とせるものは徒歩にて營口に出て社線に依り來礦するを本徑路とするも輸送費の採算上芝罘營口線に依り輸送す但し此線は不定期船なるため不便を感ずること多し由來華工の輸送は各鐵道及各汽船會社の注目する所にして其團體輸送には凡て割引貨銀を協定す時々之の状況に應じ賃率一定せざるも濟南青島間の汽船賃は大洋四元、青島大連間は阿波國共同汽船會社との協定賃大洋壹圓五拾錢、大連撫順間は貨車一輛(普通四十人乃至六十人乗車)一哩貨銀壹圓、即ち貳百七拾壹圓なり

(二) 移 動

出炭の原動力たる採炭華工の移動の甚だしきことは嘗に當礦のみに非ず一般支那炭業界の常態にして當業者の對策に苦心する所なり移動とは即ち退散と來坑とを意味し別表の如く毎年度共夥しき數字を示せり

退散の根本原因は採炭作業其ものゝ性質にあり第一、作業の危険率高きこと、第二、坑内保安の爲め嚴重なる取締制裁の設けあること等にして殊に新來不馴の者にありては來坑早々坑内作業を嫌忌して退散する者多し今日迄華工移動退散の一般的原因は大體左の種類に分ち得べし

- 一 郷土歸還の爲
 - 二 雇傭條件の有利なる他事業へ轉ずる爲
 - 三 當礦内の各坑間に轉々する爲
 - 四 其他特殊の理由の爲
- 郷土歸還は毎年略定期的に行はるゝ退散原因の一にして歸還の種類に三種の區別あり
- イ 出稼華工の多くは農業労働者なるが故に農繁期に入れば歸國者續出す又郷土の豊作なるを開きて出稼を中止して歸國する者あり

ハ 舊正月を郷土に於て迎へんとする舊慣に依りて歸還す

出稼に依り相當の貯蓄を得たる眞面目なる労働者が郷土に一家を成すの目的を抱いて歸還す

事業の勃興に依り労働力の需要喚起せらるゝ場合には賃金高の地方を望みて續々退散す歐洲戦後の好況時代に於て當礦が華工の足止策に苦心慘澹たる状態にありしを回顧すれば如何に移動の激甚なりしかを想見し得べし敢て好況と云はず一地方に高賃銀にて華工を雇傭する一工場一事業の興るを知るや直ちに之に走るを常とす往年西伯利亞に於ける金鑛の開掘或は伐木事業の爲に露國が奉天等の地に於て盛に華工を募集したる時の如き當礦の採炭華工に多大の動搖を與へたり又鞍山製鐵所の創設當時及最近に於ける奉海鐵道の大募工等により蒙れる影響も其例なり

冬季結氷に迫り諸地方の請負工事が完成を急ぐに當り工賃を増額して募集をなす場合にも夫等工事の多寡に應じ華工の動搖を免れざるものとす

各坑間に轉々する者は多くは深き利害に由るに非ず作業の難易賃銀の高低等を噂に聞き直ちに轉坑す此等の徒には粗懶放逸の者多く又他坑に自己の同郷者、知友等あるを知りて夫等と同宿若くは共同の稼働を欲して轉坑する者もあり開坑當初にありては各坑隨意の採用を許せるため各坑所屬の大把头等は自己勢力擴張のため種々の手段を以て互に他の配下華工の争奪を行ひ其結果把头間の反目となり作業上にも支障を及ぼすに至りたるを以て明治四十五年當礦に中央招工公所を設置し各坑隨意の採用を禁じ一般轉工華工を嚴重取締り其弊を除くに努め大正十三年七月に至り更に指紋法を採用し華工全部の指紋を登録して各華工の行止を明瞭ならしめたる結果轉坑者の取締を略徹底的に行ひ得るに至れり現在にては各坑共華工係を配屬して其係に於て採用を取扱ふことゝなれり以上の外把头友人等の間に借財を重ね返済の途に窮し遂に通逃するに至る者等個々特殊の原因に由る退散者亦少なからず解傭は普通労働者供給の潤澤なる場合には行はれ成績不良の華工を淘汰するものなり又不時の變災の爲休坑し或は出炭制限のため剩餘華工を處分し減員せしむる事あるは已むを得ざるの處置なり退散者の補充は募集及自費來坑者に俟ち一般事業界の不況なる今日に在りては退散者を減じ自費來坑者を増し補充極めて順調なり自費來坑者の集來する原因は大體左の各種なり

一 結末期諸工事の休止

- 二 農閑期利用
- 三 勞動力を需要する事業界の不況
- 四 郷土の不作若くは饑饉

二 使役制度及待遇

(一) 使役制度

直轄制度及請負制度 凡そ採炭華工の使役制度としては請負制度と直轄制度との二種あり現今當礦に於て實施せるは直轄制度なりとす此制度は請負制度を改善し大把头制を存置したる過渡的的制度なるが實際の運用上寧ろ純直轄制度に勝れるものがあるが如く著々良好の成績を収め來たり但し場合により部分的に又一時的に請負制度を採用せることあり大正六年度以降に於ては同年六月萬達屋坑の營業開始より翌年十一月に至る間同坑の作業は請負制度を採用せり

賃銀及作業時間 賃銀は當初銀建とし後金建としたるが大正九年一月に至り銀價の昂騰著しく華工の苦痛大なりしを以て賃率の増加を試みたるも及ばず茲に再び小洋銀建を採用し金との換算率は毎月會社に於て奉天票相場を基礎として之を定めたり

大正十一年三月に至り出炭制限の必要上一週二回の休業を斷行し明治四十四年以來不變の制度なりし三十工數滿工拂の制をも改め一時二十工數滿工拂となせるも同年下半年に入りて奉天戰勃發のため開採炭の輸出不能となりしと一部工業界の恢復に依り俄に撫順炭は活況を呈するに至り茲に一週二回の休業を廢し八月には更に三十工數滿工拂制に復歸せり

採炭工賃は特殊の作業を除きては全部出來高拂制に依り坑道の遠近、炭質の硬軟、作業の難易等に應じて二十五級に分ち各賃率を異にす採炭工賃の支拂方法は各採炭所に於て毎日の出炭傳票に依りて出炭函數及等級を工賃カードに記入し三十工數に達するに及びて之を締切り食費、辨償金、過怠金等の引去金を控除し工賃引換券を發行し直接本人に交付す現金支拂の際には右引換券に指紋を押捺せしめ之を領收印に代ふ

採炭華工の作業時間は三班交替及二班交替の二種別あり各坑の事情に應じ適宜之を定め其交替時間も亦區々なりとす三班交替は八時間實働制にして二班交替は當初十二時間實働制なりしも今は一般に十時間實働制を採れり採炭華工をして二班交替制の如き長時間の労働に従事せしむることは却つて能率の低下を來たし又保健上より見ても輕々に看過し得べからざる所なるも工賃は出來高拂制を用ひつゝあるが故に短時間の作業は収入の減少を來たすものとして彼等の喜ぶ所とならず經營者の理想とする労働時間を短縮して労働能率を増加せしめんとする主義も要するに彼等の時間觀念を缺けると安逸を尙せんとする習性に依りて今直ちに之を實施するを得ず教導と時代の感化に依り華工素質の向上改善を俟つに非ざれば能率主義に基ける労働時間制は之を實施すること困難なりとす

作業獎勵法 支那労働者の通弊として自治的觀念を缺き監督の緩嚴に依りて勤怠を異にすること甚だしく殊に採炭華工に於ては作業の特異なると身命に及ぼす危険の常に伴ふがため彼等の生活觀念を不安定ならしめ怠慢、粗暴、無節制等所謂炭坑夫氣質に墮するもの多きは最も憂ふべき彼等一般の傾向なりとす而して習性斯くの如き彼等の作業能率の増進を計らんが爲には一面物質的利害に鋭感なる彼等の固有性を利用するは最も効果ある方法なるも此方法も長期に互れば刺戟を失ひ最少の努力を以て最大の勞銀を得んとする本來の弛緩なる作業状態に復歸するが故に屢々臨機に獎勵法の改廢を行ふ必要あり

當礦に於て近年實施せる獎勵法としては大山坑に於ける稼行獎勵法(大正七年十一月施行)東郷坑に於ける舊曆正月入坑獎勵法(大正七年二月施行)老虎臺坑に於ける不良切羽稼行獎勵法(大正八年五月施行)萬達屋坑不良切羽入坑獎勵法(大正八年六月施行)龍鳳坑出炭獎勵法(大正八年六月施行)煙臺坑變災後の入坑獎勵法(大正八年八月施行)等あり其期間は一時的のものを除き長きは一箇年短きは一兩月に變更したり歐洲大戰中に於ては専ら出炭増加及變災整理の目的を以て獎勵金を與へて稼行若くは入坑を獎勵したるが大正九年に入り一般財界不況の影響を蒙り當礦亦出炭制限の時代に入りたるを以て前記各坑の獎勵法は舊曆正月入坑獎勵金を除くの外全部廢止したり

取締及制裁 採炭華工の取締は本部及各坑華工係の掌る所にして募集、採用、解備の手續、逃亡華工、外部よりの盜募者、華工宿舍衛生等に関して夫々取締監督をなし宿舍方及支那人巡邏夫をして巡回監視せしむ華工宿舍には各棟に小把头一名を置き別に宿舍番一名乃至四名を附す宿舍番は華工行狀の監督、工具の修理、病人の看護、其他郷里への通信、送金等に至る迄華工に對して取廻しの世話をなすものとす作業中の監督は小把头各作業現場を巡回し日本人小把头の指揮に従ひ稼働を監督す坑内保安取締に關しては大正十三年五月一日撫順炭礦

坑内保安取締規則を改正實施し右取締規則に對して懲戒處分規定を定め採炭華工にも該規則を準用することゝなれり

華工入坑の際には保衛係は坑口検査を行ひ煙草、發火具、其他の禁制品携帯を嚴禁す又坑内に於ける安全燈の開燈、紛失破損、採炭札の紛失、工具の紛失、破損等は故意過失を論ぜず懲罰金或は辨償金を科す殊に坑内保安上最も戒心すべき喫煙開燈の犯則者には本人に對して懲罰金壹圓を科し本人所屬の大小把頭に對しても連帶責任として大把頭貳圓小把頭壹圓の罰金を科するものとす

阿片の吸飲者は採用せず吸飲者發見の場合には阿片竝に煙具を沒收し本人を解備す各坑間を轉々移動する華工の取締に關しては從來より苦心を費せし所なるも成績充分ならず大正十三年八月華工名簿整理に指紋法を試み成績良好なる爲同年八月より之を採用實施することゝせり實施方法左の如し

- 一 指紋法は當分の内常役華工及採炭華工に之を適用す
 - 二 常役華工を採用したる時は直に其所屬課所に於て華工採用カード二通を作成し本人をして庶務課華工係に持參せしむるものとす
但し採炭華工にして引率者ある時は該引率者之を取纏め持參すべし
 - 三 採用カード指紋捺捺欄には所屬課所に於て左食指印を徴するものとす
 - 四 庶務課華工係は前項採用カードと本人とを對照し相違なきを認め指紋カードを作成す
 - 五 採用カードの一通は庶務課華工係に保管し一通は其所屬課所に返付す
 - 六 指紋カードは庶務課華工係に保管し之を整理す
 - 七 華工指紋を徴したる結果前犯者なる事を發見したる場合は其所屬課所に於て之を解備するものとす
- 把頭** 前項に於て述べたるが如く採炭華工の大小把頭は直轄制度の下に歸屬し大把頭は配下の小把頭及華工の指揮監督華工の募集に任じ又華工に對しては個人的に庇護を加ふること厚く所謂親分子分の關係に置かるゝものとす而して常に採炭所々屬の華工係と聯絡して華工使役上遺憾なからしむるものなり華工係本部は必要に應じて大把頭を招集し或は調戒注意を與へ或は華工問題に關して特に調査研究を命ずることあり之を大把頭會議と稱す
- 現在の大把頭は必ずしも之を存置するの必要なが如きも採炭華工制度の實際の運用上彼等の實力を無視し難きものあり曾て大山坑に於

て試行せる班長制度の失敗に見ても之を知り得べし

同じく坑内作業に在りても採炭作業を除き跡間掘進、硬炭運搬、支柱の如きは何れも把頭の請負に委すこと直營に比し有利にして現在各坑共請負制度を採用しつゝあり

現行採炭華工把頭規則及大正十三年度末に於ける各採炭所別採炭華工大小把頭數及其手當月額左の如し

採炭華工把頭規程（現行）

- 一 多數ノ採炭華工ヲ有シ之ヲ監督指導スル才幹アリテ炭礦ノ爲ニ忠實ニ採炭ニ從事スルモノヲ大把頭ト爲ス
- 二 大把頭ノ配下ニ屬シテ之ヲ補助シ採炭華工五十人ヲ監督スル者ヲ小把頭ト爲ス
- 三 大把頭ニ對スル給與ハ所屬華工總稼賃金ノ千分ノ三十五ノ割合ヲ以テ毎月之ヲ支給ス
小把頭ニ對スル給與ハ所屬華工總稼賃金ノ百分ノ五ヲ常給トシ尙同百分ノ三ヲ各採炭所ニ於テ各小把頭ノ成績ヲ斟酌シ適宜獎勵金トシテ毎月之ヲ支給ス
- 四 各採炭所ニ於テ大把頭ヲ採用セムトスルキハ豫メ相當期間ノ試用ヲナシ其第一條ノ資格アルヲ認メタル上採用ノ手續ヲナスベシ
前項ニ依ル試用中ハ相當ノ日給ヲ支給スルコトヲ得
- 五 小把頭ヲ採用セムトスルキハ大把頭ノ推薦ニ依リ其職務ニ堪フルノ才幹アルヲ認メタル上採用ノ手續ヲ爲スベシ
- 六 大把頭方採炭華工ノ人員減少スルモ之ヲ補充スル能ハズ又ハ採炭華工ノ監督其宜シキヲ得ザルトキ若クハ炭礦ニ對シ不利益ノ行爲アリタルトキハ之ヲ小把頭ニ降シ又ハ罷免スルコトアルベシ
小把頭採炭華工ノ監督宜シキヲ得ザルトキ又ハ不適任ト認メタルトキハ大把頭ニ通知ノ上之ヲ罷免スルコトアルベシ

(二) 待遇

採炭華工宿舍 採炭華工の殆んど全部が獨身者なるが故に炭礦は彼等の收容所として合宿所を設備す

採炭華工宿舍は一般に間口十間奥行三間半乃至四間半の赤煉瓦若くは黒煉瓦建平家にして古城子露天掘附屬のものゝみは木造二階建間口

三十六間奥行三間半にして四百人を收容し得る宿舍なり煉瓦建一棟の收容人員は六十名乃至七十名を標準とし大小把頭宿舍は別に一棟を占め之を數戸に區分して居住するものとす

冬季採煤設備は坑即ち温土爐を用ひ古城子露天掘木造宿舍のみは蒸氣燈房設備を用ふ電燈、水道料等一切社給にして之を採光採煤の設備不完全にして電燈、水道の便無く陰鬱なる支那農民の家屋に比すれば其優劣は云ふまでもなし又華工宿舍に近接して食堂浴場の設けあり如何に華工に對する待遇の親切周到なるかを知るに足るべし現在に於ける各坑別華工宿舍數を擧ぐれば左の如し

華工社宅棟數及種類 (興業會社ヨリノ買収家屋ヲ除ク)

坑別	建 物	棟 數	收容華工種別	使用棟數
古 城 子 坑	木造	一	臨時採煤工	二
大山本坑、南坑	煉瓦	五	炭 華 工	五
東 山 坑	平 平	五	炭 華 工	五
楊 柏 堡 坑	平 平	二	炭 華 工	二
老 虎 寨 坑	平 平	二	炭 華 工	二
萬 達 屋 坑	平 平	二	炭 華 工	二
龍 鳳 坑	平 平	一	炭 華 工	一
新 屯 坑	平 平	二	炭 華 工	二
搭 連 坑	平 平	九	炭 華 工	九
合 計		二八〇	炭 華 工	二八〇

宿舍の監督及世話係として一棟毎に小把頭を配し其補助者として宿舍番一名乃至三名、四名を置くことは取締及制裁の項に於て述べたる如し此外書記、工具番、小使、雜役夫、衛生夫、巡邏夫、炊事夫等ありて夫々の職務に任ず此等の諸使用人を一括して華工世話方と稱し現在全坑に配置せる數百七十二名なり

臨時華工及請負華工に對し業務の必要上宿舍を支給する場合には採炭華工宿舍の餘裕を利用し或は撫順興業會社より買収せる黒煉瓦平屋建家屋に收容す採煤用燃料及水道、電燈は無料供給し尙家族持華工に對しては別に一戸を賃與し家屋設備の如何により一箇月金貳圓五拾錢乃至金參圓五拾錢の家賃を徴す

採炭華工を除く一般華工にして社給の宿舍を希望せざるもの及び宿舍の配給に與り得ざる者の宿泊せる千金業市中の宿泊所に就て調査せられたる所を見るに大體左の如き状態に在り

宿 屋 多く臨時華工を宿泊せしめ居るも徴税の負擔重く巡警の臨檢等種々複雑なる事情に依り漸次減少の傾向あり

煎 餅 舖 元來宿屋には非ざるも食糧品を販賣せる便宜上客を宿泊せしむるものにして普通宿屋の如く徴税の負擔なく營業簡易なり

行商人及び常役華工等の宿泊者多し

共同生活 同郷人又は親族等多數同居し居るものにして此種の生活方法は一般に華工の習性に適應するものとす

炊事及賣店 採炭華工に對する炊事は當初は把頭の請負に委したるも把頭等は只管自己の收利に没頭して不當の食費を華工より徴し又衛生上の觀念を缺き華工の保健上看過し難きものありたると華工が食事の度に飯店を求めて四散するは就業率に影響すること大なるを認め

たるを以て逐次直營制度に改め現在は各坑共直營炊事を施行するに至れり直營炊事の經營方法は華工より一日分食費として最低限度金拾壹錢宛を徴し工賃満工に達せしとき之が引去を爲すものにして拾壹錢なる食費は炊事經營に於ける採算上炭礦の損失たるを免れざる所なりとす前年食料品暴騰の際之に伴ふ食費の増徴を殆どなざりしが故に一年の缺損額五萬乃至拾萬圓に上れる事ありたり然れ共彼等華工に取りて食事は最大なる怡樂の一なるが故に直營炊事に於けるが如く年中を通じ殆ど同一品種の材料を以て調理せられたる食事にのみ甘んぜず時々所在地の賣店若くは市中の飯店等に赴きて自己の嗜好に任せて飲食をなし一方直營炊事の食費として工賃より引去を被る自己の損失を顧みざる風ありて毎食時約三割の缺食者を見るを常とす是れ直營炊事制度に於ける最大の缺陷となすべく當事者の研究を怠らざるところなりとす

直營炊事に於ては主食物として粟及高粱に次ぎて白麵、包米等を用ひ豆腐、大豆の鹽漬、漬物、鹽肴等を副食物となし適宜給與す一見粗食の觀あるも支那中農階級の食事に劣らざるものにして粗食と稱すべからず別に三大節即ち舊曆正月(一日一日)、端午節(五月五日)及仲秋節

(八月十五日)當日は豚肉、野菜、月餅、燒酒等を饗應し以て彼等が慶祝の舊慣に順ひ併せて平生の勞を福ふものとす食事時間は各坑線込時
間を異にするを以て一様ならざるも食事度数は一番方三回二番方四回とし凡て満腹主義にして食量を制限せず粟及高粱は乾飯又は粥に饗ぎ
白麵及包米麵は窩頭に造り其約半斤を辨當として携帶入坑せしむ

直營炊事の開始と共に華工宿舍との連絡便利なる場所を選び廣潤なる食堂を建設せり滿堂の大衆怡々として共に飲食するの狀正に別天地
の觀を呈す

賣店は直營炊事の單調なる満腹主義の食糧のみを以てしては華工各自の嗜好を満足せしめ難きを以て之を補はんがため各種の食料品を販
賣し併せて華工の日用品を廉價に供給するを以て目的とするものなり賣店は多く各坑所屬の採炭華工大把頭の兼營に屬し直營制度は漸次廢
止せられ現在のものは龍鳳、大山、古城子の三坑に置かるゝのみ此等三坑のものも追々把頭をして營業せしむる方針なり販賣方法は配下華
工に對し現金賣り若くは稼高を按して大把頭の發行せる購買券を交付し貨銀支給の際便宜上炭礦に於て把頭に代り其引去をなすものとす直
營賣店に在りては現金賣をなさず就業華工に對してのみ一日金拾八錢宛の食券を支給し此食券と商品とを引換ふる制度なり炭礦より食券の
支給を受けざる華工には把頭が自己の責任を以て金額貳百圓までを限度として食券を炭礦より借受け之を彼等に貸與し此食券代は貸金とし
て後日把頭より引去を行ふものとす

賣店營業所には採炭所建物の一部を貸與することあるも大把頭自ら適當の場所に販賣店を造營するを普通とす販賣品種は多種多様にして
饅頭、饅頭、包子、煎餅、各種油揚、汁物、味噌、醬油、生葱、菓子、煙草等を備へ雜貨部には手巾、石鹼、靴、シャツ、ゴム底足袋類の
日用品を備ふ食券は直營と把頭經營と同じからざるも壹錢、貳錢、四錢等の種類ありて使用上の便宜を計れり炭礦は把頭經營の賣店に對し
賣値の當否及衛生等に關し監督を行ふものとす

慰安及善導 採炭華工に對する娛樂機關としては従前各坑共華工宿舍の一部若くは別室に娛樂場を設け二黃調、西皮調等の蓄音器レコ
ィド其他蛇皮線、笛、竈、鼓等支那樂器十餘種を備へ隨彈奏使用せしめ一に彼等の慰樂たらしめ博奕、酒色等の惡習に陥ひるを防がんと
したるが樂器は破損に任せ修繕して再び用ひんとするものなく且又樂器を弄して慰樂となす者其數比較的尠く寧ろ宿舍の裡に安臥惰眠を貪
る者多き狀態にて娛樂場の目的を達すること能はざりき此の事實に鑑み今日にては年三回休坑日を利用して彼等の性情に適應せる通俗の支那

芝居を舉行し又活動寫眞會を開き或は樂隊、講談師等を雇請し各坑華工宿舍を巡廻演奏せしむることとし又入院患者に對しても一週一回同
様の慰安方法を講ず當礦の支出する此等慰安費は年額貳萬圓に達す

大正十四年度に於て華工娛樂機關の一として歡樂園設置の計畫を定め新設市街楊柳河畔の炭礦用地三萬五千坪を劃し直ちに造營に著手
し草木花卉を植栽して一般公園の施設をなし中央に老君廟を建立し配するに種々の興行物、妓館、飲食店等を以てせり造營費五萬圓にして
昭和元年度に第二期施設として建築費貳萬壹千餘圓、演劇費奉票貳萬五千八百餘圓を支出せり之が維持經營の爲に炭坑從來の大小把頭より
六百五十株壹萬參千圓を讓出せしめ維持會を組織せしめたり

教養なく又向上心を缺ける華工の善導方法は極めて卑近の方法に依り漸次誘導扶掖するの方針を採るを可とし彼等の理解の程度を超えた
る方法は却て效果無きのみならず時として反抗の氣勢を煽るの惡結果を招來する虞あり左に當礦が從來實施し來れる生活の改善思想の啓發
等に關する諸般の善導方法に就き概略を述べし

金錢に執著して貯蓄のためには極端なる禁慾主義を實行する者あるは支那勞働者の特質の一なるが採炭華工に在りては素行放逸無頼の者
比較的多く貴重なる汗の結晶たる所得を酒色、賭博の爲に浪費し數年間の勞働生活を以てして壹錢の貯蓄をも餘さざる憐れむ可き狀態に在
るを遺憾とし此弊を防がんがため所得の剩餘を炭礦會計課に預金せしむることを得せしめ且社員同様六分の利息を附することとして貯蓄を
奨勵せしが經濟知識の乏しき彼等は本機關の如き稍形式的手續を踏みて出納せらるゝ貯蓄方法を好まず把頭若くは同郷の信用ある商人等に
無利息を以て貯金を委託するを常とせり

大正八年三月採炭華工家族船車賃支給規程を定め華工の家族にして來坑を欲する者には父母妻子に限り船車賃を支給し呼寄後六箇月未滿
にて退去せる場合には支給旅費の全額を返納せしむることとせり是れ華工をして家族と共に居住することに依りて後顧の憂なからしめ土著
心を養ひ生活を安定せしめんとする良策なるも華工家族の招募には社宅の建設配給を先決問題となし多大の經費を伴ふものなるが故に近き
將來に於てその實現を期すること難し

流疫に際して支那人の罹病者多きは其衛生思想を缺ける事實を示すものにして數萬の大衆を役させる當礦の如きにありては最も寒心すべ
きことなれば衛生思想啓發のためには大に努むる所あり炊事の直營、宿舍掃除の監督、浴場設備等皆衛生の見地により施設せられたるもの

なり傳染病發生の際には直ちに隔離の上監視人を附し罹病者に對しては隔離中手當として採炭華工には一日四拾錢、臨時華工其他には貳拾五錢を給與す華工浴場は各坑に一箇所或は二箇所を設け晝夜の區別なく隨時無料にて沐浴せしめ又各坑に數名宛支那人理髮工を雇備し置き希望者には無料散髮券を交付して理髮せしめ理髮工の工賃は極高に應じ月末支給す大山坑の一例を擧ぐれば理髮工六名にて一箇月平均約二千四百名の理髮をなし工賃一人當り金四錢なり

支那人は一般に宗教に對する眞正の信仰を有する者極めて稀にして殊に華工の階級にありては絶無と稱するも過言に非ずその老君廟、天后宮其他財神を祀るが如きは現實的の慶福冥護を享けんがための慾望の表象せられたるに過ぎずして此等の慾望に伴ふ迷信に至りては寧ろ熱烈のものあり坑内作業の災厄と迷信との關係に於ては頗る興味深きものありて炭礦も彼等の迷信を善意に利用することの有効なるを認め各坑に彼等の崇敬せる老君廟を設け礦區の中心なる老虎臺坑には大正十五年經費約壹萬圓を投じて規模廣大なる老君廟宇を建立し華工の公休日を利用し年數回祭典を舉行することとせり

(三) 救 護

病傷華工の救護

炭礦醫院の開設當時に於ては一般の華工は未だ西洋醫術を理解せず態々自費を投じて古法を墨守せる支那醫者の診察を乞ふの状態なりしが最新醫術の效果顯著なるを見るに及び漸次來院する者増加し今日に於ては昔日の迷罔を抱く者殆ど稀なり

當礦に於ては採炭華工の病傷救治のため曩に採炭苦力救濟規定を定め又採炭苦力基金を設定し公傷私傷の別により治療費、扶助料を支給し來れるが後採炭苦力基金は採炭華工勘定と整理上の名稱を改め當初包含せる炊事費を分離獨立せしめ大正十四年度よりは更に臨時華工に關する諸費を合併して單に華工勘定と改稱することとせり

採炭華工救濟規定は數次の改訂を経て左記現行のものに及べり

採炭華工救濟規則

第一條 採炭華工業務執行上自己ノ重大ナル過失ニ起因スルニアラスシテ傷痍ヲ受ケタルトキハ左ノ等級ニ區分シ別表第一號(略ス)ニ依リ

扶助料ヲ給與ス但シ傷痍ノ狀況ニ依リ別ニ義肢ヲ給與スルコトアルヘシ

- 一 等 重傷死ニ至リタル者
- 二 等 二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ之ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケタル者
- 三 等 一肢ノ用ヲ失ヒ又ハ之ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケタル者
- 四 等 業務ニ就クヲ得ルモ身體ヲ毀損シ舊ニ復セサル者

第二條 前條ニ該當スルモノ又ハ前條第四等ヨリモ輕症ニシテ醫院ノ治療ヲ受クル者ニハ治療中入院者一日ニ付金參拾錢通院者一日ニ付金貳拾錢ノ補助料ヲ支給ス

公傷患者ニシテ入院ヲ要セス宿舍ニ在リテ治療スルモノハ其治療中食費ヲ徴收セス但シ醫院ノ診斷ヲ受ケサルモノハ此限ニアラス

第三條 採炭華工業務ニ起因セサル病傷ノ爲メ醫院ノ治療ヲ受クルトキハ治療ノ實費ヲ給與ス

第四條 採炭華工業務上傷痍ニ起因スルニ非スシテ死亡シタルトキハ葬式料トシテ金拾圓以內ヲ給與ス

第五條 此規則ニヨル支出ハ總テ華工勘定トス

尙採炭華工の相互的救濟機關と稱して採炭華工扶助會なるものを組織し華工の贖金及大小把頭等の寄附金を以て基金とし病傷の結果歸郷する者に對して夫々扶助金を給與すべき規約を定めたることあるも當礦の救濟規程の發表と共に一時中止の形勢に在りしが大正十四年度に於て互助の精神に基き労働者より實働一日に付金壹錢を據出せしめ炭礦より之と同額の補給をなすものとし華人共濟會なるものを開設せり現下會員數二萬四千餘名に上り労働者福祉増進の一新施設たるを失はず

救養工廠 採炭華工其他の支那労働者にして職務上の傷病に起因して不具瘵疾となり退職後衣食の途に窮するものに對して簡易なる坐職を授け不幸なる彼等の生涯を救護せんことを趣旨として大正十三年六月救養工廠規定を定め工場として老虎臺坑に於ける一家屋を工場に充てしが現在工場は千金寨舊市場跡に移せり該工場に對しては家賃、諸用品及事務費の一部を補給す收容者は簡易なる坐職に耐ふる程度の不具瘵疾者たることを要し現在作業の種類としては高粱マツト、萩マツト、支那靴、麻繩等を選び其他鐵力細工、養豚、養鶏等の計畫を有するも尙實行に至らず

最近に於ける收容人員四十六名何れも身體の不具者にして大部分は採炭華工なり技術の教導者としては専門の支那職工を雇備しつゝあり技術見習中は食費を補給し習熟するに及べば仕上高に應じて工賃を支給す普通日收參拾七八錢位なり既に技術を習得したる者には成る可く工廠を去つて獨立生活に入らしむるを本旨とするも彼等は技術取得後と雖も當礦の庇護を離れて退廠するを欲せず工廠の收容人員に限度ある以上多數の瘵工に對する救護方法として尙研究を要すべきものがあるが如し

撫順炭礦教養工廠規程

- 第一條 本廠ハ撫順炭礦教養工廠ト稱ス
- 第二條 本廠ハ炭礦ニ於ケル中國從事員ヲシテ業務上ノ傷病ニ起因シ退職後救護ヲ要スル者ヲ收容シ授産ノ途ヲ講スルヲ以テ目的トス
- 第三條 中國從事員ニシテ業務上ニ起因セザル傷病ノ爲瘵工トナレル者入廠ヲ希望スル時ハ特ニ詮議ノ上收容スル事ヲ得
- 第四條 本廠ハ左ノ事業ヲ經營ス
 - 一 柳籠及充填「ダム」用高粱「マツト」ノ製造並販賣
 - 二 支那靴ノ製造並販賣
 - 三 不具瘵工者ニ適當スル作業ノ紹介
- 第五條 入廠セントスル者ハ其所屬保衛係或ハ華工係ニ出願シ第一號様式ノ入廠願書ヲ提出シ庶務課長ノ許可ヲ受クヘシ
- 第六條 入廠ヲ許可サレタル者ハ第二號様式ノ誓約書ヲ庶務課長ニ提出スヘシ
- 第七條 入廠者作業工賃ニ關シテハ別ニ之ヲ定ム
- 第八條 入廠者ノ作業見習中ハ食費ノ全部又ハ一部ヲ補給ス
- 第九條 入廠者傷病ノ爲治療ヲ受クル時ハ治療費ヲ給與ス
- 第十條 入廠者死亡シタル時ハ葬式料トシテ金拾圓以内ヲ給與ス
- 第十一條 入廠者ハ炭礦ヨリ給與サレタル扶助料ノ半額ヲ本廠ノ指定スル所ニヨリ貯金スヘキモノトス

- 第十二條 入廠者ハ毎月收入ノ三割以上ノ義務貯金ヲ爲スヘキモノトス
- 第十三條 第十一條及第十二條ノ貯金ハ退廠ノ時ニ非レハ拂戻セザルモノトス
- 第十四條 入廠者ハ左ノ各號ニ該當スル時ハ退廠セシム
 - 一 本廠規程ヲ遵守セザル者
 - 一 救護ヲ要セザルニ至リタル者
- 第十五條 本規程ハ大正十三年七月一日ヨリ實施ス

(四) 労働争議

當今労働争議の頻發せる時代に在りて當礦中國人労働者が之を對岸の火災視せるの觀あるは洵に一奇と爲すに足るべし是れ彼等労働者が幾多の缺點を有せる反面に於て山東労働者の特性たる從順と忍耐との性質を有し強て争議を以て事を決せんとするが如き習性なしとの推斷に首肯すると共に一面當礦が支那労働者に對する親切なる理解を有し生活の保護、素質の改善等に關し時代に適應せる待遇施設に努むるの結果なりと云ふを得べし撫順に於ては今日迄彼等労働者が根據ある團體的の行動を以て何等の要求を訴へたる事實なく又労働者の團體を組織せるものあるを聞かずたゞ曩に元當礦の大把头某某等が發起となり撫順に客在せる山東及直隸兩省の同郷者を募り會員の傷病或は窮厄に際して相互扶助的に救済を講ずるを趣旨とする同郷會を組織せしが大正十一年十一月に至り前者より分離獨立せる山東同郷會なるもの發せられたり其趣旨前者と同様にして會員として比較的多數の山東出身の労働者を包含する可能性あるを以て多少其成行に關し注意を要すべきも當礦に従事せる大小把头の如きは多額の義捐金を要求せらるゝと當礦の意嚮に對して憚る所あり寧ろ入會を避けんとするの傾向あり且救済基金の不足なるがため到底豫期の成績を収むること能はざるが如し

大正十四年度末撫順中華青年會なるもの設立せられ専ら精神文化の普及を目的とし趣旨とするところ穩健にして會員は比較的知識階級に屬せり又本會と前後して直隸同郷會も面目を新にして起ち經濟的援助を炭礦に請ふ所ありたり

要するに此等團體の組織成立は支那人の時代思想に對する覺醒の結果なりと見るを得べく將來有力なる社會的機關たるに至るべきは自然

の數なるべく炭礦も其趣旨の穩健着實なるものに對しては寧ろ援助的意嚮を有し労働方策上良好なる結果の招來を庶幾しつゝあり
夫の一般思想界に刻期的變革を興へたる歐洲大戰は労働者をして労働尊重の一大自覺に達せしめたるが支那に在りても英、佛、露の招募に應じて戰時歐洲に出稼せる山東、直隸方面の労働者十五萬人の歸國により歐洲労働社會の行動と思想とを宣傳せらるゝあり且又日本内地に被發する労働爭議の刺戟は労働者をして其團體行動の力を知るに至らしめ支那労働界亦其の影響を免れざるに至れり

最近労働界に異常の刺戟を興へたる原因としては奉票の暴落、南北の戰亂、支那全土に互る早賊等を數ふべく十四年度末奉天の滿蒙毛織、製麻、大連の機械製作所等各工場の罷工相次ぎ其餘波撫順に及び此地に於ても二三の罷工的行動を見たるも幸にして大なる紛争を現出するに至らずして止み目下平靜を保ちつゝあり罷工の原因は何れも奉票の暴落に依る労働賃銀の増額要求に在り當礦の如く小洋銀建金拂及金建拂を行ふ制度に在りては何等の脅威を受けず却つて奉票の下落は收得銀換算に於て労働者にとり頗る有利なる狀況を呈せり一部分請負作業者は奉票建支拂を行ひ居りしも彼等の要求を未然に察知して金建拂に改めたるを以て極めて平靜に経過せり

今華工係日誌の記する所に従ひ一團の華工が時々小動搖を醸せし事例の二三を擧げて當礦支那労働者の動靜を考察するの資料となさん
イ 怨恨に因る騷擾 大正六年七月千金寨坑鶴燒工場に於て鶴燒の事より鍛冶工某と採炭華工某と口論の結果採炭華工某は毆打せられ負傷す他の採炭華工之を知りて大に激昂し各自柄物を手にして大舉鶴燒工場に押寄せ保備隊より應援を請ひ協同して鎮定す然るに翌日一番方採炭華工は申合せ宿舎を脱して市中に下り入坑せず係員百方勸説して漸く其翌日より入坑せしめ得たり

ロ 勞銀低下に因る不平 大正六年九月勞銀を低下せしめたるを不平とし入坑に際し千金寨坑の華工約四割散亂して入坑せず
ハ 怨恨に因る盟休 大正八年七月三日古城子採炭所棹取夫が作業上の事より邦人に對して不遜の態度に出で毆打せられたるを遺恨とし僚工を糾合して翌日盟休止係員の戒諭に依り解く

ニ 勤務制度變更に因る不平 古城子採炭所剝土作業に従事する機關車從事員は他の作業員より勞苦多しとなし其二番方勤務者には半夜交替に他の比較的安易の勤務に服せしめ成る可く休養を興ふることゝなし居りしが都合に依り之を撤廢せしに約四十名の機關車乘務員は申合せて勤務を捨て現場より退散せり取調べの結果右盟休には五名の煽動者あることを發見し警察支署に引渡し直に解備せり
ホ 工賃値下に伴ふ紛擾 大正十二年十二月各坑共貳錢方の値下を實施せるに原因し全坑に互り多少の紛擾を醸せり

楊柏堡坑は一番方昇坑に當りて昇坑せず二番方の繰込不可能となり大小把頭の動解に應ぜず不穩の舉動に出でんとせしが漸く一先づ出坑せしめ二番方の繰込を了せるも二番方入坑華工數も平常より約一三%を減せり此紛擾の際華工の口々に要求せる所を綜合せるに大略左記の數件に在りたり

- イ 食費値上の噂あるも値上げせざること
- ロ 採炭傳票に従前通り金額記入のこと
- ハ 坑口の防寒設備を完全にすること
- ニ 食糧粗惡に付改善されたきこと
- （イ）の食費値上は何者かの惡戯的宣傳に依りたるものにして（ロ）の要求は之を容れ其他に就ては所謂大坑頭及華工係より詳細に説明を興ふる所あり無事就業せしめ得たり

以上數件の如きは怨恨、不平、誤解等に起因せる小事故たるに過ぎずして労働者としての自覺に立脚せる思想的傾向あるを認め難きも將來労働問題の萌芽として慎重之に備へざる可からざるは論なきなり

採炭華工募集成績

(昭和元年 度)

種別	採集		計	%	煙臺採炭所
	南大坑山	東大坑山			
大山採炭所	三、四四一	三、二八五	六、七二六	八三	七七一
東輝採炭所	六、七九	五、二〇	一一、九九	一七	一一八
楊柏堡坑	一、一〇	三、九〇五	五、〇〇五	一〇〇	九〇
老虎臺採炭所	六、四六	五、一三	一一、五九	七五	九九
老虎臺採炭所	一、一〇	三、七六三	四、八六三	一〇〇	九〇
屋頂坑	四、九七	四、五三	九、五〇	一〇〇	九〇
龍鳳採炭所	二、九七	一、四五六	四、四三	一〇〇	九〇
龍鳳所	九、四二	三、九三	一三、三五	一〇〇	九〇
搭連炭坑	二、九七	一、四五六	四、四三	一〇〇	九〇
計	三、四四一	三、二八五	六、七二六	八三	七七一
計	六、七九	五、二〇	一一、九九	一七	一一八
募集地方別	山東省	直隸省	東三省		
計	六、七九	五、二〇	一一、九九	一七	一一八

第四章 鑛山業
探炭華工々賃月別支拂高表

五八四
(昭和元年度)

月	工賃	探炭華工數	平均一日工賃	作業日數
三月	八二,三九二・八七〇〇	一,三七八〇	五九四〇〇	二七
四月	八一,一八七〇四〇〇	一,〇六七〇	六七三〇〇	二五
五月	八六,三三三,三七〇〇	一,三三八三	七〇,二〇〇	二七
六月	七七,二五八,三三八〇〇	一,〇九六三	七〇,五〇〇	二五
七月	八〇,〇六二,四二〇〇〇	一,一四,三三九	七〇,〇〇〇	二六
八月	七九,三七一,九八六〇〇	一一,一七〇七	七一,五〇〇	二五
九月	八五,一五〇,六〇三〇〇	一一,七〇七三	七二,七〇〇	二〇
十月	九三,六二一,七三四〇〇	一三,一三七八	七二,〇〇〇	二七
十一月	一〇一,〇一八,七九〇〇〇	一四,二八五一	七〇,七〇〇	二八
十二月	九四,〇六一,四三九〇〇	一四,一四三三	六六,六〇〇	二八
合計	八五五,八二五,五三〇〇	一,二八,四四八	六六,六〇〇	二六
平均	七九,一四六,〇三九〇〇	一一,二六九三	六五,〇〇〇	二六

所屬別大小把頭數及手當

(昭和元年度末)

坑別	大把頭數	小把頭數	平均手當
大山南坑	八	八	八五七四〇
東嶺坑	一〇	一〇	一〇,四七八八
楊柏堡坑	一〇	一〇	一〇,四七八八
老虎臺坑	一〇	一〇	一〇,四七八八
萬達屋坑	一〇	一〇	一〇,四七八八
龍鳳坑	一〇	一〇	一〇,四七八八
新屯坑	一〇	一〇	一〇,四七八八
搭連坑	一〇	一〇	一〇,四七八八
合計	一〇〇	一〇〇	一〇,四七八八

第二編 會社の事業

五八五

坑別	大計	小計	平均手當
大山南坑	一〇〇,三七八一	一〇〇,三七八一	一〇,四七八八
東嶺坑	一〇〇,三七八一	一〇〇,三七八一	一〇,四七八八
楊柏堡坑	一〇〇,三七八一	一〇〇,三七八一	一〇,四七八八
老虎臺坑	一〇〇,三七八一	一〇〇,三七八一	一〇,四七八八
萬達屋坑	一〇〇,三七八一	一〇〇,三七八一	一〇,四七八八
龍鳳坑	一〇〇,三七八一	一〇〇,三七八一	一〇,四七八八
新屯坑	一〇〇,三七八一	一〇〇,三七八一	一〇,四七八八
搭連坑	一〇〇,三七八一	一〇〇,三七八一	一〇,四七八八
合計	一〇〇,三七八一	一〇〇,三七八一	一〇,四七八八

採炭華工移動成績 (古城子、煙臺ヲ除ク)

年 度 種 別	前月末現在人員	採 集		用 計	退 散
		募	自費來坑		
大正六年	六、一六二	一、一四二	一、一四二	三、四八七	三、一三〇
同七年	九、七五八	一、五〇四	二、七〇六	四、二〇八	三、九〇〇
同八年	二、九四五	一、六三〇	三、三二五	四、九四三	五、〇〇二
同九年	二、一四九	一、五九〇	四、三六九	五、八八〇	五、七八八
同十年	二、三三〇	一、八三三	二、九四九	三、〇七九	三、四八四
同十一年	八、二五〇	一、四四〇	二、五二六	二、六五五	二、六三三
同十二年	八、四三三	四、一〇五	三、三三〇	三、七四五	三、五八八
同十三年	一〇、四三〇	二、一五二	三、一五五	三、八〇七	三、七一九
同十四年	一一、二二五	一、八四三	二、五二四	二、六九五	二、七九六
昭和元年	一〇、一五六	五、四三〇	二、六六五	三、五五五	三、〇五五

備考 退散人員中ニハ死亡人員ヲ含ム

採炭華工就業成績 (右側數字ハ全坑人員)

(昭和元年度)

月 別	採炭 業	
	採炭所	煙臺
六月	一、八八〇	一、二〇二
五月	二、四五六	一、三三四
四月	一、九六七	一、九〇二
三月	二、二〇八	一、三二五
二月	二、二〇八	一、三二五
一月	二、二〇八	一、三二五

第三節 古城子採炭所

出 入 當 高 (噸) 計	月 別											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
出	一、七五	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三
入	一、七五	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三
當	一、七五	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三
高	一、七五	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三
計	一、七五	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三	一、七三

大露天掘 當採炭所は所謂撫順大露天掘計畫の實施せらるゝ處にして初め古城子露天掘と稱せられ後古城子坑と呼ばれたるが大正七

年六月二十一日炭礦職制改革の結果古城子探炭所と改稱せられ九年六月三日千金露天掘を古城子探炭所の管下に移し従来の舊露天掘を第一露天掘、千金露天掘を第二露天掘と新に呼稱せらるゝこととなり大正六年度に於て第二露天掘の開発計畫定めらるゝや先づ千金露第一露坑西方約五十間の位置七箇所に試錐を施し著炭の深度を測量せるに二十尺乃至三十六尺を以て達し得べきことを確知し得たるを以て六年九月末試錐作業を休止し十月一日露天掘引込本線の掘削工事に著手し同月十六日初めて十數噸の出炭を見來剝土作業の進展順調にして漸次其規模を増大し來れり

抑も撫順露天掘開發計畫は小沼探炭所長に依り大正五年度以來主張せられ不斷考究されつゝありし問題なりしが其規模の大なるに於て正に世界に其比を絶し其開發に伴ふ剝土剝岩並採炭に要する諸設備費に巨大の支出を要し且其採炭區域の擴張するに従ひ撫順驛を初め千金寨西暨坑及千金寨市街の移轉を斷行せざる可らざる等其他炭礦經營上重大なる影響を免れざるものなるを以て事容易に決せざりしが遂に大正八年九月一日會社重役會議に於て大露天掘計畫の前提として第二露天掘を基礎露天掘となし之を開發せんがため取敢へず興業費五百萬圓の支出を決定するに至れり爾後著々實施の準備を進め同年六月三日大露天掘計畫の調査研究を助くる爲米人技師一名を滿二箇年の契約を以て雇傭し續いて同じく數名の米人技師を聘し二箇月に互りて實地研究せしむる所ありたり

其結果は小沼案、ダベンボート案等數種の計畫案の發表を見るに至りしが其大體は露天掘稼行期間を三十年と見積り地表よりの深さ七百五十尺、此剝土量約二千七百萬立方尺、剝岩量約八千八百十萬立方尺、炭層採掘量約一萬一千二百萬立方尺(内石炭約九千九百萬噸)興業費約四千八百萬圓を要すべき大事業なるが故に大露天掘著手後に於ける作業の實績並將來の石炭需給の情勢を考慮して最も慎重なる研究を要すべしとなし遠き將來に對する斷定的計畫により一時に多額の經費を投ずることを避け先づ前途十年間に對する暫行案を設定して之を試むることとし大正十二年五月調査委員會を設け研究を重ねたる結果同年十二月に至り該案の作成を見たり

暫行案の計畫によれば著手後四圍の情勢に應じて方針變更の自在性を有すること事業資金は最少限度を運用することの二條件を前提とせるものにして其具體的要旨を摘録すれば左の如し

- イ 表土剝離は從來の通りエキスカベーターによること
- ロ 頁岩の採掘は大型ショベルを用ひレールウエーアツプローチに依り搬出すべきこと



撫順炭礦露天掘

ハ 表土頁岩の捨場は北方渾河左岸一帯の地となすこと

ニ 石炭は炭車に積み炭層内に設けたるポケット迄手押しをなしスキップ、ワイチングを以て南山麓に捲揚げ鐵道運搬によりて選炭場に集むること

ホ 選炭場は坑の西端に於て下盤に沿へる點に設くること

ヘ 出炭は一日平均一萬噸を標準とし一萬五千噸迄の出炭に應じ得る設備をなすこと

第二露天掘に於ける現今の作業方針は前記暫行案に基けるものにして該案により噸當り石炭原價を算出するに參圓貳拾九錢五厘に當り之を坑内掘となす場合に噸當り五圓參錢九厘となり其有利なること勿論にして十年後に於ては剝離費の増加することあるも準備費及金利の減少に依りて大差を生ぜざるべく坑内掘も漸次作業の改善に依りて多少炭採費の低減あるべきも多きを期待し得べからず況んや坑内掘に於ては充填採掘法を以てしても採炭率約六〇%に止まれども露天掘採掘法によれば殆んど一〇〇%に達すべき見込なるに於てをや

剝離及採炭 第一露天掘の開發計畫は前述の如く當初の計畫は廣軌鐵道を坑底深く引入れ頁岩及石炭を搬出することに在りしが不均齊なる下盤隆起の關係上此大規模の計畫を見合せ主として手掘により採炭をなし容量半噸の炭車に積込み捲揚機械にて搬出することに變更せり元來古城子村落附近の土砂は沖積層厚さ四十尺の内上部約十尺は赤土にて下部三十尺は多量の砂利を含有し共に充填用砂として好適のものに非ず大正六年七月に至り第三捲北側に砂篩の裝置を設け土砂の篩分をなしバラストは保線係に、砂は注砂坑に供給することとしたるが其選砂量僅少にして且又砂質不良なる爲充填用砂として使用するの不利なるを認め同年三月選砂作業を廢止し剝土全部を露天掘西側に運搬拋棄する傍同所附近の土堤築造の用に供せり

表土の剝離に伴ふ石炭の採掘法は普通の階段掘にして即ち最初採掘炭引揚用の卸として一條の地形を残し之を起點として十二尺の深さを以て炭層面を圓型に採掘す是れ第一階段掘下げの著手なり而してこの圓型の内側に沿ひて水平に軌間二呎の軌條を敷設し採掘炭は半噸入り炭車に積み手押しを以て卸の下に送り捲網に連結して引揚げしむ此の十二尺の深さを有する盆狀の採掘跡の周縁より十尺を離れたる外縁線上に十二尺の間隔を置き深さ十尺乃至十二尺の發破孔を穿ち之に爆藥を装入して七、八孔バラレルに連結して電氣發破を行ふものとす斯くの如き作業により第一階段は漸次半徑十尺宛採炭面積大せられ相當の採炭面に達すれば第二階段として其の心部より更に圓型に採掘を始む以

下總て此方法により第一露天掘は南方及下方に向け掘進せり大正五年末に於て既に地表よりの深さ百七十三尺十一階段に達し六年七月第十階段に及び七年三月第十四階段の掘り下げに著手せり北側大斷層に接近せる炭質は多少揮發性成分の飛散せるあり加ふるに炭層中頁岩分解より生ずる粘土と無數の斷層中に夾在せる粘土とは採掘石炭の表面に附着し外見を損すること甚しかりしも漸次南方と下方とに掘進するに従ひ精良のものを得るに至れり

採掘の進展に伴ひ判明せる炭層の埋存量は甚だ豫期に反するものありて露天掘中央部は大正五年六月に至り既に採掘すべき石炭殆ど存在せず西部は炭層中に夾雜物多く選炭其他作業上に困難尠ならず獨り望を囑すべきは東部なるも同方面も漸次露天掘の掘進と共に上層頁岩の厚度を増加し之を剝離せんが爲には從來の小設備にては作業不可能にして若し積極的に大設備費を投じて採炭せんとすれば採算上不利益を來すべしとなし爾來積極的施設は殆ど之を停止し消極的採炭を繼續し第一露天掘の命脈前途長からざるに至りしを以て茲に新露天掘區域を他方に求むるの計畫を立て同年九月第一露天掘坑内より撫順蘇家屯線以南古城子村落下炭層狀態探査の目的を以て東部七段に横坑二、西部二卸六段に堅坑一を掘鑿し第二露天掘大擴張の準備に著手せり

爾來屢々第一露天掘南方及西方地域に向ひ試掘坑を開鑿して炭層狀況の調査研究を進めたる結果大正九年度に入りて漸く第二露天掘大擴張の開始を見るに至れり然るに炭界は此時好況の反動期に入りたるに依り第一露天掘の出炭を極度に制限し剝土作業は全然之を休止し一部分に於てのみ採炭を繼續せるが十一月二十三日限り遂に一切の作業を休止し第一露天掘の諸設備を第二露天掘に移轉することとなり大正十三年度に入りて仰筒坐捲卸線路の一部及積込棧橋等を除き採炭に關する一切の設備の移轉を了せり

第二露天掘は當時千金寨坑の管下に屬し大正六年十月一日露天掘引込本線敷設工事に著手し爾來著々諸設備充實と剝土作業とに努め大正十年度に入りては剝離面積大に擴張せられ之より生ずる土砂の運搬並其捨場作業に多忙なるに至れり露天掘南側及坑内作業より生ずる土砂は南捨場に、北側より生ずるものは第一露天掘西北側捨場に運搬して拋棄せしが其一部の土砂は之を利用して千金寨西堅坑に充填すべく十一年六月より輸送を開始せり

エキスカベーターに依る採掘作業は九年八月より北側三臺南側二臺を配し十一年度に入り機の運轉愈々順調の域に進み夏季最盛期に於ては掘鑿、運搬共に殆ど極度の能力を發揮し當時同機一臺一日當り土砂採掘量二千八百九十立方メートルの記録を殘せり爾來露天掘の發展狀態を見

るに十二年度に於ては露天掘北側は撫順驛構内に近接し來り茲に進展を阻まれたるも坑内西北隅炭層の彎曲せる一部區域を除くの外總て上層の頁岩に掘到し南側は十一年十月に至り下層線迄剝土作業を完了し十二年度に入りて南四段以上の各段は順次炭層下層迄採炭を終れり東部は剝土未了のため進展を見ざりしも十二年五月舊西堅坑附屬選炭場、注砂場其他諸建物の取壊しをなし炭層面東端より舊西堅坑に向ひて掘進を開始せしも地質粘土質にして作業上大の困難を伴ひ又該坑附近上層露頭線の測量圖は實狀と齟齬せることを發見し作業の進行に一頓挫を來たせるも更に工を起し今日に繼續せり西部方面は古城子村落の移轉並々として進捗せざりしため十二年四月に至り作業を開始し採掘區域も僅に西方七百米の範圍に限定せられしが同年八月未買收地の一部の解決を告げし結果エキスカベーター線を約三百米西方に延長せしむることを得たり第二露天掘に使用せる機械は剝土用としては主としてエキスカベーター及スチームショベルを使用せるが大正十一年八月クライスリユツクマシネー(線路移動機)一臺同年五月クライスリユツクマシネー(手動式線路移動機)六臺を購入し使用せる結果從來の工事に要せし勞力及經費の約三分の一を以て竣工せしめ得るに至れり十三年度に於ては出炭の不足を補ふ手段として西南部に容量十噸の單式スキップ捲を新設せり十四年度に入りて剝離に従事するエキスカベーター作業範圍は千金寨驛ヤード線路及運炭本線等に阻まれ露天掘西方北側約七百米の區間のみに限定せられ遂に東方に掘進すること能はず掘鑿線短きため機械も二機のみを使用し採掘土砂は主としてエンドレス運搬線路の築提に使用せり

同年度使用せるショベルは四五C型蒸氣ショベル二臺、一五〇B型蒸氣ショベル一臺、一〇三C型電氣ショベル一臺にして採炭作業は剝土剝岩に限定制限せられ切羽の發展を行ふべき箇所は主として東部及西端の二區域となり他は行詰り狀況を呈せり大正十四年一月二日東部採炭區域に自然發火による火災を生じ一月九日に終熄せるが其被害は僅少なりき

昭和元年度に於ては採炭、選炭及選炭設備に大變化有り露天掘採炭史上劃期的變革を示せるものなり即ち採炭に於ては從來の手掘りショベル機械採掘に移る第一歩として同年度三〇B型電氣ショベル一坑及五〇B型電氣ショベル二臺を購入し坑内二臺を採炭に使用し五〇B型一臺を以て臨時剝土作業を開始せり選炭設備としては七月坑外第一、坑内第三、坑内第四各エンドレス捲機試運轉を完了し次で坑内エンドレス用ジャンクションデッキ自動取外し機の試験を行へり八月二日前年度以來設備中なりし大選炭機完成するや假試運轉及綜合試運轉を行ひ爾來晝夜運轉を繼續せり其後十二月までに坑内第一エンドレス及第二エンドレスの竣工を見茲に第一期の選炭設備を完成し其結果選炭能

力に多大の變化を來せり
 同年度剥土作業は西部採炭區域北側、東端剥土區域擴張箇所、東部採炭區域北側及南側に於て行ひ西部採炭區域北側にはエキスカベーター二臺を以て作業し剥土延長一千二百四十米幅四十米に及びり次で昭和元年度に於ては千金峯驛ヤード線路及露天掘運炭本線に阻まれ充分の剥土を行ふこと能はざりき

露天掘東端剥土區域擴張箇所に於ては四五C型蒸気シヨベル一臺を以て開鑿し延長六百米幅最大四十米にして東方に向ひ四百米の延長をなせり剥土作業はエキスカベーター二臺を用ひ此區域の延長二百七十米幅最大三十二米なり東部採炭區域北側には主として一〇三C型蒸気シヨベルを使用し剥土延長五百二十米幅最大二十七米なり東部採炭區域南側には四五C型蒸気シヨベルを使用し其延長六百米幅最大五十米なり

剥岩作業は坑内中部採炭區域北側に於て一五〇B型蒸気シヨベルを使用し延長三百六十米幅三十米に及びり而して同年度に於て剝離せる總面積は八萬二千五百平方米にして開坑以來の露天掘剝離總面積は八十萬二千五百平方米、東西長さ三千四百米、幅最大五百七十米に達す

採炭切羽は東部中部西部の三區域に分たれ東部中部の二區域は坑外南端第一、第二、第三、第四、第五の五臺の蓄電氣捲機を以て舊棧橋に捲揚げ西部の一區域は西端一基の第六電氣捲機を以て捲揚送炭せりエンドレス完成するに及び東部採炭區域に於ては採炭用シヨベル機械數臺を入れ八月以後は従来の捲機に依らずエンドレス運炭に移れりよつて第一捲機の作業を中止し大正十五年三月之を撤廢せり

上述の如く東部採炭區域は手掘を廢し漸次機械的採掘に移り中部區域は手掘を以て採炭し舊捲機に依りて送炭せり此部分は切羽進むに従つて剝岩限界に近づき年度末に於ては殆ど切羽の發展を行ふ餘地無きに至れり

西部坑區域に於ては従來西端設置の第六捲機を用ひたるが坑内第一坑内第二兩エンドレス車道の進むに伴ひ十月途に當捲機の作業を中止し次で之を撤廢し爾來専ら坑内第一、坑内第二エンドレスを使用せり

昭和元年度採炭の成績を見るに火災後の舊坑整理、運炭設備の變更、炭車の不足等に加へ選炭機の改造補修續出し舊捲の切羽は作業箇所少く出炭順調ならざりしが大正十五年一月以降炭車の不足緩和せられ選炭機の補修完成し又従來採炭華工の二交代なりしを三交代となせる

等鋭意努力の結果昭和二年一月二日には一萬一千九百九十五噸の出炭を見爾後一箇月の出炭一萬噸以上に及ぶこと屢々にして昭和元年度の責任出炭量二百五十一萬噸に對し二百五十二萬餘噸の出炭超過を示すに至れり
 今開坑以來の剝土量及採炭量を示せば左の如し

種 別	第一 露天掘	第二 露天掘	計
昭和元年度末累計剝離面積	二四四、〇四〇 ^{m2}	八〇二、五〇〇 ^{m2}	一、〇四六、五四七 ^{m2}
開坑以來元年度迄累計剝土量	二、一八九、三二九	一〇、〇〇八、五二〇 ^{m3}	一一、一九七、八四九 ^{m3}
開坑以來元年度迄累計剝岩量	一、二二四、〇三四	五三三、九四八	一、六五六、九八二
開坑以來元年度迄累計採砂量	一、七二六、六二三	一〇、八九五、三三七	一二、六二一、九六〇
開坑以來元年度迄累計採掘量	五、〇三九、九八六	二一、四三六、八〇五	二六、四七六、七九一

尙昭和元年度末現在に於ける採掘機械左の如し

剝 離 機 器	五	臺
蒸気エキスカベーター	一	臺
一五〇B 蒸気シヨベル	一	臺
一〇三C 電氣シヨベル	一	臺
四五C 蒸気シヨベル	二	臺
採 炭 機 器	一	臺
三〇B 電氣シヨベル	一	臺
五〇B 同	二	臺

運 搬 露天掘に於ける運搬設備は剝土及剝岩作業終了後に於ては坑内掘の夫れに比し遙に簡易にして且採掘物を迅速且多量に坑外に

搬出することを得るものなり露天掘坑内各切場に於て採掘せる石炭は半噸入の炭車に積込み坑底に百二十分の一の勾配を有する輕便軌條により各卸下迄手押しを以て運搬し茲に十數函乃至二十數函の炭車を一連に聯結して積込棧橋上迄捲揚げ本線石炭貨車に積込をなすものとす

第一露天掘は既に大正十一年三月以來採掘を中止せるが作業當時に於ける運搬設備の概略を述べんに開坑當初假設備として露天掘北側に三條の卸を設け第一及第二卸に百馬力電氣捲を第三卸には三百馬力の電氣捲を据付け運轉せり

大正六年に至り在來の卸の内第一卸を第五卸と改稱し第二卸を廢止して第三卸の東西兩側に第四及第二卸を設け新第二卸の西側に第一卸を新設し各卸平行して其間隔を三十尺となせり

同年九月に至り石炭需要激増の趨勢に應じ出炭の増加を計畫し第五卸の東側三十尺の距離に第六卸を新設せり此等六條の卸の内第一乃至第四卸は主として揚炭に用ひ第五乃至第六卸は主として上層油頁岩を捲揚ぐるに用ひたり此の結果三百馬力捲三臺を増加し積込棧橋及粗炭貯炭場との距離を短縮し運搬力を増大し設備の充實に努めたるも其後剝土層漸く深く採炭狀況稍不良なるに至り採炭を中止して一切の設備を擧げて經營上最も有利なる第二露天掘に移轉せり

第二露天掘は大正十年度に入り剝離作業大に發展し剝土面積の擴大するに伴ひ土砂運搬並捨場作業に多忙を來たせり茲に於て當時使用中の機關車七臺にエヤーポンプ及レザーパーの増設をなし運搬能率の増進を圖り乘砂機としてアンローダーエンチン、スプレッダーカー等を完備せしめたり尙大正十一年一月米國製キルボルンダンブカー四十輛を新に購入使用し其成績顯著なるものありき同年度に於ける運搬設備中の主なるものは機關車D型十臺、E型四臺、外にK型一臺を臨時用となし貨車はダンブカー百五臺、フラットカー八十八臺何れも結水期を除きては常に殆ど其全部を運轉せるが十二年六月更に大山坑より木製炭車四十輛、龍風坑より木製ダンブカー二十一輛を、十一月大山坑より輕便軌條一萬三千六百十米を讓受け使用せり

大正十年五月土砂捨場線路として古城子部落の南方より第一露天掘西方を迂回し計軍屯方面を経て遠く大官屯、小官屯方面に至る線路を敷設し同年七月より運轉を開始せり線路延長六千四百米にして運搬せる土砂は撫順線古城子河橋梁附近より大官屯を経て永安橋に至る間即ち新撫順線の地築工事に利用し併せて永安橋新設停車場構内の埋立工事を爲し十一月之を終り其の後は計軍屯一帯を土砂捨場となした

第二露天掘南方捨場線路は元來二十尺内外の高さを有し水平線路を敷設し捨土を行ひ後改めて最高三十五尺の土砂捨場となし大官屯方面捨場線路に對し全然獨立せる運轉系統を保たしめたり

十二年度に入りて露天掘採掘面は急速に西方に向つて擴大せられ捨場一設備に不足を訴ふるに至りしを以て第一露天掘より三百馬力機を移轉し之を第四捲となし同年四月より運轉を開始し更に第一露天掘運轉休止中のもの一機を移して第五捲を設置せり

同年十二月古城子河右岸に貯炭場を新設し積込ヤードに缺車中は石炭をダンブカーに積込みて此處に運搬貯炭す斯くて從來缺車中捲揚機の運轉を中止して空車の入構を待合せたる作業時間の空費を省き大に運搬上の圓滑を得るに至れり第二露天掘の東方に掘進せらるゝに及び積込ヤードの東端空車押入線路移動の必要起り新線路修築の爲ロコモチブトレーンを以て掘鑿作業を行ひしも機の構造並操作法に缺陷ありて作業後幾何ならずして本機の使用を中止せり

露天掘東方舊西堅坑方面は粘土地質にして剝土作業と共に貨車積作業にも大に困難を嘗め且最高五十尺の勾配地にして時に山崩を生じ貨車運用上の危険少なからざるものありたり

十四年度に於て剝離運搬用としてH型機關車六輛を鐵道部より借入れ從來所有のD型十輛E型四輛合計二十輛を用ひ捨場に行ひたる外エンドレス車道の築堤のため殊に良質の砂を用ひ露天掘坑外南側に於て作業し遂に延長一千三百米高十五米の長堤を築造せり

昭和元年度に入り運炭装置に大變化を來たせり即ち炭車は從來の木製半噸炭車を鐵製三噸炭車に改め二呎ゲージを九百ミリゲージとなし主として十二封度レールを使用せるものを三十封度レールとなし三百馬力電氣捲機六臺を以て引揚げたるを四臺の三百馬力電氣エンドレスに改めたり一臺一日十六時間運轉にて四千三百二十噸の原炭捲揚の能力を有し合せて一萬七千二百八十噸の能力を有す前記四臺の坑内エンドレスにて捲揚げたる炭車は選炭場の南側に添ひて東西に走れる一臺のエンドレスを以て選炭場に集中する組織となせり

昭和元年度末運搬設備の概況左の如し

線路延長	廣軌道	敷設現在	九四、三九一米
同	狹軌道	同	五〇、四七九米

運搬貨車數及運轉成績 (元年度初日現在ノ数)

種別	所有數	運轉日數	使用延車數	使用延回數
エヤダンプカー	1011	373	41,488	1,333,581
フラットカー	88	295	10,594	1,276,000
木製炭車(ダンプカー)	1,041	370	45,700	1,380,842
木製炭車	333	252	9,482	622,892

機關車所有數 一四 借用 六 小型所有 二

發破 露天掘の剝土、剝岩、採炭、凍結土砂の採掘は主として發破作業に依るものとす發破孔は當初は突鑿のみを用ひて穿孔したるも大正五年五月手働式試錐機を試用し同年八月よりはキーストーン穿孔機及スタードリルを使用せりキーストーン穿孔機は後専ら剝岩作業に使用しつゝあり

突鑿の能率は華工三名にて一日に深さ十一尺の發破孔二個、ハンドボーリングは華工六名にて深さ十一尺の發破孔二個、スタードリル及キーストンドリルは共に六十尺を穿鑿することを得突鑿にて作れる發破孔は細小にして多量の火薬を裝填すること能はざるを以て先づ〇・五乃至〇・二八封度のチエリグナイトを裝入し少量の砂を以て栓塞したる後電氣雷管を用ひて孔底を爆破擴大せしめ後適宜分量の火薬を裝填す導火は普通の導火線にては途中往々燃焼中絶することあり且燃焼中絶せるものと緩漫に燃焼するものとの鑑別困難なるに依り當坑にては小木片に二十番銅線二本を纏ひ之を三十番銅線にて聯結して黑色火薬の粉末と共に小囊中に包入せるものを電氣雷管に代用することゝせり出水の虞れある發破孔には徑四吋長さ二尺乃至二尺五寸の紙製圓筒に碎末とせる火薬を裝入し之に防水の爲濃厚なるコールタールを塗布せるものを使用す然れども此方法も成積充分なるを得ざりしかば大正十四年度以降は鹽脂藥を製造し包裝藥に代へて使用せしに好結果にして穿孔費及發破費の節約多大なるものあり

發破用の火薬はチエリグナイトを使用せしが大正四年十月試験の結果黑色火薬の成績良好なるを認め以來大なる發破を行ふには同火薬を

用ふることにせり而してチエリグナイト發破に使用せる空氣壓搾機は黑色火薬使用後に於て其必要を減じたるを以て五年十一月之を撤去し發電所に送致せり

火薬は最初目黒陸軍工廠製造のものを使用せしが漸次火薬の需要増加し經費多額に上れるにより自給自足の方針を立て大正六年五月當坑に於て火薬製造所の設置に着手し同年八月工場建築を竣工せり而して其製造能力需要量に達せざる時は目黒製造のものを使用し後滿洲鑛山藥製造會社設立せらるゝに及び同社製造のものを代用せり

黑色火薬の使用法はスプリング法により火薬特有の效力を發揮せしむべき研究を遂げ實施の結果相當の成績を收め得たり

十一年十二月十六日俄然火薬製造所火災に罹り一箇月餘に亙り同所の作業を停止するに至り其間専ら前記會社製火薬を代用せるも成績不良にして少なからず出炭額に影響を與へたり

火薬工場の所管は大正九年以降工業課に轉ぜしも十二年八月以來再び當坑の所管に復歸し將來の大需要に對し供給に遺憾ならしめんとを期せり而して従來人力を以て運轉せられつゝありし造粒機は需要増加に伴ひ製造能率の増進を圖る爲造粒室及造粒機の改造を行ひ同年七月より人力を動力機に代へたるも工場規模狭小にして大量生産に適せざる爲千山臺西方舊砂捨場の凹地を利用して新工場の建設に着手し同年十一月中旬乾燥室、造粒室、三味混合室、材料調査室、炭化物室の五棟及炭化爐一基の築造を了れり内部諸機械は當坑機械工場製作品を使用せり

十四年度に於て炭化爐一基及黑色火薬溜置場一棟を増設せり

昭和元年度に於ては鹽脂藥の製造裝置完成せり即ち鹽素酸曹達製造室、焚燒室、粉碎室、鹽脂藥混和室、包裝室及溜置場を落成し年度末に於ては鹽素酸曹達の製造に著手せり

昭和元年度に於ける火薬製造及使用高左の如し

種別	一日製造高	一日使用高
黑色火薬	二、三四七噸	一、九〇八噸
點火藥	六六六噸	六二一噸

排水 第一露天掘附近の地質は沖積層に屬し上部十尺の赤土を除き下部三十尺は砂利層なるが故に此砂利層を通じて渾河及古城子河の兩河底より多量の湧水あるべしとの豫想の下に開坑せられたるも事實は然らずして一分時百五十五立方呎の湧水を見たるは開坑の當初のみにして露天掘の擴張に従ひ却て漸次減少せり而して此砂利層よりの湧水を坑底に流下せざらしむる爲め第三紀層の上面に貯水池を掘鑿せり炭層及油頁岩層よりの湧水は一時坑底に集めて再び之を前記貯水池に引揚げ砂層湧水と共に坑外に排水するものとす

第二露天掘の排水状況は同坑内は千金寨坑西堅坑の舊坑道諸處に露開せるを利用し坑内の湧水は悉く其等舊坑道より西堅坑底に流下せしめ露天掘として大正九年度に至る迄特に排水唧筒の据付けを要せざりしも採掘面の擴大と共に追々排水設備の必要に迫られ大正十年七月、十立方呎唧筒一臺を坑内要所に据付けて時々少量の排水を行ひしが露天掘の深部に掘下さるゝに従ひ排水唧筒の異動もこれに伴ひ十三年度に入り西端炭面に六十立方呎唧筒二臺及五十立方呎唧筒二臺を据付けたり第二露天掘水害の記録として残すべきものは大正九年七月三十一日暴雨の爲古城子河氾濫したることにて第二露天掘坑内を恰もナイヤガラ瀑布の如き勢を以て河水落下せしも其時間一時間半位にして減水し甚しき大事に至らざりき同年八月第二露天掘坑内への浸水を防禦する爲千金寨山腹に延長六千四百五十五米の排水溝築造を開始し同月二十八日竣工せしが更に十二年四月より七月に亙り同山腹に三線の排水溝を掘開し之より排水を導きて千金寨河に流入せしむることゝせり此第一線溝の延長一千四百六米第二線溝は一千三百二十米第三線溝は一千三百米なり昭和元年十二月に坑底七段に六十立方呎唧筒二臺を据付け炭面に在りたる六十立方呎二臺を廢止せり第一露天掘に於ては従来の三百立方呎唧筒二臺八十立方呎唧筒一臺六十立方呎唧筒一臺を其儘に置き坑底増水の時及貯炭發火消火用に使用せり

昭和元年度排水量左の如し

總排水量 一、二三七、五三四立方分
一分時揚水量 九八一立方分

第二露天掘附屬建物表

名	稱	種別	棟數	面積(平方米)	用途
事務所	事務所	木造	六	一九八	事務所、保衛係、檢炭係
現場	場所	同木造	八	一六六	
倉庫	場所	木造	一六	四、五四三	機關車、修理工場、鍛冶工場
上倉	庫	木造	二四	一、九五八	
華工	住宅	木造	一一	一、三一一	各港揚機
			四六	一〇、八四一	

火藥工場附屬建物

名	稱	種別	棟數	面積(平方米)	用途
事務所	場所	煉瓦造	一	九六	火藥工場事務所
工場	場所	同煉瓦造	二〇	一、七〇七	火藥工場其ノ他
炭庫	同	同	八	五三〇	
試驗	家	煉瓦造	一	四九	
上			一	六〇	

第四節 東ヶ岡採炭所

當露天掘の開始につきては大正十三年度春礦務課に於て立案し其位置は老虎臺楊柏堡兩坑間の大斷層を西の界とし東の界を老虎臺十號坑と定め作業の監督は位置の關係上老虎臺採炭所に於てするを便利とせるを以て同所の管轄として著手し老虎臺露天掘と稱せり當露天掘の區

域は炭層の厚さ平均二十四米傾斜平均三十三度東西の長さ約七百米と制限せられ可採炭量三百四十萬噸内外に過ぎざるに總剝離量七百五十萬立方米に上れり

斯かる状況に於て露天掘を營むは楊柏壑坑以西の如き炭層に於て爲すに比し著しく不利にして爲に開坑計畫の樹立に當り投資額を最小となすことを第一條件とし亦營業費も之に伴ひ最も節約を期するにあらざれば却つて坑内掘を有利となすの結果を來たすことなきを保すべからず之に反し計畫宜しきを得て斯かる條件の悪しき處に於ても尙露天掘が坑内掘に比し有利に經營され得ることを立證せんか撫順炭田に於ける露天掘の限界は最初一般に豫想せられたるよりも遙かに深く且つ東西にも擴大せらるゝものにして撫順の採炭計畫上に一大改革を齎らすに至るべし

以上の如き見解の下に種々研究を進めたる結果投資金額の最少を圖るには左の二項を必要條件とせり

- 一 剝土剝岩の捨場を平面的に展開せず立體的に累積する様計畫すること
- 二 剝離の施設と採炭の施設とを共通にすること

蓋し露天掘に於て最も大なる費用を豫算すべきは莫大なる剝土剝岩を捨つるに要する廣闊の用地、用地上に施設すべき鐵道線路、機關車、貨車、貨車積込み用ショベル、エキスカベーター等の諸機械なり然るに若し露天掘より剝掘したる土砂岩石を捲き揚げ直ちに之を背後の高地より山を作りて捨つるを得ば以上の如き多額の投資を要することなく且つ斯くの如き山を作るべき剝離の施設と採炭の施設とを別々に設けずこれを共通となすを得ば營業費の増加を防ぎ得るのみならず二重に事業費に於ても亦不利を免るゝを得るなり

尙この兩施設を共通とするを有利とする理由は剝離作業の好時期は春より秋までにして此期間に多く剝離作業を行ひ採炭は後にも述ぶるが如く主として石炭の需要多き結氷期に行ふ計畫なるを以て此施設の運用が時期に依り繁閑の重複する不利なきのみならず之に従事する勞働者の移動をも防ぎ得るの利益あることなり

次に營業費の減少を圖る爲には作業能率の増進に俟つべきこと勿論にして露天掘に於ける能率増進の根本は運搬を圓滑ならしむること頁岩若くは石炭の採掘を容易ならしむること等でありとなし之が目的達成の計畫として一、運搬徑路を簡捷にし特に坑内運搬徑路の如きは移動的にして不完全なるを免れ得ざるを以て出來得る限り短縮すること二、炭田の自然状態に順應して採掘法を定め頁岩若くは石炭採掘に當

りて天然に生ぜる層理劈開面を利用することを必要とす

即ち採掘法は普通一般の露天掘に採用せらるゝ方式とは全然趣を異にせる方式を採り主として重力と天然に生ぜる層理劈開面の利用を十分ならしむるを目的とするものなり層理は南より北に急傾斜をなし劈開面は主として南北の方面にて層理を直角に切斷し居るを利用し切場を採掘するには北を背にし南に向ひて掘進する様切場の長さを東西に取ることをす

斯くすることにより火藥の効果も大となり採掘の勞力も少なく殊に石炭に於ては之を逆に即ち南より北に向ひて掘進するに比して塊炭多く且つ石炭中に硬の混入すること著しく減少するを得るなり採掘には火藥の威力を藉るの外當分の間總て人力に依ることす尙當計畫を立てるに當り試みの一つとなしたるは露天掘によりて採炭の調節をなし不利益なる貯炭の減少を期することなり坑内掘に於て充填用の採砂作業、運砂及切場等の關係によりて石炭需要量の相異なる各季節に應じ採炭を調節すること困難なるが故に貯炭は避け難きも露天掘にありては計畫の如何により需要の多寡に應じて採掘するを得可及的貯炭の減少を計るを得るなり尙剝離より出でたる頁岩を破碎して坑内の充填材料たらしめんと目的ありて之を計畫の中に考慮せり

一箇年の出炭額見當は三十萬噸にして約十一箇年の壽命にて終了する豫定なりとす

十三年四月二十七日炭田背後の山上に捲揚機一臺の假据付をなし六月三日竣成運轉を開始したるが時恰も當露天掘の北方永安臺高地の東方に位する新設貯炭場及機械工場敷地の土盛に對して粘土の必要を感じ居る際なりしを以て當露天掘の剝土を運びて之に充つるは一舉兩得の策なりとなし南方を土木課の直營とし北方を土木課監督の下に吉川組をして請負はしめ剝離作業に著手せり

十三年度中に於ける剝離作業は僅に七十五馬力捲一臺を使用せるのみなりしを以て直營に於て五萬立方米、吉川組の手により十萬立方米を剝離せしに過ぎず此間露頭部より極めて粗悪なる粉炭五百噸を出せるのみ

同年十二月に入り結氷の爲剝土作業不可能となりしを以て同月三日限り作業全部を停止し專任従事員若干名は老虎臺採炭所に復歸せり大正十四年二月當露天掘の專任者任命せられ翌年度作業開始の準備として計畫の研究並に專屬従事員の選定を行ふと共に老虎臺採炭所より分離して鑛務課所管となり東露天掘と改稱し十五年四月東ヶ岡採炭所を設立し獨立の經營を行ふこととなれり斯くて大正十五年十二月一日より營業出炭を開始したるが採炭成績良好にして豫定出炭高の二倍に達せり

昭和二年三月分出炭 六三、四一〇噸
 同 出炭豫定 三〇、〇〇〇噸
 比較増 三三、四一〇噸

運搬 最も緊要なる運搬の円滑を圖るため移動式にして不完全なるを免れ得ざる坑内運搬徑路を短縮する方針を以て全坑内を二區に劃分し各區の略中央に捲揚傾斜軌道を敷設し各區獨立の運搬をなし得る設計を樹てたり斯くすることにより東西直線にて約七百米の運搬徑路は四分せられたり而して切羽より傾斜軌道の下までの運搬方法は頁岩に於ては重力を利用し十五度の傾斜に鐵製のトラフを簡易に敷設し之に水を導きて頁岩を水流輸送となし石炭に於ては當分の間適度の勾配に敷設せる軌條に鐵製ダンブカーを用ひ人力により運搬す但し石炭の運搬並に冬季に於ける頁岩の運搬に對しては目下トラック、スクリーパー、シエーキング、コンヴェヤー等に就き利害得失を研究しつゝあり既に述べたる如く剝掘せる土砂岩石を機關車貨車によりて遠く運ぶは極めて不利なりとなし背後の山を利用し之に捲揚機を据付けて捲揚げ山上更に山を作りつゝ捨て行かんとする計畫なりとす捲揚機は十四年度に於て三百馬力を東西兩部に各一臺宛計二臺を据付け昭和元年度には百五十馬力一臺宛を三百馬力の補助捲揚機として其傍に並行に据付け即ち捲揚機は三百馬力二臺、百五十馬力二臺、計四臺を据付ける計畫とし十四年度に於ては先づ百五十馬力一臺、七十五馬力三臺の假据付をなしたり即ち東部に七十五馬力二臺、西部に百五十馬力一臺及七十五馬力一臺と前年度に假据付をなせる中部の七十五馬力二臺、合計六臺を以て作業を開始せり

昭和元年度に入りて中部捲揚軌條並に東西の假捲揚機を撤廢し新に完成したる東西二箇所の捲揚傾斜本棧橋に依り捲揚げを開始せり坑内にて採掘せられたる石炭は本棧橋上にて棧橋中段にある選炭機のホツパーに覆し土砂岩石は選炭場屋上の本棧橋を通過して排棄場に運ばるゝものにして選炭機は昭和元年十二月より運轉を開始し良好なる成績を示せり

捲揚機運轉成績

種別	運轉日數	捲回數	捲函數	平均	
				捲回數	捲函數
東右 七五馬力	一、二五〇	一三三、七三三	一四三、九八一	八六、五	五五、三

東中 七五馬力	二五六	二二二、四八八	一五〇、四七三	九一、〇	五九、四
東右 一五〇馬力	二七九	二四〇、五一一	二六八、五七五	八六、〇	九九、四
東左 三〇〇馬力	七六	九〇、二四	一〇八、一五二	一一、〇	一四、三
西右 七五馬力	二九九	二八、五八四	一八〇、六〇八	九六、〇	六〇、五
西左 一五〇馬力	三六三	四〇〇、三三二	四〇〇、三三三	一一、〇	一一、二
計	一、四四三	一四八、五九二	一、二五二、三四二	九六、〇	八二、五

車輛使用成績

木製ダンブカー	鐵製ダンブカー	使用延車數	五三、三二〇七	六六、六九〇
四〇四	二一〇	同		

土砂排棄作業 前項に於て述べたる如く土砂は山を成して排棄せらるゝを以て捲揚機がロープの方向の中心に在る時は捨土の中に埋没せらるゝことゝなるを以てロープの方向と直角の方向に捲揚を設け矢弦は枠を組み之に取付け枠は捨土中に埋没し行くことゝせり其結果は豫想せし程の困難なく一立方米の排棄費金約八錢にて足れり但し土工用の臺車を釣函の儘作業するを以て函廻りに影響すること頗る大なるもダンブカーを以てせば甚だ容易にして函廻りにも影響せず恐らく一立方米當り金四錢前後の費用を以て排棄し得べし此試験終了後捨土は主として山の背面に排棄せり

東西二箇所の捲揚本棧橋の竣工に依り著々計畫せる排棄法を實行し從來七度の緩傾斜なりし捲揚傾斜軌道を次第に上げ現在は十一度に達す割土は初め捲機及假棧橋竣工迄手押により西方の窪地に捨てたるが右竣工後は傾斜軌道の引き上げを終りて以來山の背面に排棄せり水流し試験は西部右捲機のスキップより排出したる粘土に對し之を試みたるに成績良好なり水は老虎臺採炭所の注砂用と兼用の設計にて同所背後の山頂に築造せる容積十萬立方尺の水溜より導くことゝし十四年度中に竣成せり
 坑内の採掘次第に深度を加へ元老虎臺舊坑として久しき以前に發火し其儘密閉して未だ消火せざる舊坑に貫通し十五年一月以降四回に互り東部及中部採掘場に噴煙を認めたるが注水土砂充填を以て之を鎮火せしむることを得たり

選炭場及積込ヤード割離の施設と探炭の施設とは之を共通とする目的なるを以て捲揚場は剝掘せる土砂岩石も石炭と等しく之を捲き揚げ石炭は捲揚傾斜軌道の中途なる捲橋の上に於てホツパーに覆へし捲橋中段の選炭機にて選炭後其下に引き込みたる貨車に積み下す様設計せり即ち捲橋は剝土粒に石炭の捲揚捲橋ともなり又選炭場にも兼用し東西兩捲橋の下に選炭場及積込ヤード各二箇所を有するなり

主要 附 屬 建 物 表

(昭和元年度末現在)

名 稱	種 別	棟 數	面 積(平方米)	用 途
事 務 所	木 造	一	四三〇	採炭所、現場
工 場	同	四	六三八	修理工場、木工場二、鑄造工場
倉 庫	同	二	一四一	煙房用、華工社宅、煙房用
倉 庫	同	一	一九四	用度倉庫
倉 庫	同	五	三〇六	西部捲二、東部捲三
倉 庫	同	七	一、九一〇	北華工社宅四、南華工社宅一、雜役華工社宅二
華 工 社 宅	煉 瓦 造	一	二一一	同 附近
同 賣 店	木 造	一	一三一	配電所
同 浴 場	同	一	一三一	同
選 炭 場	同	二	四〇五	同 附屬捲橋延長一三五・八九米

第五節 大山採炭所

一 大山本坑

當坑は大正六年一月十一日の第二回變災以來水没坑道の揚水及破損坑道の修復に全力を盡し大正七年四月に至り東西下三片の修築成り六月下四片を乾水せしに同片捲立口は坑道の崩潰甚だしく温度上昇し來りて憂慮すべき状態にありしを以て七月より充填に着手し九月五片を

乾水し亦破損坑道の整理に苦心を嘗め十月同片の整理を終り十二月東西六片を乾水せしめたり大正八年度に入り下部水没片斃乾水復舊作業は下七片に及びたるも尙火氣を有し且又瓦斯の噴出多量なるため以上の揚水を中止し上部舊坑道の完全なる修理を爲す方針に一轉し絶對必要なる坑道を除きて其他を充填することとし同年度末舊南大馬路東零片運搬坑道を充填し終れり

大正六年十月中旬變災復舊工事一段落を告ぐるに及び替下坑道の掘進を開始せるが變災の爲南北大馬路の維持困難となりたるを以て旁々掘進を急ぎ七年十二月舊南大馬路横斷工事を施行し八年七月に至り一千二百七十二米にして全通し十二月捲機の据付を終り茲に全く完成し此間又上風坑昇中馬路、下風坑昇相次で竣工し運搬を全部替下エンドレス坑道に移すと共に舊大馬路高落坑道を充填せり要するに變災のため東西本昇、本卸及堅坑底の主要坑道及下三片排氣坑道等何れも天磐崩落して永き使用に堪えざるを以て換ふるに此等坑道を全部下層炭若くは下替玄武岩中に掘鑿し運搬及通氣用に供する永久施設となしたるものなり是より先七年六月千金塞堅坑の南方肩部に當る東堅坑東十三片十一卸の地區を千金塞坑より當坑に譲受け之に既存の注砂堅坑に運搬設備を施したるものを大山南坑と名づけ本坑の管理に移せり

採炭作業は變災のため一時之を中止したるが復舊作業の進捗に伴ひ六月初旬に至り漸く採炭を開始し六年度末には三片迄の排水を終り一日約八百噸の出炭を見るに至れり整理の進行と共に出炭漸次舊狀に復し堅坑底替下坑道の完成以來往々一日出炭二千噸を突破するの盛況を示し九年度に至り採炭切羽の増加したるは西零片及西下二片、四片等西部に延長部を新設したる結果にして北部は殊に炭層厚く水平に百八十米乃至三百三米に及びり十年度に至り採炭切羽の片斃數に於ては前年度と殆ど變化なく本坑東下二片及四片、六片は略採炭を終了し尙安全炭柱附近も舊坑多きを以て一時採炭を中止し主要坑道を殘して他は全部充填することとし西下四片、六片の第一卸にて作業せる箇所も亦同様に全部を充填し將來出炭を要する時期を見て再び掘進することとし十一年度に於て新採炭法長壁拂を數箇所に就きて試みたるも七片以下の水没箇所更に充填より生ずる水を注入するの餘地なく且本坑の如き上部の舊坑に近き片斃に於ては傾斜拂法の好果少なきを以て之を中止し水平階段掘を試み下段の採掘跡を一時沈澱池に使用し東西零片及東西六片の沈澱池に遺過して充填を容易にし且切羽を豊富にすることとし十二年度より之を實行し時に消長は免がれざりしも一般に作業順調にして出炭増加し十三年度に於ても水平拂のみにて採炭切羽の湊合により専ら能率の増大に努力せり

大正十四年度に入り研究の結果傾斜長壁拂法は當坑の状態に於ても亦有利なるを認め從來の水平拂を改めて傾斜長壁拂を採用し昭和元年

度に入り略其設備を完成し且零片東西に各一個の本身を増設し切羽の集中を計り出炭成績良好なり

大山本坑内主要坑道表

(昭和元年度末)

名	稱	用途	延長(米)	名	稱	用途	延長(米)
坑底	エンドレス坑道	運搬及入氣	一五八八	西	第一本昇	同	一七〇
東	第一本昇	運搬	二六四	西	第二本昇	同	一九八
東	第二本昇	運搬及入氣	二九五	西	第一本昇人道昇	人道、入氣	二四二
東	本	卸	一八〇	西	第一昇人道昇	同	一四四
東	人	道、入氣	一八五	坑底	附近主要坑道	入排氣運搬機械室	一、三三九
西	第一本昇	運搬及入氣	二八一	東	下三片排氣坑道	排	五七三
西	第二本昇	同	二二六	西	下三片排氣坑道	同	一、〇二七

排水 坑内湧水は大正三年度以降土砂充填用水及千金峯坑湧水の一部と共に坑内貯水池に溜溜し之より坑外に排水せしが大正六年一月大變災のため水没に決し一時坑底上二十三米迄數回水面を上下せしめて漸く鎮火の上同年六月より排水を始めたり當時坑内排水には電力唧筒タービン式五臺、坑外には同式二臺を使用せり八年度に入り水没箇所は排水零片以下九片に達したるも頗々たる崩壊又は乾水跡よりの瓦斯發生等の事故ありて作業甚だ困難を極め保安上已むを得ず之を中止し七片以下全然水没の儘に存置するに決せり爾來南坑及本坑東西上部の充填餘水は零片沈澱池に導き又東西下部の充填餘水は下六片の沈澱池にて淨水され東部は六十立方呎唧筒二臺、西部は六十立方呎唧筒一臺を以て共に零片に押し上げ上部の水と共に九百馬力二百四十立方呎のタービン唧筒を以て直接上風坑を経て十吋鐵管にて坑外に排出することゝせり出炭額の増加に伴ひ切羽充填用水も増大し排水能力に不足を訴ふるに至れるため昭和元年九月零方西一卸に唧筒一臺を据付け南坑東下六片唧筒座に揚水しそれより坑外に排水する一線を増加せり昭和元年度末に於ける全時間一分時排水量は三千四百七十八立方米にして出炭十噸に對し三・二〇噸の排水量とす

通氣 大正六年一月の大變災による坑内諸設備の大被害はこれが復舊に多大の手續を要し坑内到处る危険なる状態を呈せしも八月頃漸く其大體の整理を終り通氣状態も良好に復したり九月一月には上風坑に通ずる舊南大馬路横斷工事完成の爲變災以來排氣坑となれる零片主要坑道の通氣を轉換して入氣坑となすを得たり九年度十一月より年度末に至る冬季には入氣堅坑にてヒーターパイプに蒸氣を通じ六月より九月迄の夏季には噴霧器にて撒水し入氣湿度を調節し各切羽は採炭華工をして撒水せしめ乾燥せる坑道には岩粉を撒布し尙通氣坑道の主要部にも岩粉棚を設置し炭塵の爆發に備ふる等通氣と相俟て専ら保安に努めたり南坑に於ては主として窯溝兒斜坑より入氣し之をして全部本坑七片に下りて東上四片以上四三片以上の通氣を掌らしめ鐵管卸より上風坑に來り本坑入氣堅坑よりの入氣は堅坑底より東西に別れ東部は東上二片より下六片に及び下三片風道より排氣堅坑底に入り西部は上二片より下六片迄の通氣を掌り下三片風道より排氣堅坑に入り共に扇風機に依りて坑外に排出す

斯くて十年度及十一年度は概して異状なく経過せしも十二年度に入り出炭増加の必要上地山惡しき部分迄採掘を開始したる爲一般通氣上故障多く自然發火及瓦斯發生等事故増加の傾向を生じたり十三年度に入り之が順調を圖らん爲四、五月中に下風坑暖房管全部を停止し同時に坑底一片に噴霧器撒水を開始し湿度下降するや之を中止し十月に至り更に暖房管全部に通熱し尙七月東下四片東二段二卸掘進箇所七千立方呎、八月西上七片東下卸口に二千立方呎の局部扇風機を設置したるも十一月之を撤去し十四年一月西上六片二卸掘下に局部扇風機(能力七百立方呎)を設置せり

十四年度に入り上風坑三片舊排氣大風道を廢棄充填し新に替下上部排氣風道を切替へたり而して坑内は傾斜拂略完了を告げ切羽の集中をなし片磐坑道延長を著しく減少せしめ且密閉箇所の減少により通氣状態頗る順調となれり

一分時入氣量四千六百七十二立方米同排氣量五千二百七十立方米なり

運搬 大正六年一月の變災以來は坑内整理上掘進にも亦種々の變化を來たし替下坑道に進展せしが九年度に至り殆んど完成せるを以て運搬を全部左の如く變更せり

イ 本坑西上部運搬系統變更

前年度の西部上部の運搬系統は西本昇七片に七十五馬力捲を有し其運卸として西上五片に三十馬力捲を据付け居りしが碧下本昇七十五馬力捲据付完了せしを以て六月三十馬力を撤去し十月本昇七十五馬力捲をも撤去す次で六月西上三片に十五馬力十一片五馬力を据付けて西本昇二、三片の一段石炭を西碧下本昇二、三片に捲揚げ西碧下本昇十五馬力に依つて零片に運搬す

□ 西下部系統變更

從來主要斜坑は十五半卸に五十馬力捲を四卸に十五馬力を有せしも十八半卸と四半卸とに於て之に代るべき坑道完成後七十五馬力捲を東本昇より撤去し四半卸に据付け東上二片より百五十馬力を撤去し十八半卸に据付け十二月末より運搬を開始せり

ハ 東 上 部

東上二片に百五十馬力捲を据付け一片及零片以下の運炭をなせしが此坑道は夥しき地壓のため將來長き使用に堪えざるに至りしを以て之に代る碧下東本卸の完成せるため百馬力捲を据付けて下部一圓の運搬を開始し同時に上二片の百五十馬力捲を撤去せり
零片に集りたる東部、西部の炭は碧下エンドレスによりて坑底に運搬す

ニ 南 坑

碧下卸全部貫通し第二斜坑百五十馬力捲の能力坑内全部に及ぶに至りしが大山卸三十馬力捲を撤廢し下五片より上全部及斜七、九、十三の各片西部及大山卸十五、十七片の出炭を此捲機によりて十二片に搬出し一片三十馬力捲は斜東七、九、十三、十五の各片出炭を同じく十二片に搬出す斯くして十二片に集りし出炭全部は入及馬によりて堅坑に搬出す

爾來運搬系統に大なる變化なく捲揚機の移動と補強工事等にて十三年度には本坑下風坑ゲージにバランシングロープを、上風坑底にスプイングデツキを取付け又エンドレス坑道は實空兩線間の距離を一米に擴め之を人道となせり十五年十月本坑西上七片に西第二本昇七十五馬力捲を、同年十一月東上五片に東第一昇七十五馬力捲を各一臺宛増設し零片以上各切羽よりの増加せる出炭を順調に處理することとせり運

道敷設延長坑内六萬七千九百九十八米坑外一萬九千四百四十八米大山全坑使用炭車總數二千二百九臺を有す

注 砂 充 填

大正七年四月下旬窪溝兒斜坑東方山地約百二十七米の地點に第二注砂場を設置することとなり直に之が開鑿に着手せり而して從來の注砂場は之を第一注砂場と改稱することとし又之が瀝砂用水は第一注砂場の東南丘上に容積五千立方メートルを有する貯水池を新設し前記坑内注砂場諸設備の完成と共に八年十一月丘上より鐵管を通して兩注砂場に給水を開始せしが一時寒氣の爲め凍結して用をなさざりしことある等多少の困難に遭遇せしも之が改築と共に爾後坑内よりの排水を利用し再び之を循環的に送砂用に供し以來格別の故障を見ることなく作業を爲し得るに至れり

昭和二年三月分の切羽充填砂量は五萬八千三百三十三立方メートルなり

主要 附 屬 建 物 表

名	稱	種 別	棟 數	面 積 (平方メートル)	用 途
事 務 所	煉 瓦 造	五	一、二五七	採炭所、現場三、著到室	
工 場	煉 瓦 造 及 木 造	七	一、五〇六	機械、鶴巻二、木工場、炭車修理二、製糶場	
汽 車 庫	煉 瓦 造 及 木 造	一	七三〇		
倉 庫	煉 瓦 造 及 木 造	四	五五五	雜品用、假裝物用、セメント用	
上 家 同	煉 瓦 造 及 木 造	七	五二七	上下風坑二、扇風機、排送機、エコノマイザ、假送機二	
安 全 燈 室	煉 瓦 造	二	四〇六	安全燈室及華工溜場、安全燈受渡室	
火 藥 取 扱 所	煉 瓦 造	二	二七	取扱所、小出所	
診 療 所	煉 瓦 造	一	一五七		
社 會 館	煉 瓦 造	二	四、八三七	甲種三棟五戸、乙種二棟八戸、丙種三棟一四戸、戊種一棟六九戸	
俱 樂 部	煉 瓦 造	一	二〇八		
合 宿 棟	煉 瓦 造	二	八八一	職員合宿二階建、健員合宿平家	

浴場	共同浴場	六一〇
華工社宅	六八三三	一一七
同附屬建物	六〇六	六八三三
	一、二七六	浴場三、食堂、炊事場、賣店

二 大 山 南 坑

當坑區域は舊千金寨坑區域を襲へるものなるが現在古城子露天掘區域に入り大正七年六月東堅坑區域は東十三片一卸を界として以東を大山坑に併せ九年七月更に其餘の全部を大山坑管下に譲り十四年四月以來讓渡區域と從來の大山坑區の一部を加へて之を大山南坑と改稱せり大正八年二月圓形堅坑七片盤高落箇所に自然發火を起したるが當時當坑には未だ瀧砂充填の設備無かりしを以て一時全部の採炭を止め極力消火作業に努め煉瓦密閉三十八箇所を築き又西堅坑との貫通坑道なる十二片、十一片、九片、八片、二十四片へは夫々張切及目塗作業を施し災禍を小區域に止むるを得たり

當時坑内の廣袤東西二千四百二十四米北方最深部は地表より三百八十三米に達し漸く地山の施緩を來たせるを以て高落及自然發火等の瀧發を憂ひ大正八年三月末より東堅坑内十六片以下の坑道掘進を中止し之を水浸保存することとし西堅坑は八月より二十六片以下坑道掘進を中止し一時之を水浸せしめたるも其後復舊作業進捗し昭和元年度末十一片迄揚水し充填に努めつゝあり

當坑の採炭状況を見るに大正五、六年度に於ける採炭は平均一日千二百噸乃至千八百噸にして依然柱式採炭法に依りたるも同法は最早當坑にては其進展は極限に達し漸次出炭減退すべきを以て填砂採掘の準備として六年九月より其設備に著手せり八年度に至りて前年度來實施せる坑内舊坑道充填其他保安上の理由に基く大整理の爲出炭減少せしめ其後設備の整頓と共に漸次恢復せり

九年度に於ては既に前年度東部舊坑の充填整理略完成せしを以て東十三片、十一片、九片に於ける炭柱割、坑道掘進を七月より漸次中止し専ら上部に於て充填採掘を行へり十年一月より從來四區に分たれたる採炭區域を三區となせしが第二區圓形卸西部坑道は地山弛み始めたるを以て漸次第一區、第二區の拂切羽を減少し舊坑の充填整理に著手せり又地下百五十一米以上の採炭を中止する方針にて専ら下方に於ける充填採掘を繼續稼行せしが西部は從來再び分離して古城子採炭所第二露天掘區域に併せらるべき豫定となれるを以て第三區の殘柱式と

共に十一年度限にて該作業を休止せり而して十二年以降十三年度の作業は柱拂掘進と共に舊坑道充填整理を主として採炭を局限し他日露天掘の進展するに及びても陥落其他の災害を生ぜしめざらんことを期せり

大正十四年度に入り大露天掘計畫に従ひ上部の炭層は露天掘のため保留することとなりたるを以て東部上三片西部上六片以上の採炭を中止せり尙昭和元年度末に於ては零片より上部の採炭略終了し爾來下部に移動しつゝあり

又大正十四年度以來傾斜長壁拂法を實施し大山本坑と共に著々其進展を見つゝあり

大 山 南 坑 内 主 要 坑 道 表

(昭和元年度末現在)

名 稱	用 途	延 長 (米)	名 稱	用 途	延 長 (米)
東 人 卸 道 專 用	東 人 卸 道 專 用	五〇〇	東 第 一 本 卸 道	運 搬	五六六
圓 形 堅 坑 通 氣		四九	東 第 二 本 卸 道		二三五
東 入 氣 卸 同		五六	西 第 一 本 卸 道		一五六
排 氣 卸 同		二四三	西 第 二 本 卸 道		六二四
西 第 二 本 卸 添 卸 同		三八六	坑 内 エ ン ド レ ス		九九四
第 二 注 砂 卸 同	注 砂 鐵 管 卸	四五五	十 六 號 坑 西 添 卸 同		二〇二
第 三 注 砂 卸 同		五九四			一九六

排 水

大正七年二月當坑に於ても瀧砂充填法の實施を見るに至り大山注砂場より注入を開始し尙一方には坑内卸部保安の爲十八片以下を溜水することとなり八年七月圓形十五片に新卸筒を設置し此處に西堅坑二十四片に据付ありし百二十立方呎電氣卸筒を移設せり九年度に於ては東部の充填發展し來るに及び西二十四片二百立方呎卸筒の内一臺を東十五片に移轉し殘一臺は引續き排水に使用せしが十年度末に至り之を廢し西部の湧水は悉く東部に導き圓形十五片卸筒を以て揚水することとなり十一年度には西坑の坑道採掘中止の計畫に依り斜十六片以下を水浸し注砂充填より來る水を全部之に合して沈澱作用を行はしめ十二年度に入りて坑内水浸箇所の復舊作業を急ぎ十五片主

要排水唧筒の据付をなせし結果排水能力を倍加して一分間の排水量二立方米八に及び同年度内に於て十八片迄の排水復舊を行ふことを得たり十四年度に入り古城子露天掘の發展に伴ひ同所よりの浸透水益々増加し排水量増大せるを以て西部下二片主要唧筒座にズルザータービン唧筒一臺及東部下六片に十五年二月同種唧筒一臺を増設せり全時間一分時排水量七千二百四十立方メートル噸當り排水量七噸五なり

通 氣 當坑の如き老坑に於ては掘進中往々露清時代に於ける舊坑道又は閉塞坑道に遭遇し瓦斯中毒或は自然發火を惹起すること屢々なるが故に特に多大の注意を通氣に用うべき必要あり大正六年度以降に於ける當坑の通氣狀況は十一年度に至るまでは從來と大差なく該年度には東堅坑外に十萬立方呎西堅坑外に六萬立方呎の主要扇風機を運轉せしが十一年十二月西堅坑扇風機の運轉を休止し専ら東堅坑の扇風機一臺を以て兩坑内の通氣をなし西堅坑の扇風機は後之を撤去せり十三年九月に至り十五號坑附近を全部貯炭場となしたるため假注砂坑より入氣せしめたり尙露天掘擴張により排氣堅坑を廢止する爲七月より東下三片より通氣坑道を掘進し十月に至り大山南坑を貫通せり十四年一月に至り東堅坑十萬立方呎扇風機を中止し南坑の扇風機を運轉し坑内通氣系統を變更せり即ち一部の入氣は露天掘より舊西堅坑内の坑道を通じ上五片に出て他の一部入氣は九號坑及舊排氣堅坑より入り此等區域の諸坑道を通じて上五片に出て露天掘よりの通氣に合し上三片に至り東上三片の通氣坑道よりの通氣に合し南坑の七萬立方呎扇風機に依りて排氣す

一分時入氣量千二百七十九立方メートル排氣量千九百六十立方メートルにして一人當り入氣量千二百七十五立方メートルなり

運 搬 大正七年十月西堅坑の蒸汽捲揚機を撤し西斜坑に三百馬力電氣引揚機を設置し從來堅坑を経て運搬せしものを該坑より搬出す十年三月には東堅坑の蒸汽捲揚機を撤し東斜坑に三百馬力電氣捲揚機を使用す十一年度には解氷を待つて東斜坑及十六號坑空車線の掘下げ工事を開始し八月に至り全部終了す空車の運轉狀態良好にして困押人員を減少し得たり十二年度には露天掘の擴張に伴ひ當坑地表諸設備撤廢のため西堅坑電氣三百馬力捲は十二年六月限り休止し八月之を撤去せり

十四年五月より堅坑捲揚能力を増大せしむるため舊捲揚機を撤廢し新捲揚機の据付に著手し同年十月運轉を開始す舊機は一段ゲーチ二箇積なるも新機は二段ゲーチ四箇積となれり而して既に前年度に完成せる坑内零片エンドレス坑道に依り西部の出炭を堅坑より搬出することとせり十四年十一月坑外に在りし西十六號坑捲揚機を上十二片に同年十二月西第二本卸を上十五片に移轉し東部は全部斜坑捲にて搬出することとせり

注 砂 充 填 當坑に於ける填砂施設としては坑道整理の必要上最初大正六年十月大山第一注砂場堅坑の中腹より鐵管を當坑に向け敷設すべく坑道の掘進に著手し七年二月落成して送砂を受け専ら東十四片以下の地山惡しき舊坑道を充填したり又當坑の第一注砂場は大正六年

九月東堅坑南方約百九十八米の箇所に築造工事を始め八年五月完成せり
土砂貯溜に備ふるポケット、人道、ハイドランド、トロンメル室共皆煉瓦巻にてポケット容量は百五十立方坪、トロンメル下鐵管喇叭口四本にして鐵管は凡て六吋を用ひたり

大正九年四月二十五日西斜堅坑口東南九十間の地に第二注砂場築造工事を起し十年五月附屬諸設備の煉瓦巻を完成せりポケット容量二百立坪トロンメル下鐵管喇叭口二本送砂管は六吋なり而して何れも切羽の注砂充填の傍ら不用坑道の充填整理を行ふ十一年度には第一區充填は殆んど終了し第二區舊坑充填は斜一片乃至四片、斜十一片乃至十三片の一部と西二十四片の豫定箇所を充填し十二年八月斜四片に沈澱池を完成せり十三年一月頃より採砂量不足勝にて充填不充分なるため切羽減少し従つて出炭に影響せしこと少なからず又同年度には十六片以上二十片迄の復舊箇所充填を急ぎ注砂の要求激増したるを以て注砂力増加の爲めハイドランドを改造し同時に二箇所の充填を行ふに便ならしめたり六月下旬元西堅坑境界の安全を期するため十六片二十一半以西の充填を開始し八月之を完了し十月以降十九片充填を開始し其他に高落及自然發火の恐ある危險部の充填をなしたり

坑外運砂用の鐵道線路は第一注砂場には大山線より分岐し千金峯川を渡りポケット上に至るもの延長一千百餘米にして七年八月起工、八年二月完成す第二注砂場の運砂線路は第一注砂場より分岐して延長六百九十九米六なり

貯砂用の貯水池は大正七年九月第一注砂場ポケット南の山腹に起工し同八年四月同工事終了後引續き同地西方に接し第二貯水池工事を起し同九年八月完成す容量は第一、八千五百立方メートル第二、一萬四千立方メートルにして共に東十五片唧筒よりの排水を貯溜す注水唧筒場は同貯水池及貯砂ポケットに近き北側に在りて二百立方呎の電氣タービン唧筒二臺を設置す其一は八年五月他の一は九年四月運轉を開始せるものなり
昭和元年三分充填成績左の如し

- 切羽 充填 注砂量 三三、九九七立方メートル
- 舊坑 充填 注砂量 二、二〇〇立方メートル

名	種	棟	數	面	用	途
事務所	木造		二	三一〇	現場、檢炭係	
工場	煉瓦造及木造		三	二九八	修理場、製材、木工	
安機	煉瓦造		一	一八一		
捲上機	煉瓦造及木造		六	二二七	注砂坑、ウインチ坑、南窓坑、露頭卷、扇風機一五	
各室	同		八	四二六	配水、坑口雨覆二、汽罐場、貯炭場、唧筒、貨車	
配電室	同		一	八一	捲、棧橋	
			一	三六	注砂場	

備考 南坑華工社宅へ大山本坑ノ分ニ含ム

第六節 東郷採炭所 一 東郷坑

當坑は大正六年九月以來填砂採掘法を併用し七年一月舊坑整理一段落を告げ斯くて漸次出炭増加を來し大正六年度末に於ては前年度末一日出炭五百噸より一躍一千二百噸となり大正五年五月以來の舊坑整理と充填採掘準備の爲減少したる出炭額を恢復するに至れり
然れ共大正七年度に入り炭質脆弱のため高落潮々として起り多少にても空氣の浸入せし部分は殆んど發火せざる處なき状態にて大正八年度中に於ける自然發火箇所は實に前後四十三箇所及び而も自然發火に際しては炭柱弛緩の爲密閉のみに依りては防火の目的を達すること不可能なるを以て多くの場合密閉後一々注砂充填又は泥水注入を行ひたり而して之が爲め著しく坑内進展を阻止せられ出炭を減殺するの結果を招來せしことを俟たず

茲に於て再び坑内大整理の必要を生じ大正九年度初頭に於て斷然作業計畫を改め從來坑内自然發火に悩まされたる堅坑々底零片以下舊坑の全部を充填することに決し同年七月よりこれが實施に著手し年度末迄に東部七片西部は四片迄は充填し殆ど其整理を了へ従つて自然發火も漸次終熄するに至れり

如斯採炭箇所を縮少したると同年十月より下風坑補強工事を施行したるとに依り一時著しく出炭能力を減殺したるも同年十二月前記補強工事の竣成と共に東部零片東上二片及西上四片に採炭面延長三十米乃至六十米を有する長壁式採炭法の採用實施せられたる結果作業を局部に集中し得たると運炭通氣上利すること多大なりしとに依り出炭漸次順調に復するに至れり大正十年に於て東西兩部共四片迄水没せしめたるも後泥土沈積と共に水面漸次上昇し來り十一年一月末に於ては第二卸二片以下を沈澱池と爲すの已むなきに至れり其後東一卸及同二卸は共に一半片以下、西部は下部三片以下水没したるを以て採炭は主として零片以上に求め西第一昇揚機として揚柏壘坑十八片にありしものは大正十二年四月より同坑十六片に移し捲卸の能力を増大すると共に採掘範圍を擴め又東第二昇揚機も基礎の變形を來したるため同年十一月揚柏壘坑十九片に移轉し是亦能力を増大して採掘の範圍を擴張せりこれより先き大正九年十月坑外上下兩風坑間に採炭用空氣壓搾機裝置に著手し翌十年七月竣成運轉を開始せり

排水 大正七年上風坑底に二百立方呎電氣唧筒を設置し同年九月より運轉を開始するとともにこれ迄久しく水没の儘放置せられたりし西十四片以下の揚水のため二百立方呎の電氣唧筒二臺を一時西十二片に假設し大正八年二月より運轉を開始せり其後西部進展の結果從來西部十二片に取付のりし唧筒のみにては揚水不可能となりたるに依り大正八年四月二百立方呎電氣唧筒を増設して運轉を開始し次で同月東部に六十立方呎電氣唧筒二臺を新設して之が揚水を全部十一片替より前記西部十二片唧筒に送水することに排水系統の變更を行へり從來東部より西部に直接排水しつゝありし唧筒を撤去し排水は凡て唧筒に依らずして東部より十一片替を通じて西部に自然流下し西部十二片に取付ある唧筒に依り八片迄揚水し更に同所假設唧筒に依り堅坑底に揚水することに排水系統を改め其の結果として各所主要唧筒の移動を行へり

大正十年十二月より東西共四片迄を水没することし西第一卸七片半に据付の唧筒を撤去せしも其後充填水に不足を生じたるため二片以下を沈澱池となし尙各所に沈澱池を掘鑿して充填泥水を沈澱せしめ西部三片半に唧筒二臺を据付け零年以下の排水に備へたり大正十二年十

月西下部第一卸東三片に半永久的仰筒座を新設し六十立方呎仰筒二臺を、次で東第一卸一半片に同型仰筒一臺を据付け運轉を開始せり
 昭和元年度末に於ける坑内湧水は一分時約二立方米なるも充填用水を合し一分時の排水量は三立方米九に達す而して其排水に使用する仰筒は電氣五百五十馬力、水頭三百四米、一分時の排水量五立方米六の能力を有するズルサーターピン仰筒二臺其他數臺の小型仰筒を有す
 通氣 本坑の通氣は大正三年三月通氣系統變更以來久しく順調に經過し九年度に於て零片以下舊坑の充填整理と傾斜拂の實施とに依り益々良好に趣き今日に及べり

現在本坑の通氣は上風坑に設置せる扇風機(ラトリー式蒸氣四百三十六馬力、一分時の排氣量八千五百立方米)の排氣運行に依り入氣は下風坑を下り通ねく各坑道に分配せられ最後に上風坑を上昇して坑外に排出せらるゝものにして冬季嚴寒に際しては坑内溫度調節のため下風坑に蒸氣鐵管を裝置して入氣を温め盛夏の候に於てはこれと反對に入氣冷却法として下風坑口に噴水を裝置す又炭塵爆發の虞ある箇所には岩粉棚を取附炭塵爆發の際には前記棚の上に撒積する岩粉を撒散して發火を防遏する裝置を爲し尙ほ必要に應じ爆發豫防として岩粉撒布及撒水等を行へり

運搬 大正六年度に於ける運搬は下風坑のゲーヂ運轉の外東添卸の十馬力蒸氣捲揚機、西片卸の二十馬力電力捲揚機、北大馬路東西のクリーパー、東第一卸の百馬力電氣捲揚機、上風坑のゲーヂ運轉等従来の設備を繼承して大正十四年度に至れるが此年八月西上部の運炭を圓滑ならしむるため西零片樓十七半昇に第二昇の掘進に著手し昭和元年六月完成七十五馬力捲揚機を据付け九月運轉を開始せり
 十四年十一月東第二昇東第一昇間の運炭を便ならしむる爲樓十四半昇の位置に東中昇の掘鑿に著手し昭和元年三月五片碧まで完成し五十馬力捲揚機を据付け四月運轉を開始せり

昭和元年度末に於ては坑外捲揚機は上下兩風坑々口に、坑内捲揚機は坑内各運搬斜坑々底又は坑口に設置せられ合計八臺あり下風坑捲揚機は英國プレザー・エンド・チャルマース社の製作にかゝり一回に炭車四函を二百七十米の坑底より一分時一回の速度を以て捲揚ぐるものとす

上風坑捲揚機も同一會社製にして最大馬力七百馬力を有し一分時一回の速度にて炭車二函を捲揚げ得るも現在此機は石炭運搬に使用せず主として人及坑木の運搬に充て尙前記兩機には何れも安全裝置を施せり

坑内切羽に於て坑掘せられたる石炭は容量約半噸の鐵製炭車に依り夫々最寄り運搬斜坑を南北大馬路に引揚げ或は捲下し更に人力馬匹等に依り下風坑々底に送致し同堅坑を経て坑外に搬出せらる炭車は現在鐵製一千百九十八臺、木製二百二十臺を使用す

楊柏堡坑には選炭設備なきため同坑より採出する石炭は大正二年五月以來總てエンドレスに依り本坑選炭場に運搬せらるゝものとす是より先東第二昇及同第二卸方面より南北大馬路に搬出する石炭は從來請負華工をして下風坑底に送致せしめ居たるも其の距離遠隔にして操業容易ならざるを以てエンドレス運搬の計畫を立て大正八年十一月エンドレス裝置を零片東一昇に設置すべく著手せしも碧下坑道岩石風化のため地勢弛み將來これが保存に困難なるを認めたるにより半途にして工事を中止し老虎臺坑に倣ひ大正九年八月以來馬匹運搬主義を採り漸次馬匹を増加して大正九年八月以來前記東第二昇及同第二卸方面の運搬には人力を廢して全然馬匹を使用することゝなれり坑内運搬方法を根本的に改良し能力を増大せしむる目的と現在使用せる馬匹運搬坑道たる碧下坑道は岩石風化のため將來之を保存するに困難なるを以て下碧玄武岩内に坑道を新設し電車運搬計畫を立て大正十三年八月東十二昇東二昇下風坑昇中馬路昇上風坑昇の掘鑿を開始せり

昭和元年度末主要坑道掘進延長の如し

坑名	用途	延長
下風坑昇	通氣	一九八*
中馬路昇	運搬水	一八三
上風坑昇	通氣	一九八
東二十二昇	運搬捲卸	一八二
東十二昇	同	一五二
東二昇	同	一六〇
西六半昇	同	一六八
西十二昇	同	五〇
上風坑東二十二昇間	主要水運搬	八五二

主要水平運搬
兩坑道聯結

下風坑西六半昇間	六一八
上風坑下風坑間	二〇八
柳筒室	五五
事務所及倉庫	三八
淨水池	一三四
配電室	二七二
西六平西延	五四
計	三九
残	二、九四七
	二七〇

注砂充填 注砂を開始せしは大正四年一月にして現在作業中の坑内東西兩區域に對する該施設に就て之を概観するに凡て當坑及楊柏堡坑の兼用目的を以て逐次建設せられたる楊柏堡第一注砂場、同第二注砂場及東郷注砂場により充填せらるゝものにして當坑專屬の注砂場は存置せず而して第一注砂場は兩坑、東部區域同第二注砂場は第一注砂場よりの充填不能に屬する兩坑、東部方面東郷注砂場は兩坑西部區域の土砂充填を掌るものとす楊柏堡第二注砂場は大正七年一月諸般の設備完成と共に作業を開始し同年度末出炭一日一千二百噸内外に恢復せり然れ共元來當坑の炭質は脆弱にして高落頻出し單に充填密閉のみにては完全に自然發火の目的及坑内發展を施し難きを以て大正九年初に再度の坑内大整理を行ふと共に同年七月より零片以下全部（東西兩區域）の採炭を中止し零片以下既採掘區域を最底部より漸次充填すこととなり同年度末までに東部は七片、西部は四片迄の整理を了し豫定作業を進捗せしが同年十月下風坑は補強工事施行のため一時揚炭能力に制限を加へられたるが同年十二月工事完成後は順調に作業の進展を見たり十年一月五日より東部大斷層附近の充填に對する施設を改善し該方面の注砂管を既設楊柏堡第一注砂場に聯絡せしめ坑内東部區域の注砂を茲に開始するに至り以て現在に及ぶものなり

大正九年度に於て東部零片、上二片及西上部四片に採炭面延長三十米乃至六十米の長壁式採炭法を實施するに至り前年度より續行中なりし各方面の充填採掘片替は西部區域の四、六、八、十、十一、上二、上四、上六片、東部區域の〇、八、十、十二片、第二卸四片等にして

更に同年度東零片奥部及第二卸二片、第一卸二片、東第一昇四片等の充填採掘を、同十年度には東第二昇の一片及三片を、同十一年度には東第二昇東二片、東四片、東第一昇方面の二片、西第一昇三片五片を、同十二年度には西上七片を、同十三年には東上五片西上八片等に逐次及びすに至れり

昭和元年度に於ける充填砂量は二十四萬八百二十一立方米なり

主要 附屬 建物

名	種別	棟數	面積(平方米)	用途
事務所	煉瓦造	四	六五三	採炭所、現場、工作係、華工係
倉庫	煉瓦造及木造	七	一、八二七	機械、鍋爐、鐵管修理、炭車修理各工場木工場三
汽庫	同	一	一、一〇五	用度二、工作、整物、建築
配電所	同	一	七六三	
上家	同	一	九二	
安樂燈	同	一	七八〇	扇風機、上下風坑二、エコノマイザー室、柳筒室
診療所	同	一	二七五	
診所	同	一	二一七	
費組	同	一	一一九	
合宿	同	四三	一〇、二二三	特甲一、甲種一棟二戸、乙種六棟一〇戸、丙種二棟八戸、丁種三棟一七戸
浴場	同	二	六九三	共同浴場
俱樂部	同	三	二四六	俱樂部、道場
華工住宅	同	二	五四三	
附屬家屋	同	六七	八、五九三	華工浴場、食堂
同	同	二	五八七	

